

遠距離競走では競走者は時々歩行しても差支ないから、極めて長距離の競走は自然競歩走になつて来る。故に其の意味を現はす爲に、茲に競走と云ふ名を附けたのである。

其の距離

競足の距離は元より何等の制限はない。又之を平地に行ふも、山地に行ふも便宜次第である。たゞ此の競走は長時間を要するから、運動會當日に學校の運動場に於て行ふことは出来ぬ。若し其の日に之を行はふと思ふときは、朝の内に競走者を校外數里の出發點に集合させ、運動場の某點を決勝點とし、相當の時刻を見計つて發程せしめ、歸着の順に依りて優劣を定めるも一法であらうと思はれる。併し此の技は特に其の日を定めて單獨に行ふ方が萬事都合が宜い。歩走技は體育として極めて有効の技であるから、青年學生をして時々此の競走を行はしむるは、極めて必要の事と考へる。殊に雨雪等の日を選びて此の競走を爲すは、直接には寒暑風雨に對する身體の抵抗力を増し、間接には氣質鍛練の上に尠なからぬ利益を與ふるものである。

歩走技の必要

近來交通の便が多くなつた爲に、普通の遠足すら試みる人が無い様になつたの

は、我國の武力の爲に誠に憂ふべきことである。如何に文化が進んで來ても、いと云ふ時には一國の安危は其の國民の脚力に繫つて來る。歩走術に依りて心身を鍛練するは、個人として、又國民として、實に怠るべからざる事である。此の頃故那阿梧樓先生が安政年間各藩遊歴中に著したる「愛國餘話旅の苞」と云ふ一書を讀んで大に感じた事があるから、左に其の一節を抄録して讀者の參考に供しよう。

毛利家

「毛利の御家には、むかしより早走ならはせ給ふ御掟はべりて、槍木刀の業教ふる家により、教子どもの年の若きものどもを、月の内には幾度も出し侍りしとかや、この御家のしろしめさるゝは、周防長門のふた國にて、君のすませ給ふは、長門の萩といへる處なるが、萩の城より南十六里ばかりなる。周防の山口、三田尻などいへる里まで、かちだちにてひと日にゆきかへる業ならはすを、年老たる人々の豫てより皆道のべにまちつけて、湯あたへ飯たうべさせなどしつゝ、その事ならはす人々をいたはるとに、なんと、其の御内人來原良之よりきゝぬ。鍋島の御家にも、また此のならばし侍りて、毛利の御家と同じさまなるよし、其

鍋島家

仙臺侯

の御内人木原義四郎のものがたりなりき。後十文字龍輔に、このと語りいでしに龍輔の、さては其ならはしの爲ならん、おのが彼の國に遊びける時、いとかひくしく出立し若者どもの、糧こしにつけ、四人五人打つれて、ひたはしりに走行くを見はべりしが、けふまで何のためとも思ひ分ざりしをと、語りはべりてき。仙臺の御家にては伊達の郡の桑折てふ里まで、わか士の馬もてひと日に住還るわざならはすは、つねのことなるが、桑折の里まで、仙臺より、こもまた十里あまり六里も、ありぬべけれど、馬もてすなるとは、吾妻の都にも鎌倉の八幡まうてなどいへるならはしあれば、珍しからぬ業ながら毛利の御内人どもの、はるけき道をかち立にて行きかへるは、などめてたからざらん。

補公の士卒訓

補正成朝臣の、千早の城におはしましける時、冬の夜は盡度めぐりとて、十あまり二たつ三つの男の童より、いそぢまでの御内人どもに、幾度となく、城の外走りめぐらせ給ひ、宋の岳飛とかいへる大將軍は、いくさのいとましいへば、つはものどもに物の具のまゝ、壕などおどり越えさせけりとさく、世にすぐれたる大將軍は、はかなきことにまで、かく御心用ひさせ給ふ事、からもやまともた

堀田家

がはぬものを、吾妻にては、ひとり堀田の御家におのみ、早走のわざさせ給ふと青山下野守の御内人、湊三郎よりきゝてけるが、實にさあたまほしきものになん。

古の名將勇士の用意實に敬慕に堪へざる所である。國士を以て自ら許す今の青年も、宜しく此の心を以て心として、心身鍛錬に意を注がなければならぬこと、考へる。

遠距離競走は、餘り學生間に行はれて居ない。山口高等學校、山口中學校、及び山口師範學校の生徒間には、今日でも時々三田尻往復十里、又は小郡(全六里)迄の競走が行はれるのは、舊藩の遺風が尙ほ存して居ると見える。

第六 雜種競走

前記の種類に屬せざるもので、茲に雜種として纏めたのは、二人三脚競走、戴囊競走、及び魁玉子競走の三種である。此の三種は決して餘興視すべきものでない。皆一種の走法に熟せしむる體育手段である。

二人三脚は、甲乙兩者の全く別人の筋肉を共働せしむる訓練を與ふるものであ

二人三脚競走
魁玉子

る。此の技を行ふときは、甲者の左脚と乙者の右脚とを、踝及び臍にて縛り、甲は其の左手を乙の肩に懸け、乙は其の右手を甲の肩に懸け、歩調を揃へ、飛躍する心持にて走るのである。脚を縛るには成るべく緊しく縛る方が宜い。

近頃某校の競技番組中に、三人四脚と云ふのがあつたが、これは競技者が皆極めて能く練習を経て居らないと、審判に困るだらうと考へられる。座輿としては兎も角、少しく物好きに失する傾がある。

蹴毬及び匙玉子は競技者をして成るべく上體を動搖させずに早く走ることに熱せしむる利益がある。此の競走には下げ腰走法が最も適して居る。小學兒童等に幼時より此の走法に熱せしむるは、後年に至りて種々實用上の便宜を得せしむる利益がある。宜しく奨励すべきである。

以上競技として採用すべき各種の競走を述べた。これより次節に移りて其の練習法を説明しよう。

第三節 競走の練習

競走の練習は平素の心懸けが基である。故に平素成るべく歩行を勉め、又時々遠足を試みて、脚の筋肉を鍛練して置かなければならぬ。平素歩行を勉めず、競技前俄に練習をしても決して良結果は得られない。

此の故に、競走の練習は先づ平素の歩行に依りて脚力を養ひ、競技前の練習に依りて體勢を作り、技術を練り、而して後、始めて競技場に向ふべきである。

第一 競技前の練習

競技前の練習は、主として體勢を作り、走法を復習するを目的とすべきものである。而して此の練習期間は、平素の鍛練の度に依るべきは無論であるが、先づ少くとも四週間以上六週間の練習をしなければ、充分の訓練を経たとは云ふことは出来ぬ。即ち平素各種の運動に依りて絶えず體勢を養ひつゝあるものは、四週日の練習にて十分の状態を具へ得るけれども、然らざる者は單に體勢を作るが爲に、二週日位は餘分に費さなければならぬ。

練習の注意

練習期間

練習と勉學

此く云へば、學生の身を以て四週乃至六週の間、日々競技の練習に多大の時間を費す如きは、學業を廢するにあらざれば到底爲し得べからずと云ふものがあるかも知れないが、決してそんな憂はない。此の期間の始め三分の一は、専ら脚力を鍛へ體勢を作るにあるから、日々一時間位の歩走、又は二時間位の歩走をして居りさへすれば宜いので、爲に勉學の時間を奪はるゝ様なことはない。此の位の時間は寄宿舎か下宿で、何もならぬ馬鹿話をしながら、毎日空しく費して居るのである。夫から残り三分二は、重に技術を練習するのであるが、これとても朝夕合して二時間もあれば充分である。其の他は此の期間の土曜日又は日曜日に稍々長時間の遠路歩走を試る丈で充分である。此の外日々種々の用便の爲に出歩く折を利用すれば、疾歩又は徐走等に依りて脚を鍛ふる機會は澤山ある。

競走練習の順序や方法は、競技者各自の智慧競べに屬すること、誰にも適當する一定の法としては素よりある筈がないが、初心者爲に大體の方法を述べて見れば、

第一 短距離練習

練習の方法準

疾走

短距離競走では無論疾走の走法に依らなければならぬ。而して此の疾走は呼吸を閉止して居なければ力が抜けるものであるから、成るべく呼吸を閉めて走ることを勉めなければならぬ。又此の疾走中は拳を緊握することが極めて肝要であるから、若し空拳で充分握り詰められなければ、ビール壺の栓の如きものを握るが宜い。

又此の疾走の練習には歩度を伸ばすことを勉めず、歩数を増すことのみを全力を注がなければならぬ。

第二 發走

短距離競走の勝敗は、發走の巧拙に因りて定まることが多い。故に短距離の練習には最も發走の復習を勉めなければならぬ。中距離、遠距離では發走はどうでも宜いが、此の發走練習は神經訓練法として此の上なき室外教育であるから、矢張り何人も此の練習をするが宜い。

發走のときは人に依りて色々な身構へがある。普通では左足を前にして爪尖を前方に眞直に向け、膝を曲げ上體を前に傾けて體重を全く之に托し、右足は適度

神經訓練

發走

呼吸道いんげん

に後へ伸ばし、爪尖は左足の爪尖と直角になる様に開きて地に踏み着け、扱て用意の令にて充分全身の神経筋肉を緊張して同時に素早く息を深く吸ひ込み、銃聲を聞くや否や、吐く息と共に矢が弦を離るゝ如くに飛び出すのである。此の息は合圖と共に一と口丈け吐きて、直に全く呼吸を閉ぢるのである。此の呼吸に注意せずして息を吐き切りたる時合圖がある様なことがあると、出遅れになる。力士が「ヨイシヨ」の掛聲で立上るのも此の理で、双方が息を吸ひ終つた時でなければ行司は決して合圖を與へない。若し浮つかり軍扇を引かうものなら、行司の失策になる。競走は多人數であるから、合圖者がこゝ迄氣を利かすことは出来な

い。競技者の方で此の注意をしなければならぬことである。發走の練習は成るべく度數を重ねる方が宜い。又合圖には「ビストル」が一番宜い。場慣れざる少年競技者が、發走の際呼吸脈搏を亂して沈着して居られないことは先に詳しく述べた。

第三 急走。

中距離以上の競走には、主として急走を用ゐ、中途又は最後の「スバート」の時のみ

急走

歩度の注意

疾走を用うべきものであるから、此の二法とも能く練習しなければならぬ。而して此の急走の歩度と速度との關係は、本章第一節に詳述してあるから、一々其の得失を研窮して、自己が参加すべき競走の距離に應じて、適宜の歩度を採擇すべきである。たゞ茲に注意して置き度のは、何時でも同一步度のみにて練習して居ると、夫れが習癖となりて、競走中に歩度を伸縮した積りても、實際は依然として變はらぬ様になり易いものである。故に練習中は出来る丈け歩度を伸ばすことを専らとして、先づ其の癖を附け置きて、競走中には成し得る限り練習中よりも短縮した歩度にて走り、體力を蓄へる様にすることが得策である。

筋力と肺力

疾走と急走とは走法が全く違つて居る。長短兩距離の優者を一身に兼ねる競技者の極めて稀なのは、全く今述べた習癖の力の然らしむる所である。競走者は日々の練習中に、自己體力と肺力との程度を測つて、己れの實力を知ることが極めて必要である。競走は生理的に云へば、自身の体内に發生する炭酸瓦斯との戦であるから、各人の體質、又は競技當時の體勢の状態の如何に依りて、息切れを來す輕重遲速に自ら一定の度がある。而して競技者の筋力と呼吸力とは

先づ我を知れ

決して同比例に消長するものではなく、多くは筋力餘りあるも息切れの爲に施す所なきに至らしめられるものであるから、最後の決戦期に入る迄は、成るべく息切れを來す如き劇働を戒むることが極めて必要になつて來る。此の故に各競走者は練習中に一分時何百歩ならば、何十秒間にして息切れを來すか、又は何百歩迄ならば何十秒間其の苦に耐へ得るかを實驗し、自己の呼吸力を基として、歩度の長短及び一定歩度を用ゐ得べき距離等を計算し、これに依りて作戰計畫を立てなければならぬ。

二百米突迄の競走では、脚力の許す限り極力疾走しなければならぬ。息切れの事は心配するの要がない。何故かと云へば、息が切れてモ一走れぬと云ふ時には、體は既に決勝線を通り過ぎて居る。半哩以上の競走では、息切れて耐へられなくなる程歩度を伸ばせば、脚が弱つて走れなくなるから、呼吸力の事も又餘り氣に懸けるには及ばない。四分一哩若くは四百米突競走が一番六ヶしいと云ふのは、全く此の體力と肺力との加減をすることが困難であるからである。

第四 手の振り方

手の振り方

手は脚の動作を助くると、肩、胸邊の呼吸補助筋に強固の土臺を與ふる。此の二つの役目を有して居る。故に手の振り方も其の心して練習しなければならぬ。其の要領を述べれば、肘の曲げ方は先に本章第一節に詳述した通りで、兩手を前後に動かすときは、肘を成るべく體より離さぬ様にしなければならぬ。換言すれば、腋の下を成るべく明けぬ様にするのである。若し腋の下を明け、兩腕を體より離すときは、上體の動搖を増すのみにて、脚との釣合が取り悪く、且つ呼吸を助くることが出來なくなる。兩拳は拇指を向き合せるが本邦人の定例になつて居る。

歐米人が手や指を使ふときには、一般に本邦人と反對の筋肉共働をする。西洋の鎗や砲は向ふへ推し、小刀は手前の方へ引く。石を投げるとき、邦人は手を後ろより、頭の上を掠めて投げるが、歐米人は後ろより、下へ股を掠めて投げる。走るとき、彼等は拳を作り、拳を上に向けて手を動かす。此の振り様は眞似て慣れれば吾人にも易く出來るけれども、邦人自然の動かし様は前文の通りである。

近頃競走者中に一種厭ふべき手の振り方を爲すものがある。兩手を鳥が翼を擴げた如くに體の兩側に出して、劇しく前後左右に振るやり方である。聞く所に依ると、此の振り方は、後ろより追抜かんとするものをして止を得ず、側方を迂回せしむる爲に、其の始め何者か、案出したるか一般に傳播し、今日にては何人も之を慥むものなき

に至りたるものだとおぼやかる。置き入るてはいか。

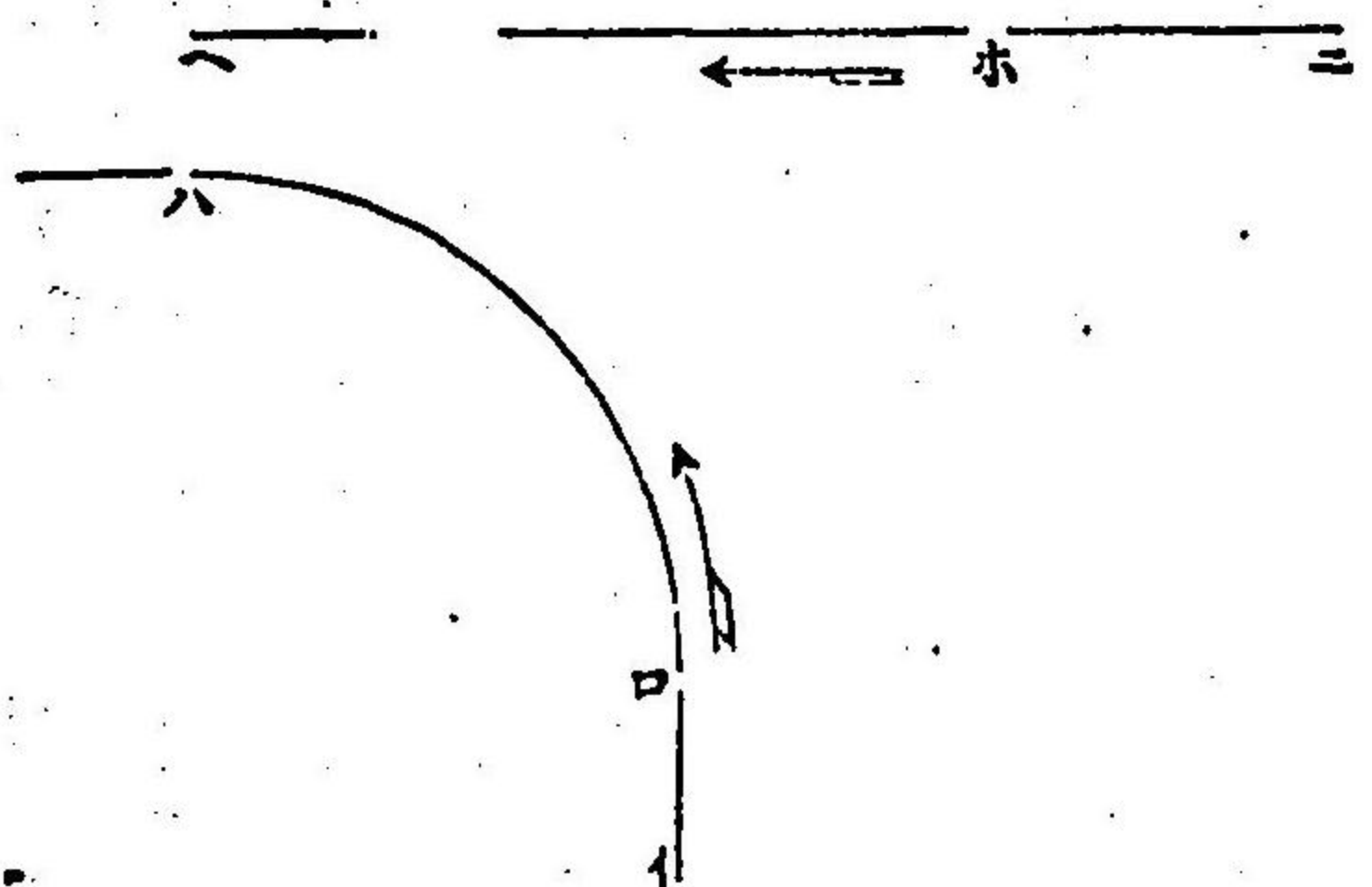
廻り方

第五 廻り角の走り様
競走でも競馬でも、廻り角は時計の針の反對に廻るのが世界各國一定の例になつて居る。軍隊の競馬は時計の針の様に廻はる。而して走路の廻り角を走るのに、は、時別の練習が極めて必要である。
廻り角で速力を減じない様にすれば、自體の遠心力で大廻りをしなければならず、小さく廻らうとすれば勢ひ速力を減じなければならぬ。共に多くの時を費すことになる。故に或る一定の曲線を最短時に通過するには、如何なる走り方が宜いかとて、各自之を實驗して自身に最も適する走法を自得するは極めて必要の事である。

曲線が急なるとき、又は曲線部が平坦なるときは、走者の遠心力に制抗することが極めて困難である。之に反して曲線が緩なるとき、又は曲線部が平坦でなくて、外方に登り勾配になつて居るときは、(東京帝國大學の走路は近頃此く改造した)之に抗し易く、又は之を制することが出来る。併し孰れにしても曲線通過の特別

曲線練習の便法

第四十圖



練習は必要である。

曲線を通過するときは、上體を出来るだけ内方に傾むけ、兩手を内より外に、恰も紙鳶の糸をたぐるときに如くに動かして走るが最良法である。而して曲線部通過の最短時を知るには、時計を以て計測すれば宜いけれども、これは一々其の煩

に堪へられないから、左の便法を用ゐるが宜い。即ち茲に「ロハ」の曲線があつて、其の長さを假に二十米突あるものとする。そこで此の曲線の傍に「ホ」なる二十米突の直線走路を作り、練習者が代る代る二名づゝ出て、一人は「ロ」より、一人は「ホ」より、同時に發走して、「ハ」又は「ヘ」迄の競走を試み、其の遲速を比較して、曲線通過時の適度の速度を自得する参考とすれば、一々煩はしき時間の計測などするに及ばず、充分の實驗を爲すことが出来る。或は此の練習に一步を進めて、「ハ」「ヘ」を決勝線とし、「ロ」「ホ」を

“Handicap.”

適宜(イ)ニ迄延長して、練習者に依りて適宜の平衡率（イ）を附して競走することにすれば、甲には發走及び曲線通過の練習となり、乙には發走及び疾走の練習となりて、實利あり趣味ある好練習となるであらう。

第六 廻轉の練習

旗取りの廻轉、及び戴囊等の下げ腰走法等は、前節に述べたる要領に依りて、反覆練習すべしである。

第七 對時間競走

練習中は日々競走實距離の對時間競走を試みて、其の成績を記録し、體勢及び技術の消長を察して、向後の練習日課を加減して行かなければならぬ。又成し得べくんば、走友交々練習者の步調を算へ合ふが宜い。步調を算へるには孰れか一方の足に就きて復歩にて算ふれば違算が少ない。

以上略ぼ競走練習法の要項を説いた、然れども、此の練習法は競走者自身に考案するが最良の手段であるから、競走者は練習開始前に、某日數間の日課を豫定し、

練習日課

實距離練習

廻轉

天候體勢及び日々の成績に基づきて、臨機其の宜しきを計り、自己の判断に依りて練習の方針を定め、之を實行すべきである。是れ亦た智力の練習として、競走者を益する室外教育實利の一である。

第二 競走者の心得

競走は體力及び技術の争ひの如くに考へられるが實際は體勢の比較に歸することが多い。體格比較的弱く、年齢も少いものが、往々強大の壯者に勝つことあるは、全く此の理に依るのである。最短距離の競走ならば、力か技だけで勝を占むることが出来ることもあるけれども、中距離又は遠距離になると、單に力や技ばかりは恃むに足らない。どうしても學理的の體勢訓練に依りて、競走に適當なる状態を具へなければ、息切れの爲に技も力も施す所なきに立到り、比較的少弱にて状態良好なるものに勝を奪はるゝことになる。而して五百米突前後の中距離では、先にも述べたる如くに、脚力と肺力の加減が六ヶしいから、競走者は體力、状態、意力の外に、智力即ち駆引と云ふことが必要になつて来る。

競走の結局は體勢の競べ合なり

駈引

其一 駈引。
駈引とは即ち臨機應變の機智頓才のことであるから、先に競漕に就いて述べた如くに、素より一定の法則があるのではなく、又教へることも習ふことも出来るものではない。銘々の智力に訴ふるより外に途は無いのである。けれども此の駈引を爲すに就いて多少参考となる事柄があるから、初心者的心得の爲に重なることを少しく述べて見よう。

其の参考事項

(一) 競走の時間は平素練習の時の方が早い。

平素の對時間競走のときは、練習者は對手に對しての駈引を爲す必要がなくて、専心速度を早むることのみに全力を注ぎ得ると、一には走路を獨占して、自由に最短距離を取ることが出来るから、競技のときよりも時間は早い。

(二) けれどもこれには例外がある。

即ち發走の際、各競技者が何等かの理由で、申合せた如くに「スタート」する時には、一般に速度が早くなる。之に反して一同が發走後緩く出ると、一般が遅くなる。駈引は對手に對する手加減であるから、自然此の様な結果を見るのである。

其の例外

競走時間は練習時よりも速い

老将の滑手段

此の故に老獯なる競技者は、自己の肺心が總べての對手よりも強いと信ずるときは、發走するや否や疾走して他の競技者を釣り出し、これをして成るべく速に息切れの苦境に陥らしめんとする者がある。對手が孰れ劣らぬ老武者だと、中々其の手は喰はぬが、初心の者は必ず此の軍略に引かゝる。此の手段は折々數校の選手競走に用ゐらるゝことがある。譬へば茲に五校より二名宛の選手を出して競走する場合に、某校の選手が申合せ、次位の乙を犠牲として、此の引つけ役を命じて始めより疾走せしめ、他校の選手が脆くも此の策に陥りて見切れの爲に苦悶し始むるを窺ひ、始めより力を蓄へ來りたる甲は、突然當るべからざる勢にて「スタート」して、首尾克く第一着の榮を占むるのである。此の手段は競馬などには常に用ゐられる。中々油断は出来ない。故に老巧なる競技者のみの競走には、人々互に用心ばかりして居て、往々決勝線近くまで劇戦を見ることがある。かかる場合に處して萬全を計るには、唯々對手に倍する體勢訓練に依りて、所謂我が不可勝を爲し、自力の恃むべきに安んじて、悠々他の小策を冷笑しつつ、走り得るまでの實力を養ふて置くより外に途はない。

競馬の常套手段

走者の速度は
鐵砲玉的なり

(三) 努力は體力の衰弱を示すものである。
次に競技者が忘れてならぬことは、此の標題の通り決勝に近づき、意力を以て筋肉を叱咤して努力するとき、最早や體力が衰へたる時であると云ふことである。

此の事は氣の附かぬ人が多い、多くの競技者は競走中の體力を蓄ふる爲に、發走後成るべく徐走し、半途頃より漸々速力を増し、最後の全距離三分一に至りて、始めて全力にて疾走するを常とし、而して自身には其の速力が徐急、疾と漸次増大するものと信じて居る。著者自身も亦此く信じて居つたのである。然るに其の後數十の人に就いて實驗して見ると、實際は全く反對の結果を呈して居て、走者が如何に始めより力を蓄へて居ても、其の速力は銃丸の如くに次第に減じて行くものであることを發見した。走者は始めの三分一は徐走した積りて居るが、實際は此の時が一番速力が多い。次の三分一では走者は次第に速力を増した積りて居るが、實際は徐々に減少して来る。最後の三分一では走者は始めて蓄へ來りたる餘力の全部を盡して、最大速力で走つた積りて居るけれども、事實は全く之に

其の理由

反して、速力は著しく減じて居る。何故此く不思議な結果を見るかと云ふ事は説明に難からざる所である。即ち走者は自己努力の強弱を以て速度を測る標準とするの誤に陥つて居るからである。始めの約三分一は走者新鋭て意志の努力を要さないから、速力は少ないと誤認して居る。次には稍々意力を用ゐるから早くなつたと思ふて居る。最後には最大の意力を用ゐるから、最大の速力が出たと信じて居る。然るに此の意志活動の微弱強は、筋肉新鋭の度如何に關係して居て、筋肉新鋭なるときは意の刺戟は微て宜い、意の刺戟を強めるのは筋肉が少しく弱つて來た爲で、最後に極度の意力を盡して之を刺戟するのは、筋肉が漸く疲れて來た爲である。此の關係を更に言ひ換へて見ると、

- (イ) 意力が微だと、自分では緩くつり走つて居る積だけれども、筋力が新鋭であるから、實際の速力が多い。
- (ロ) 意力がを少し強めると、自分では少し早くなつた積でも、筋力が衰へかけて居るから、實際は速力が減ずる。
- (ハ) 意力を盡して、スパルトすると、自分では最大速力で走ると誤認するけれど、

ども筋力が既に衰退して居るから、速度は著しく減じて居る。と大體こゝ云ふ結論を爲すことが出来る。故に競技者たるものは、意志の努力は速力に反比例するものなることを忘れず、平素練習の際、勉めて自身の呼吸の工合、及び體軀の各部の肉感の工合に依りて、速度を測り得る習慣を養ふことが極めて肝要である。

(四) 始めより先頭を争ふべき場合。

百米突競走では、發走の際より先頭を争はなければならぬ。二百米突では、必ずしも先頭に立つを要しない。但し廻り角の位置に依りては、始めより先頭を争ひて曲線通過の最徑路を取るが宜い。

(五) 先頭を譲るべき場合。

中長距離では自身大に恃む所あるの外は、先頭に立つは考へものである。殊に他校等の從來面識なき對手と競走するとき等は、寧ろ他に先頭を譲りて、自身は常に之に尾走する方が宜い。但し此の場合に於て、餘り後れると抜けなくなる事があるから、いくら緩つりしても先頭より人數でならば三人目、距離でならば二

先頭を争ふべき場合

反對の場合

追抜くこと

三步以内に尾行しなければならぬ。

(六) 追抜くこと。

尾走中隅角を通過して直線路に出た時が、追抜きを試みる好時機である。

追抜きの際、スパートは疾走を用ゐ、又は急走の歩度を伸ばすときもある。而して此の追抜に要する時間、又は距離は、本章第一節に掲げたる諸表に據りて、略ぼ計算が出来れば、實際に於ては先頭者が横目で後者の手を見付けてから、後者の體が前者に平行する迄、僅か十歩内外の間に其の位置を換へて仕舞ふのである。これは前者が後者の體を自己の正横に見るに至ると、意力が頓に衰へて俄に速度が減ずるが爲で、後者の速度が前者に比して甚だしく懸隔する爲ではない。故に追抜きは前者と并進する迄、スパートすれば大概目的は達される。けれども前者が老巧者で、所謂佚を以て勞を待つ、の軍略を運らし、充分後者を苦しめて突然、スパートして逃げ去る如き者に對しては、僅々の時間に之を追抜くことは出来ぬ。是非とも數十米突間の劇戦をしなければならぬ。

(七) 廻り角。

廻り角

廻り角は戦ふべき所でない。此處では追抜かれる氣遣がないから、速力を緩めて息を休めても宜い。又此處で追抜かふなど、する愚策を取つてはならぬ。

戦地戦時

(八) 戦の地と時とを知ること。

これは最も大切である。故に未知の走路にて競走すべき競技者は、其の實地を視るか、又は測量圖に就いて走路の形、大さ、幅、發走線、決勝線の位置、廻り角の形等を熟知して置かなければならぬ。又競走の時刻も、凡そ何時頃になると云ふ事を知りて、豫め食事等の都合を計らなければならぬ。

自校の競技會ならば、これ等の事は分り切つて居るけれども、他校へ來賓として参列し、又は聯合競技會に参列する時等は、此の注意が最も必要である。故に主催者たる役員は、他校の競技者を招待し、又は聯合競技會を開くときは、走路の實測圖と、競走の豫定時刻とを、豫め参列競技者に通知すべき義務あるものである。然るに近來は所謂運動會なるものに、職務なく紀律なきものが多い。此等は、競技者を愚弄するの甚しきもの。走路の距離など、一向當てにならぬのが多い。此等は、競技者を愚弄するの甚しきものと謂はなければならぬ。答であるのに、何人も之を慚むものなきに至りたるは、歎ずべきである。

以上初心競技者の参考とすべし。ことを述べた然れども、これはほんの参考であ

雜件

つて、實地に臨みては無論各自の咄嗟の判断に依り、奇正變幻極りなき間に於て、其の機智頓才を活用すべきである。若し夫れ競走必勝の理に至りては、先に競漕の章に述べたる如く、我が不可勝を以て他の不可勝に勝つより外に途はない。

第二 雜件。

(一) 競走者は如何なる場合に於ても、決勝線の前方數歩の處まで駆抜けなければならぬ。決勝線前にて力を抜くのは、第一には、如何にもヤツトの事である。つて來たかの様に見えて醜い。第二には、此處で抜かれることがある。第三には、審判が仕悪い。自己の利益と體面を重んじ、審判者の心痛を思ひ遣る事を、知れる競技者には、是非此の注意を怠らない様にしたいものである。

(二) 決勝後は成るべく、勉めて深呼吸を爲して、呼吸の調整を計るが宜い。苦しければ學友の肩か、或は柵杭等に取りすがりて、呼吸を助くるが宜い。成るべく物を云はぬが宜い。審判者と面識なきとき、姓名を問はれる方も苦いけれども、聞く方も片息で物を云はれると聞き取るに困難である。故に斯る場合には、豫め掌に校名姓名を書いて置いて、審査者に見せることにしたら一般

の便宜からざることを考へる。又競技者は決勝後直に座するは良くない。直に衣類を着け呼吸の全く収まるまでは佇立して時々静かに歩むが宜い。

(三) 服装。

競技者は成るべく身軽な服装をしなければならぬ。シャツの袖丈は肘より二寸程上迄とし、袴も膝より二寸程上にて切るか宜い。袴の長さは詰り走つて腰が曲るとき邪魔にならぬ丈にするのである。地質は何でも宜いが見苦しからぬものを用ゐなければならぬ。往々西洋袴を着けたるまゝの生蠶的競技者がある。運動場を汚すものである。短き袴にて工合悪しくば、寧ろ膝より下二寸程の處にて切るが宜い。

履物は従來は一般に何も用ゐず、跣足のまゝであつたが、近頃ベスト騒ぎが動機となりて、足袋を用ゐる慣ひとなつた。走路面が小砂利雜りの土か、又は所禿げした芝原ならば、足袋が宜いけれども、美しき芝原では足袋では滑べる。跣足か靴でなければならぬ。靴は英語で、走用靴と云ふのでなくてはならぬ。これは極めて薄き紫革製の編上げ半靴で、底も薄き革二枚にて製し、踵を積まざり平底である。爪尖

芝原用ゐる靴の針は長きを忌む

Cinder.

飛躍技の實用

飛躍技は力技なり其の利益

の裏に三本、踵の裏に一本若くは二本鋭く尖りたる簇形の針が出て居て、滑走を防ぐ様になつて居る。此の靴は素足にて緊つかり合ふ様に拵へ、穿くときも素足のまゝで穿く。曾て跣足との得失を實驗したるに、二二〇碼走るに靴を用ゐる方が約二秒早かつた。但し之れは横濱倶楽部の石炭灰と砂とを雜せて固めた走路に於ての實驗である。

第六章 飛躍技

飛躍技は實用多き術である。一々之を例證せずとも、試に山嶽登山未開地跋涉及び震水災等の場合を想ひ出すと此の技の有用なることが歴々眼前に浮んで來るであらう。

飛躍技は力技である。呼吸を閉ぢ全身の筋肉を緊張し、脚部の強大なる發條を急速に反跳せしめて、體軀を或る方向に飛ばす運動である。此の運動は筋肉をして瞬間に全力を以て伸縮せしむる様に訓練し、諸關節を發達せしめ、殊に落下時の

飛ぶと走る區別

震盪に對する脊椎等の抵抗力を増大し、且つ吾人をして巧妙なる全身筋肉の共働に依りて、即時に體の重心を回復するを得るに至らしむる等の利益がある。
飛ぶのと走るの區別は、走る時は體は高く投げ揚られて踏み切りたる時が一番高く、夫よりたゞ自然に落下するのであるが、飛ぶ時は之に反して、體は前方に投げられ、飛行曲線の中央項が一番高く揚がつて居る。又走るときは腰の蓄く曲線と頭の蓄く曲線は、殆んど並行して居るけれども、飛ぶ時は此の二線は並行して居ない。

飛躍技の三種

飛躍技には三種の別がある。巾飛び、高飛び、及び棒飛である。これより此の三技の説明に移る前に、各技に共通の事項を述べて置かう。

此の技の筋肉共働

第一 飛躍の筋肉共働

飛ぶ時の働作を分析すると、こふなる。

(一) 準備

股と膝と踝の關節を曲げ、體の重心を下げる。夫から踵を上げ、肘を少しく折りて

手を後ろへ引く。

(二) 次に、此の曲げたる諸關節を同時に急速に伸ばし、足の爪尖を支點として、大地を蹴りて跳ね上り、同時に兩手を前へ振り出す。

(三) 體は飛ばされて擲物線を畫きて空中を飛行す。體が地を離るゝと同時に上體を丸くし、兩脚を曲げる。而して兩手は引續き最高點に達する迄振出す。體が漸く落下し始むる頃より徐々に曲げたる脚を伸ばし、上體を伸ばして段々と後ろへ反らす。

(四) 爪尖を伸ばしながら腰と膝を充分曲げる。これは震盪を減ずる爲である。爪尖が地に着くや否や、直に曲げる關節を伸ばしながら上體に起し、前方に振り出したる兩腕を垂下して直立する。

飛躍の三要素

第二 飛躍の三要素

飛ぶには三つの要素がある。(一)脚の筋肉の力(二)豫走に依りて得る體の惰力(三)股脛、足首の巧なる共働即ちこれである。

(一) 脚力

力と技

脚の筋肉強大にして、且つ能く瞬時に反ね伸びる様に訓練されて居れば、體を飛ばす力が多いことは云ふ迄もない。

(二) 飛ぶ長さ又は高さを大ならしむるには、飛躍に先ちて數歩の疾走を爲し體に最大の速力の附いた所て之を飛ばさなければならぬ、而し此の疾走の速力又は飛躍の力は、心持よく走り、心持よく踏み切るときでなければ、筋肉の全力を出すことは出來ない。走路が滑つたり、踏み切り點に迷つたりして、少しでも心に躊躇する所があると、忽ち氣が抜け、力も弛んで、思ふ様に飛べない。又此の技は極度の體力を要する力技であるから、發走してより飛び終るまで、全く呼吸を閉止しなくてはならぬ。

(三) 力よりも技術。

飛躍技の巧拙は體の重心、即ち腰と踵との高さの差の多少によりて分れるものである。茲に甲乙の二人がありて、飛躍に依りて腰の揚がる高さは同一でも、甲の踵は尻と同高になるが、乙のは尻より二寸低いとすれば、甲は乙に對して高飛びならば二寸高く飛べることになる。故に飛躍技三要素の内、此の筋肉共働が一

練習法

番重要の關係を有つて居る。

第三 練習

飛躍技の練習法は、歩走技に依りて脚力と速度とを養ひ、次に怠らず本技の復習に依りて、踏み切り及び前記の共働を練習しなければならぬ。此の技術の練習を爲すときは、飛ぶ高さや長さには頓着せず、専ら最良の姿勢を養ふことを反覆練習しなければならぬ。極度の飛躍は日々僅に數回に止めて置いて充分である。若し食りて練習するときは、膝踝等の關節を傷めて、急に回復し難きに至ることがある。

第一節 幅飛び

幅飛び

踏み切り目標

豫走

幅飛びでは豫走と踏み切りが一番大切である。

踏み切りは左足でするのが通例で、右足で踏み切る人は極めて稀である。踏み切りの點には白き手巾又は帽子などを置きて目標とするが宜い。

豫走は十歩内外にて充分である。夫れ以上走つても速度が増すでもなく、且つ遠

方より走つて来る程踏み切が思ふ様に出来なくなる。英米人は踏み切り點より九歩乃至十二歩を最良として居る。先年英米大學の聯合競技があつた時、米國學生は踏み切り點より各自の歩度に歩數を乗じたる距離を測りて、其の處より發走したとの事である。此く注意して豫走すれば、各自に定めたる歩數丈け走り來れば丁度目標の處にて踏み切れる様になる。彼等は「一々、テープ」にて距離を測つたと云ふ事であるが、走路の一侧に尺度を印したる綱でも張り置きて、各競技者の便を計つたらば尙ほ宜からうと考へる。

此の技でも飛躍後充分上體を後ろに反らし、兩脚を縮めて踵を成るべく高く保ち、落下時迄能く此の姿勢を保ち得る程良成績を得るのである。平素の豫行演習としては器械體操の彈道が良い。

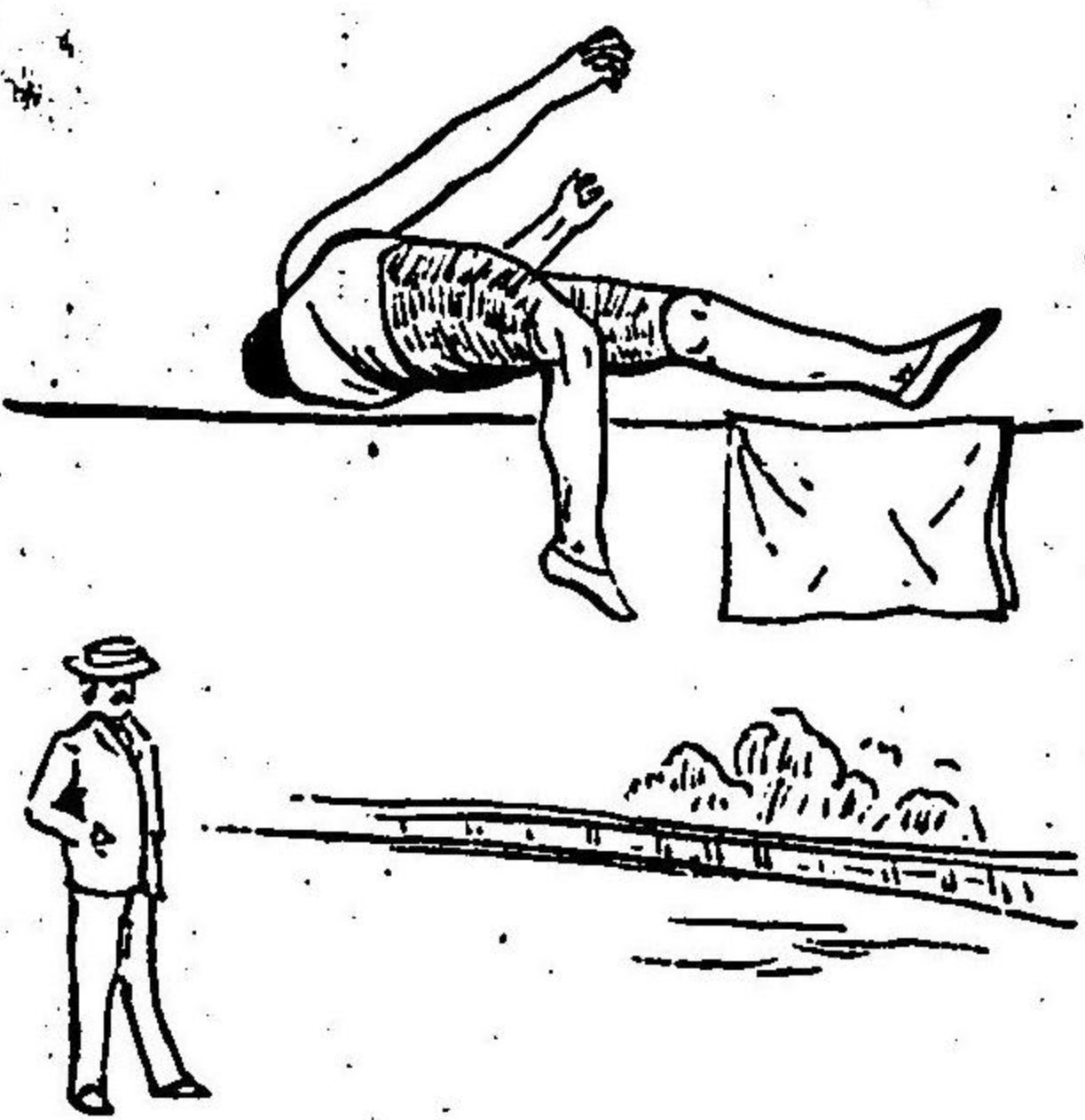
第二節 高飛び

高飛びには二種の飛び方がある。一は標紐(飛び越え紐)を直角に飛び、一は之を斜に飛ぶのである。後者は蘇國流スコットランドと稱し、直角飛びよりも飛び易いから廣く行はれ

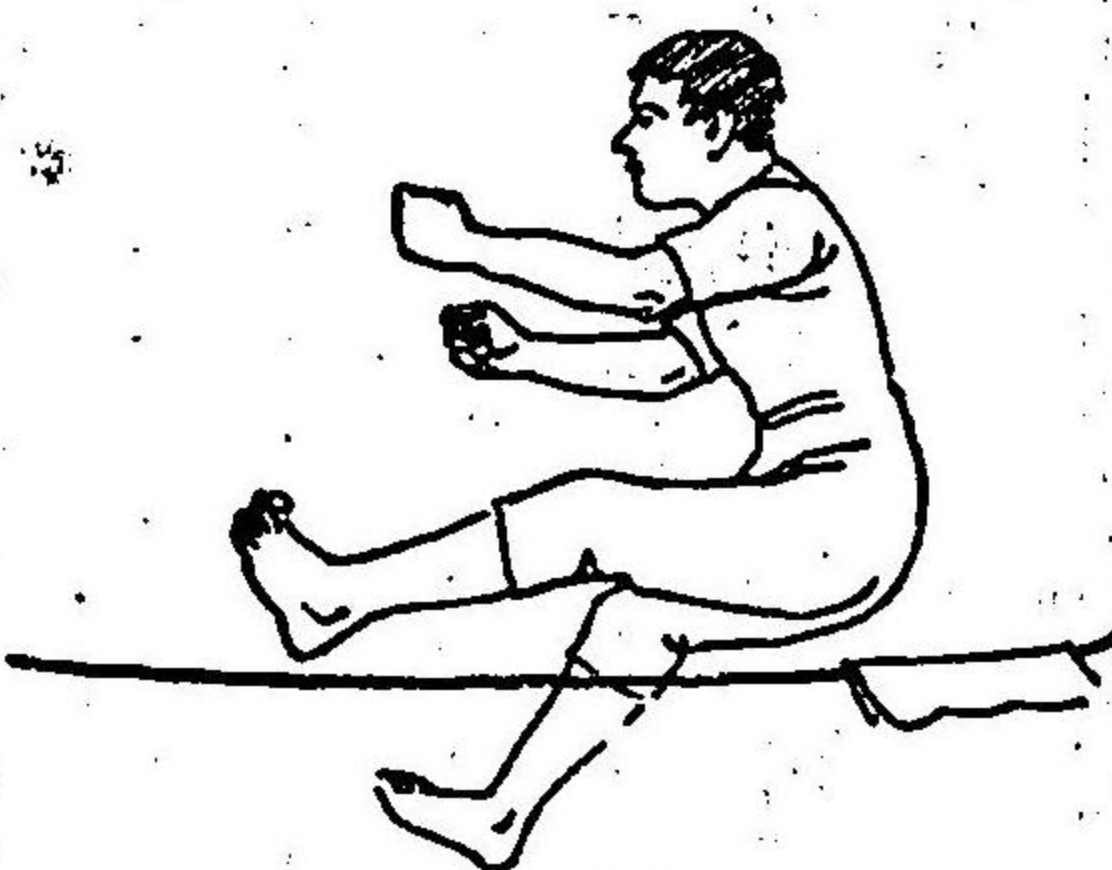
高飛び
"Scotch Jump"
飛び方の種類

各種飛法の得

第五十一圖



第五十圖



水 平 飛 び

直角飛びと斜飛びの異同の點は、直角飛びでは踏み切るときは多量に力がかかるが、踵を尻よりも高く揚げ易いから體の重心は高く揚がるけれども、踵を高く揚げるのが六けしい。斜飛びでは踏み切るときは損になるが、踵を尻よりも高く揚げ易いから、重心の高く揚らぬ割合に高く飛び越えることが出来る。斜飛びが

右 斜 飛 び

て居る。而して之には右斜飛び及び左斜飛びの二種がある。

右斜飛びと云ふのは標紐を右に見て左足にて踏み切るので、左斜飛びは標紐を左に見て右足で踏み切るのである。

高飛びの豫走

今一步進むと水平飛びとても云ふべき飛び方になる。我が身丈よりも高く飛ぶには此の流儀でなければ行けぬ。高飛びにも豫走が必要である。併し此の場合では幅飛の如くに體を前方のみへ飛ばすのでなく、主として上へ飛ばすのであるから、豫走の法は全く一變して來る。

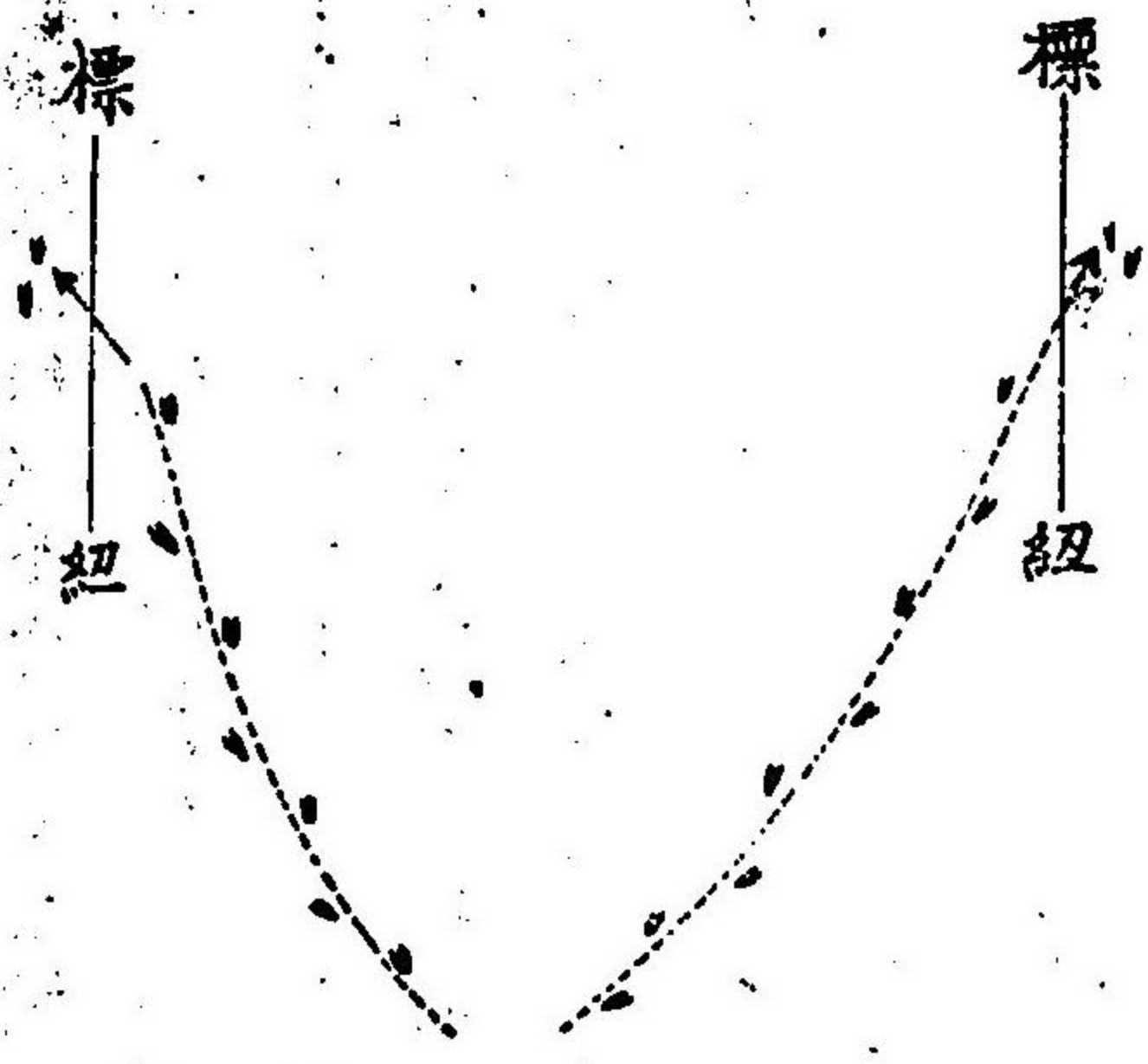
高飛びの踏み切り

幅飛びでは疾走でなければならぬ。高飛びでは體に上下動と前進の惰力とを與へなければならぬから、其の走法は自然に下げ腰法に似たものになる。又高飛びの走路は直角飛びでは一直線であるけれども、斜飛びでは曲線である。これは競技者が體に機を附けつゝ、標紐に近づくと、踏み切りの準備として其の行進路を漸々標紐に並行せしめるからである。又高飛びの豫走は幅飛びよりも短く、且つ其の走り方も始めは徐々として發走し、漸次歩度を伸ばして速力を増す方が宜い。何人でも自然に此の方法を探るは、蓋し人類の天性だらうと思はれる。高飛びの踏み切り點は、通例飛ぶ高さの二分の一丈け標紐の前方に在るを良しとしてある。

高飛びの練習



圖二十五第 び飛面正



圖三十五第 び飛斜右

棒飛び

圖四十五第 び飛斜左

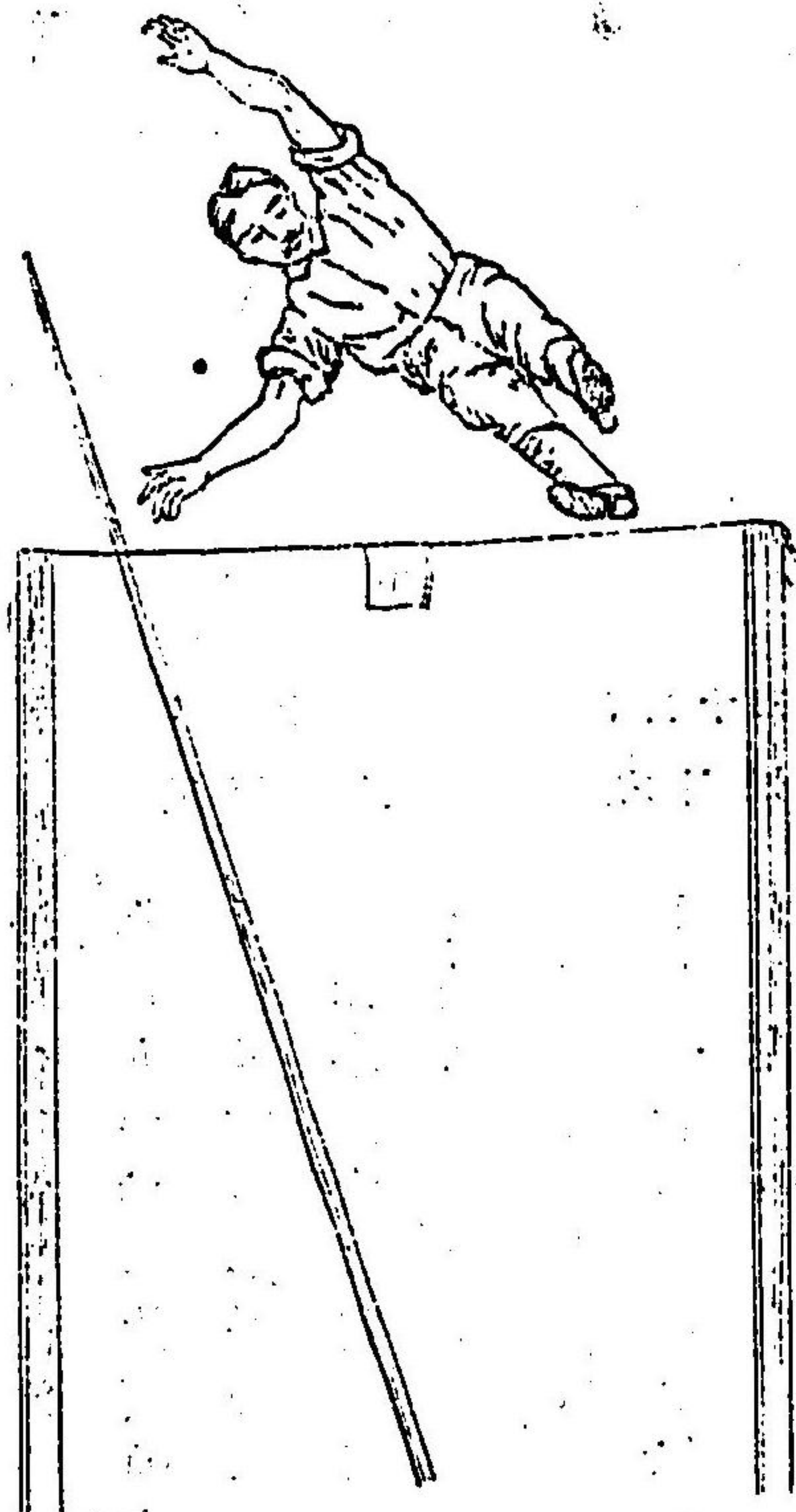
斜飛びの方は直角飛びよりも此の踏み切りの點が比較的六ヶしくない。多くの競技者が斜飛びを撰むのは一に此事が大に與つて居るのである。高飛びの練習は、飛び方の要領に習熟するを主として成るべく標紐を低くし、反覆練習し、漸を以て其の高さを増すが宜い。而して高尺度の練習は一日三四回に止め、多く貪つてはならぬ。

第三節 棒飛び

棒飛びも幅飛び高飛びと同じく一種の技術で、或る高さ以上は平素勉めて練習をしなければ上達することは出

來ぬ。飛躍技は總べて力よりも技の方であるが、此の棒飛びは特に然りである。棒飛びは體の速力と踏み切りの反動とにより、棒を軸として圓形に體を空中に跳ね上げ、棒が直立する少し前に兩肩を基礎として、兩足を高く空中に伸ばして、體を吹流しの如くに横たへ、標紐上を通過するを待つて、兩手にて強く大地を衝き、其の反動に依りて兩腕と體の上部を跳ね上げて、空中の體に少しく前進の速度を與へ、足より地に落下せしむるものである。

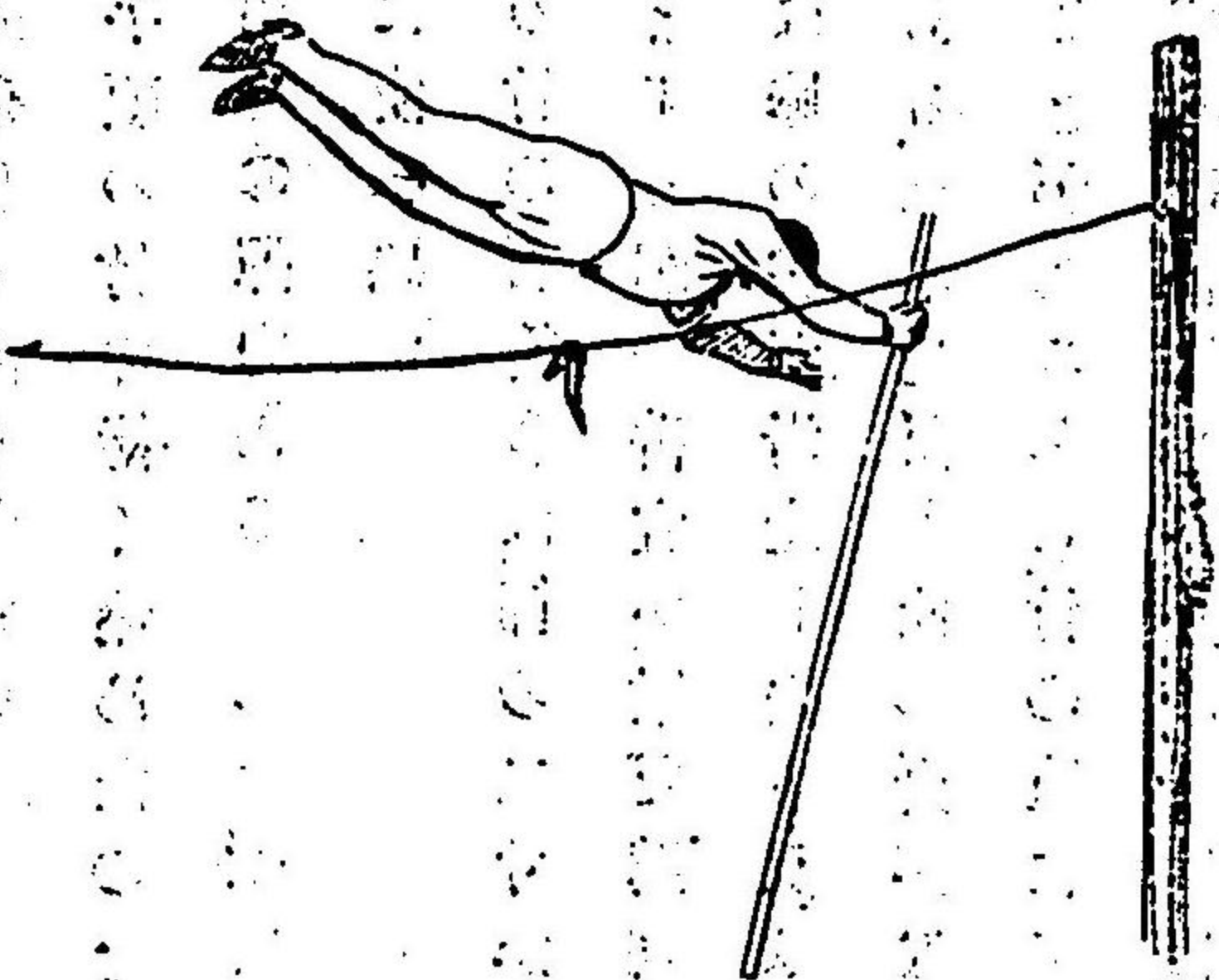
第五十五圖



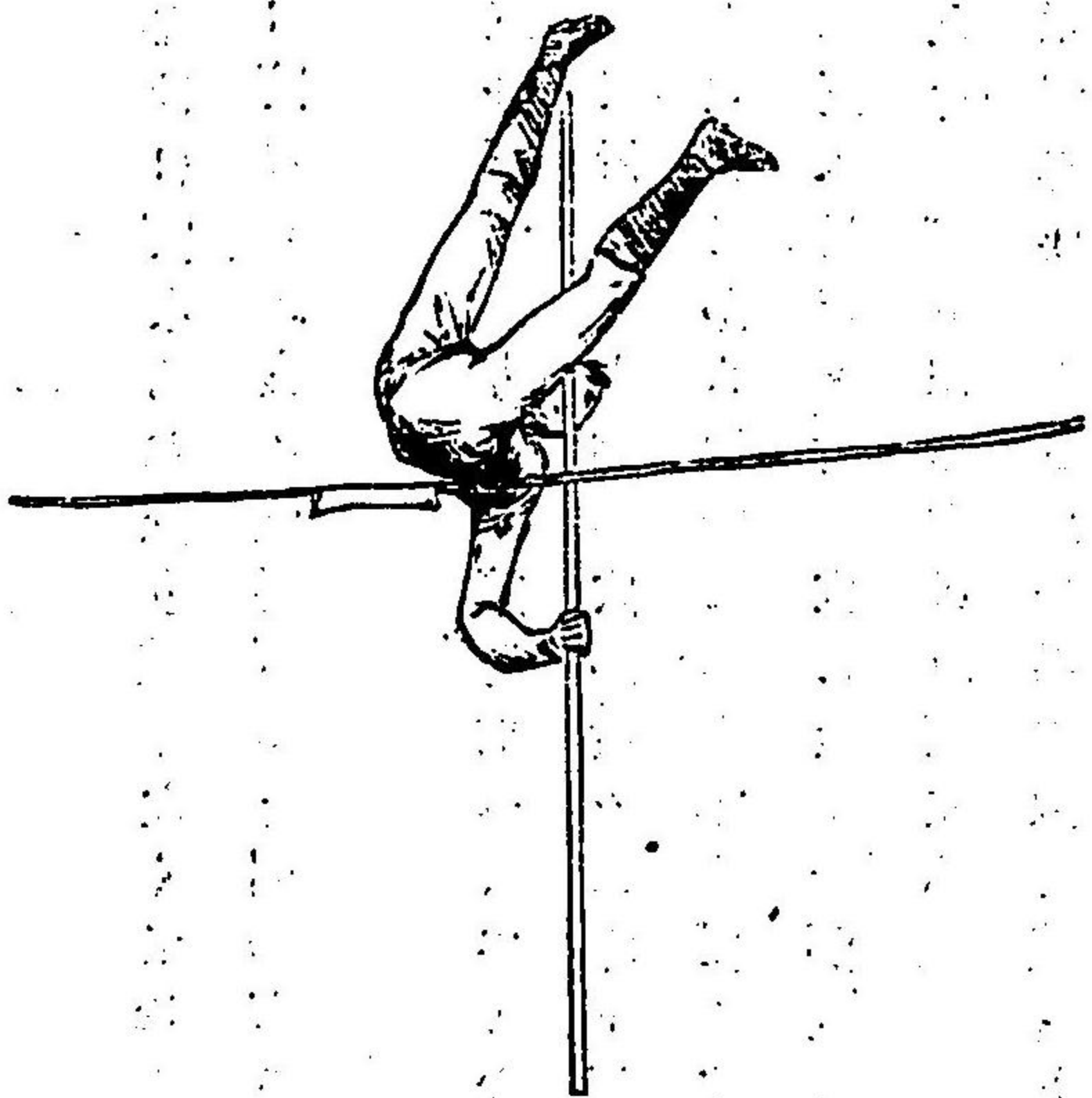
豫走

此の技の筋肉共働は各人區々であるから、一定の法としては別に定まつて居ない。左にシニミット及びマイルス訓練法中より二三の寫眞圖を借用して其の一斑

第五十六圖



第五十七圖



を示そう。

此の技も豫走が必要である。而して此の技に於ては速度を附けることが高飛よ

棒

其の練習

りも必要である。
 棒の支點は少しく地面を凹ませ、遠方より見易き様に石灰末等を穴の中、及び周
 邊に撒布して置くが宜い。
 棒は手頃の竹の能く矯めたのを用ゐなければならぬ。餘り重くなくて腰の強い、
 即ち相當の彈力あるものを撰まなければならぬ。腰の強過ぎると弱過ぎるのと
 は共に使ひ悪い。
 又此の竹の石衝きは節の二寸か一寸五分下で、三方より斧を加へて尖りたる三
 本足とするが一番宜い。唯だ運切りにして置くと、支點の穴が段々に堀り返され、
 終には棒の尖が滑走したり、又は棒が直立してから地中にめり込んだりするこ
 とがある。三本足だと此の憂がない。但し三本足だと、竹の穴に段々土が入つて固
 まることがあるから、竹の筧にて時々之をほぐり出さなければならぬ。
 棒飛びの練習にも高飛びと同様の注意が必要である。又平素の豫行演習として
 は、器械體操の直立竿にて兩腕にて體を空中に横へ、又は逆立ちにて肩腕の筋力
 を養ひ、又は金棒にて彈道の練習をするが宜い。但し此の彈道を練習する時には、

投擲技の實用

脚を曲げるのが早くなり過ぎぬ様注意して置かないと、棒飛(高飛ても)のとき、體
 が標紐を飛び越えたる後、自身の曲げたる足の裏にて標紐を下より跳ね落すこ
 とがある。能々注意すべき事である。
 以上飛躍技の大要を述べた。これより投擲技に移りて其の練習法を述べよう。
 第七章 投擲技
 投擲技も實用多き術である。小にしては鶏を追ふ野犬に石を投げ付けることよ
 り、大にして溺者に浮囊を投げ與ふる迄、不時の應用極めて多きものである。故に
 物を投ぐることに、飛び來る物を受け留むる術は、何人も是非心得て居なければ
 ならぬことである。此の技は諸種の球技に對する豫行演習として、極めて必要な
 ることは云ふ迄もない。
 投擲技は其の運動の性質飛躍技に近似して居る。即ち此の技も筋力筋力及び技

投擲技と飛躍技との異同

術の三要素を必要とすること飛躍技と同一である。而して此の二技の相異なれる點は左の通りである。

- (イ) 飛躍技では自分の體を空中に投げる。投擲技は我が體を以て他物を投げる。
 - (ロ) 飛躍技で主として働かせるのは腰以下の筋力である。投擲技の主働筋は肩から指迄の筋肉である。
 - (ハ) 飛躍技では各種とも豫走が大切である。投擲技では投げる物が重くなる程豫走は少くなる。
- 右の三點を除くの外は、兩技に於ける筋肉共働の性質は殆んど同一だと云ふて宜い。

投擲技の種類

競技運動として普通に行はれる投擲技は、球投げ、砲丸投げ、及び槌投げの三種である。右の外本邦には未だ行れないが、是非採用したら宜からうと思はれるのがある。槍を投げるのである。故に本章には此の技をも加へて置いた。

投擲技の三要素

各投の説明を爲す前に、飛躍技の例に倣ひて投擲技一般に關する事項を述べよう。

第一 投擲技の三要素

此の技の三要素は筋力と惰力と巧妙なる技術である。

- (一) 筋力
投擲の主働筋は肩と腕と手である。故に此の技は腕力が強くなければならぬ。
- (二) 惰力
球又は槍の如き輕き物を投げるときは、豫走に依りて體に速力を附け之を利用する。然れども砲丸槌等の重き物を持つときは、意の如く走れないから、豫走をせずに單に筋肉の最大收縮力と體の重心の上下動とを利用する。
- (三) 技術

投擲技程技術の巧拙に至大の關係あるものはない。此の技の優者が必ずしも所謂腕力家に非らざるを見ても明である。力と技を比較すれば、力四分技六分と云つても差支ない位である。而して此の技と云ふ内には、(一)全身の筋肉を巧に共働

腕力家必ずしも此の技の優者たらず

投擲技の筋肉
共働

せしむること、(二)投げる角度の適度を誤まらざること、を含んで居る。

(イ) 筋肉共働。

物を投げるとき共働を分析して見ると次の如くなる。

- (1) 兩脚を適度に開き、後足に體重を托し、右手に投ぐべきものを執り、手首を反らし、掌を上に向け、肘を曲げ、手を肩に近く、其の後方に据ゑる。
- (2) 次に後足を曲げ、前足を地上に浮かし、腰を下げ、肩を後ろに引き、且下に下げ、後足の脛を屈伸し、上體を上下して、機みを附ける。此の間、前足を伸ばして前に踏み出す用意をして置く。
- (3) 充分機みが附いた處で、後足にて急速に大地を蹴り、體を上且前に投げ出し、下げたる肩を前方斜め上に突き出し、手を顔の右側迄下より斜め上に押上げる。重心上方に轉ずるに隨ひ、前足を地に踏みつく。
- (4) (3)の運動を繼續し、後足を充分に伸ばして、體重を前足に移す。
- (5) 次に後足にて體を上前方に跳ね上げ、同時に右肩を前上方に突き出し、腕を伸ばし、

(6) 次に前足を急に伸ばし、踵を上げて體を跳ね上げ、腕を十分伸ばしながら、反らしたる手首にて最後の力を物體に加へ、空中に投げる。

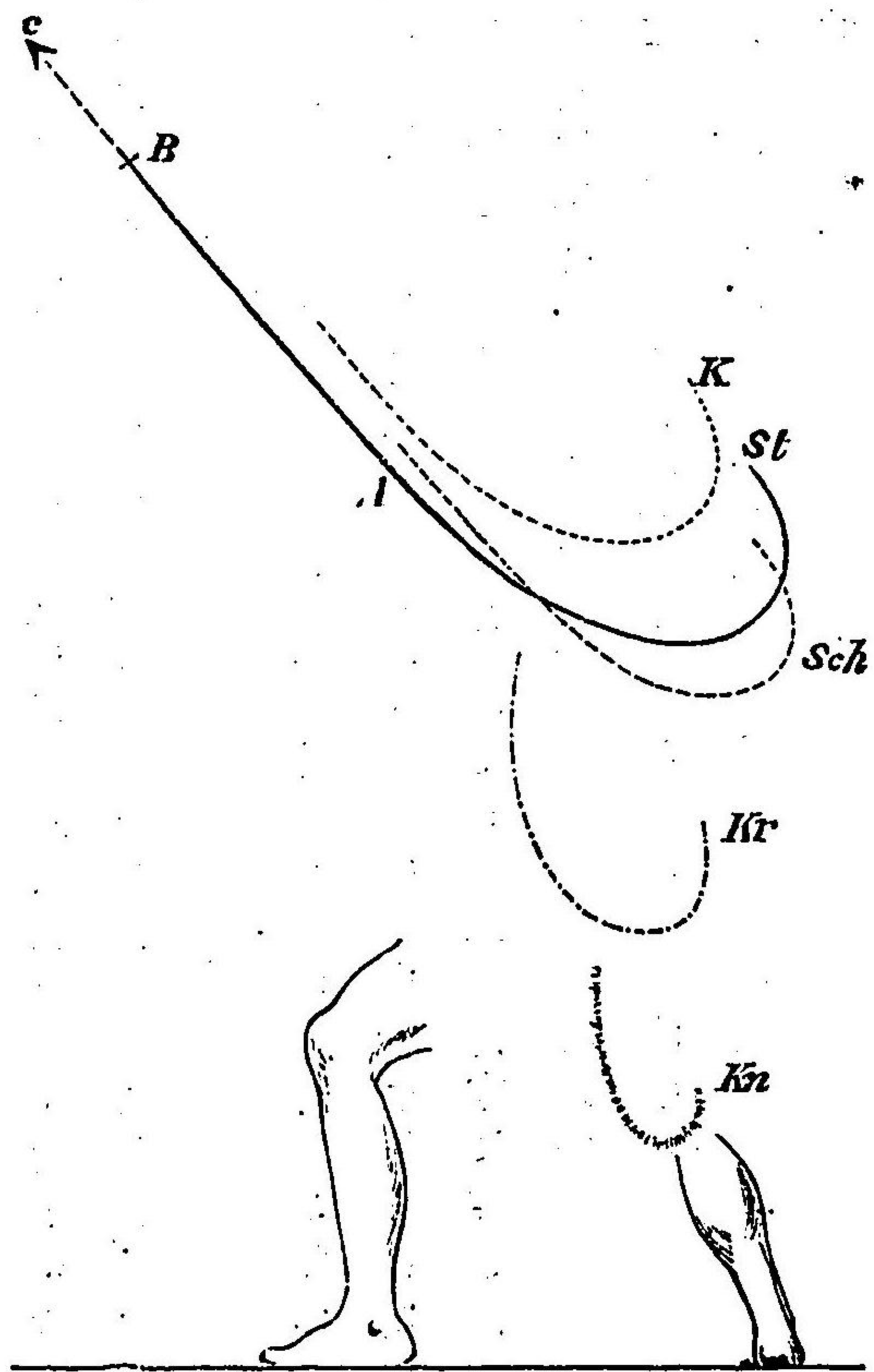
(7) 物體手を離るゝも上體は惰力によりて前に飛ばんとするから、之を防ぐ爲めに急速に後足を充分後方に伸ばし、此の足と兩手にて體の重心を操り、つゝ、徐々に上體を前に傾むけ、前足の脛を折り、兩手を下げ、つゝ、重心を取り、(8)重心定まるを待ち、徐々に上體を起し、つゝ、脚を伸ばし、手足を収めて直立する。

書くと大變長いけれども、實際は僅に二秒時程の動作である。此の動作中筋肉の共働が前記の順序の通りに巧に行かなければ、良成績は得られない。

右の共働の内、右手は必ず我が耳を掠めて、斜め上に前方に突き出さないと遠くへ投げられない。初心の人は右腕を早く伸ばして仕舞ふから、右手は頭の後ろから頭の上を通つて、投げる角度が低くなる。左に訓練法中の原圖を借りて、投擲運動中、頭、肩、物體、腰、膝等の書く曲線を示さう。

(ロ) 投角。

第五十八圖



K. 頭
Sch. 肩
Kr. 腰

Kn. 膝
St. 物體
A.Bc. 飛行線

投角の大小に依りて距離が違ふことは何人も能く知つて居る。どの位の角度が一番好いかは物理書に相談すれば直ぐ分るけれども、實際其の角度を誤まらぬ様にするには反覆の練習をしなければならぬ。力も弱く、技も普通な人でありながら、只だ此の投角の適度なるが爲に投擲技の優者たる人が幾らもある。

體育としての投擲技の効用

力技なり

第二 體育としての効用

投擲技は筋肉の急速なる弾力と、全身諸關節の圓活巧妙優美なる共働とを要するもので、力量を養ひ姿勢動作を活潑優美ならしむる利益がある。又此の技に屬する各種類は、其の働きの細かき處になると、多少筋肉の共働に違つて居る點があるから、各技を合せ行へば體軀の各部に残りなく色々な運動をさせて、筋肉神經を訓練することが出来るのみならず、種々の位置に於ける體の重心を取ることに慣れる。又此の技に於ては、指尖の働きに依りて飛ひ行く物體に廻轉を與へなければならぬから、自然に指尖の訓練が出来る。要するに此の技は筋肉の弾力を増し、諸關節を滑かにし、諸筋肉神經を訓練して鋭敏精緻ならしめるものである。又此の技が諸球技の素養として有効なることは、先に述べた通りである。

第三 生理上の性質

投擲技は力技に屬するものである。故に此の技は投げ終るまで、呼吸を閉止しなければならぬ。

第四 標的投擲

投擲技には單に遠距離に投げるのと、標的に向ふて投げるのとの二種がある。競技運動は元來個人の體力を競ふのが目的であるから、此の第二の方は普通行はれないけれども、此の標的投擲は多くの實用があるから、一の運動として獎勵するが宜からうと考へる。詳しくは次節に述へよう。

其の練習

第五 投擲技の練習

投擲の練習は空手にて前記の筋肉共働を毎節毎に練習し、十分之に熟したる後ち實物を持つて練習するが宜い。此の實物を以てする場合も、成るべくは競技用よりも輕きものにて充分練習し、次に時々競技用よりも却て重きものにて全力練習を爲すがよい。但し此の全力練習は回數を貪ぼると肩の關節を傷めて急に回復しないことがある。

投擲技の際には、極めて虚心で無雜作に投げないといかぬ。氣取つたり、又は特に意力を氣張ると、必ず投げ損ずること請合である。故に此の技は、全く無意識になる迄習熟することが肝要である。球投げは、ベースボール等の際を利用して平素練習すべく、他の技は便宜の空地にて朝夕の隙々に、四五回宛練習するが一番宜

い。又競技前の練習としては、競技者二組に分れ、運動場の中央を境として双方より投げ合ひ、砲丸槌等の落下點を起點として互に投げ返し、斯くして相互の傾分を奪ひ合ふは極めて趣味ある練習法である。

これより各技に涉りて其の説明を試みよう。けれども投擲の働作は身體の各部が連続して一齊に、又は順次に、共働をするから、口や筆で其の説明をするよりも、實地の模範又は寫真圖書に依る方が早い。故に次の諸節に於ては訓練法中の挿圖を借りて説明を助けることにする。

第一節 クリケット球投げ

使用の球
競走

此の技には、クリケット用の球を用ゐるが通例だが、若し之れを得られぬ時は、ベースボールの球でも何でも宜い。たゞ成るべく小くて重いのでないと行かぬ。

此の技には豫走が必要である。右手で投げる人だと投げる時、左足で踏み切るから、走り來つて左足にて踏み止まり、直に先に述べたる投擲技筋肉共働の(1)及

其の走り方
球の廻轉

び(2)の姿勢を取り順次(3)(4)等の要領にて投げるのである。
此の技の豫走は球を持つて居る手の方の肩と腰を引き、體を側面に向け、反對の肩を行進方向に向けて小股に爪尖きて走るのてある。
球は只だ投げるばかりでは行かぬ。必ず之に廻轉を與へなければならぬ。此の廻轉は(一)球の持ち様(二)手を耳の後で構へたるよきの手首の向け様(三)手で頭を掠

圖 九 十 五 第

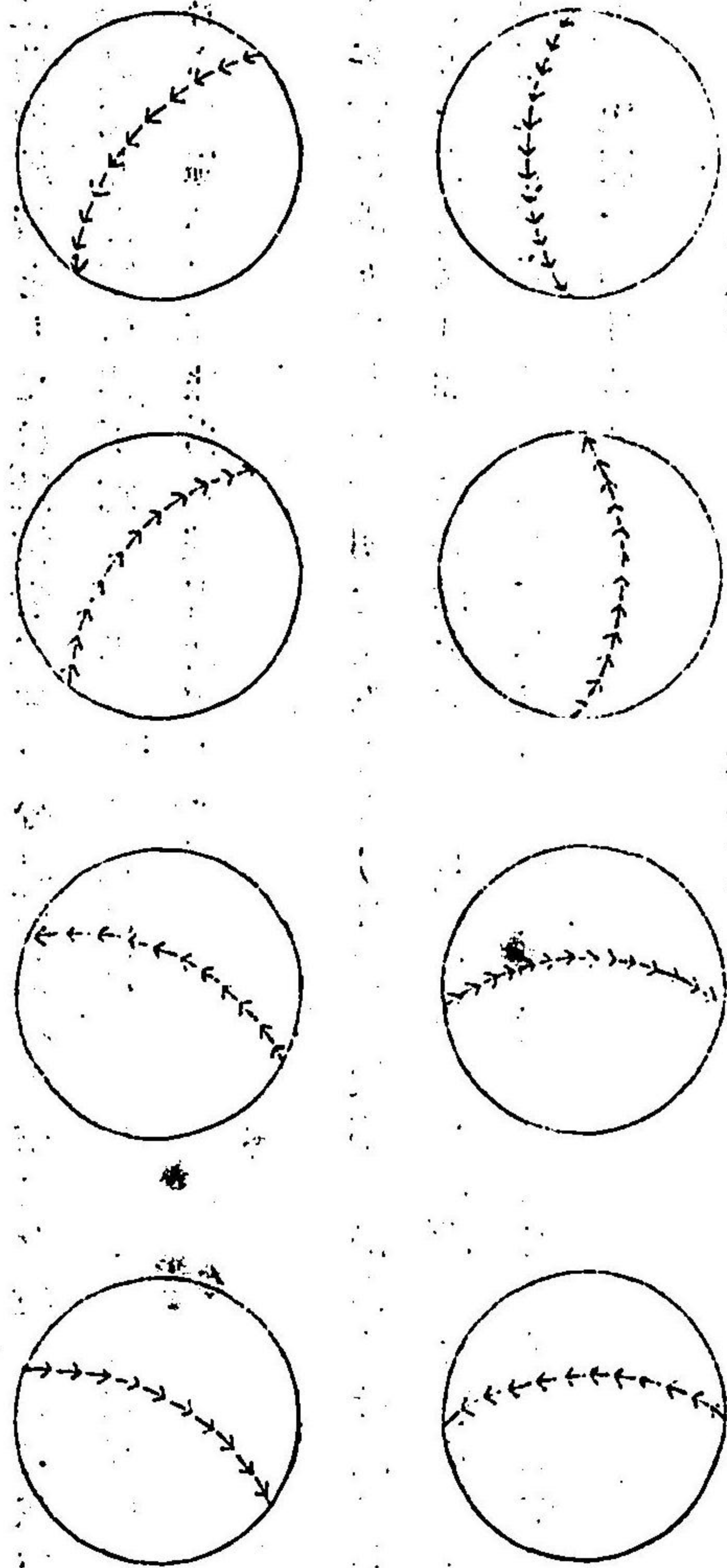
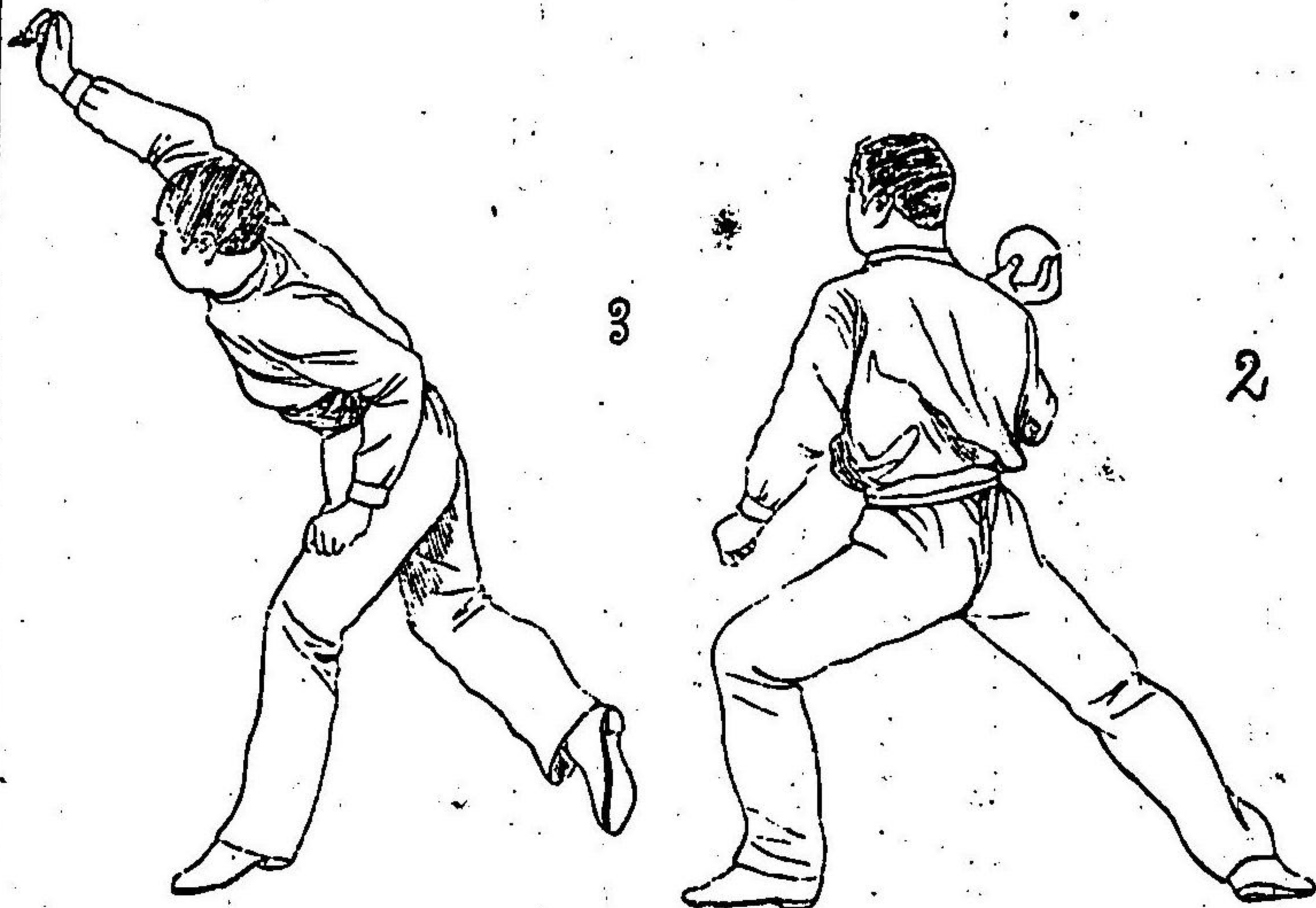


圖 十 六 第

めて前に出す時の捻り様(六)球が手を離れるよきの手首の關節の動き様、掌の向き、指の動かし、工合等に依りて前圖の如く色々になる。



砲丸投げの三法

第二節 砲丸投げ

砲丸投げには、(一)片手投げ(第六十圖)(二)諸手投げ(三)諸手後ろ向き投げの三法がある。此の内て豫走をするのは(一)のみである。

第一 片手投げ

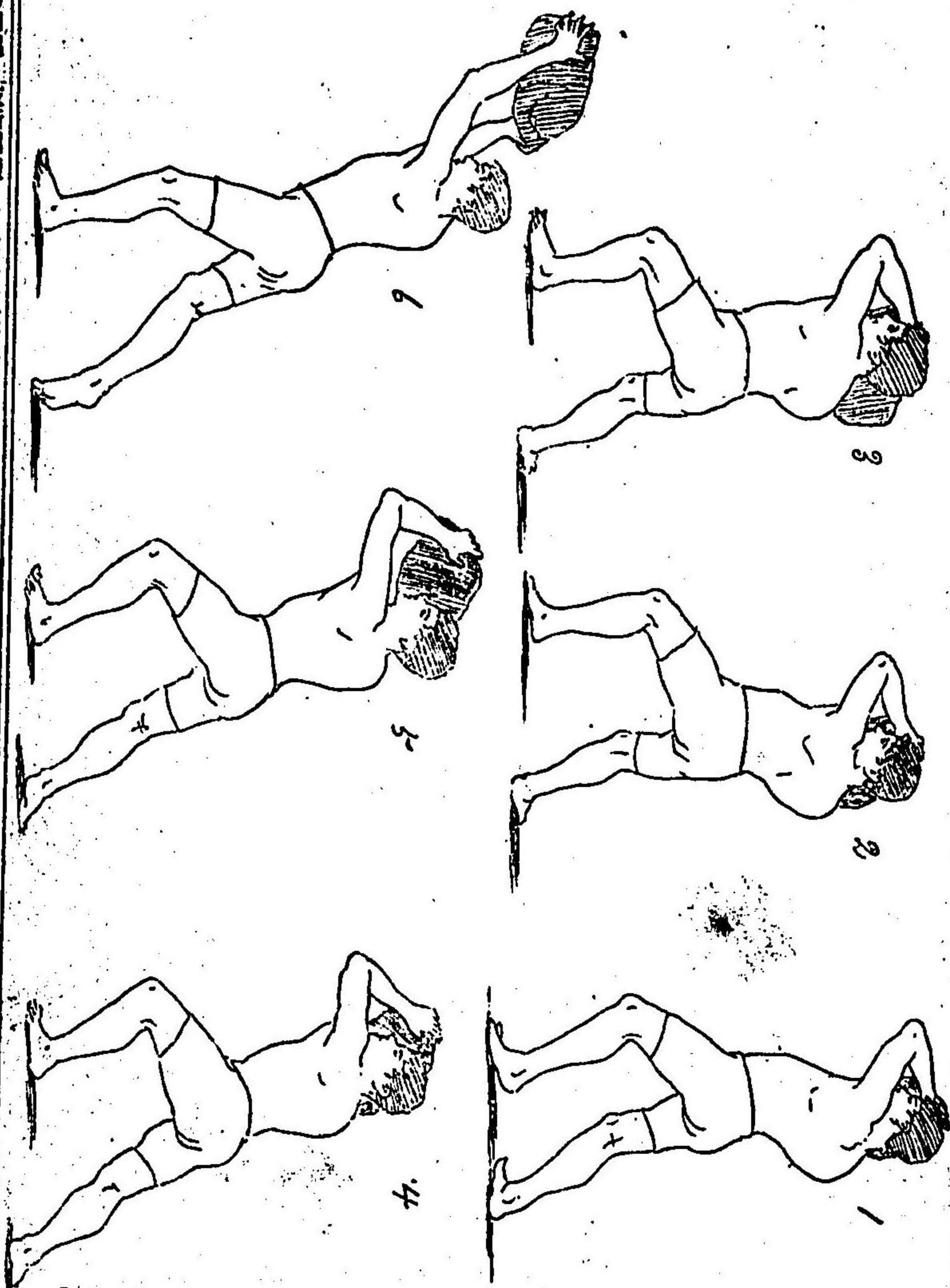
片手投げは前圖の(一)の如く身構へをなし、右脚を曲伸し上體を上下して機みを付け、充分機みが附くを待ち(二)より(三)にて砲丸を突き離し直に右手を下げ左足を後ろへ伸ばして重心を取る。此のとき體が前へ飛び出さうとしたら、左足にて急速に體を僅かづつ跳ね上げながら、體を左の方へ向き直す様にして前方に逸出するを防ぐ。豫走には二法ある。一は數歩走り來りて(一)の姿勢を取り、一は(一)の姿勢にて右の腕を曲げるとき左足を少し前に踏み出し、次に右足を伸ばし體重を左足に托して右足を前方に踏み出し、斯くして少しづつ前に進み出るのてである。

第二 諸手投げ

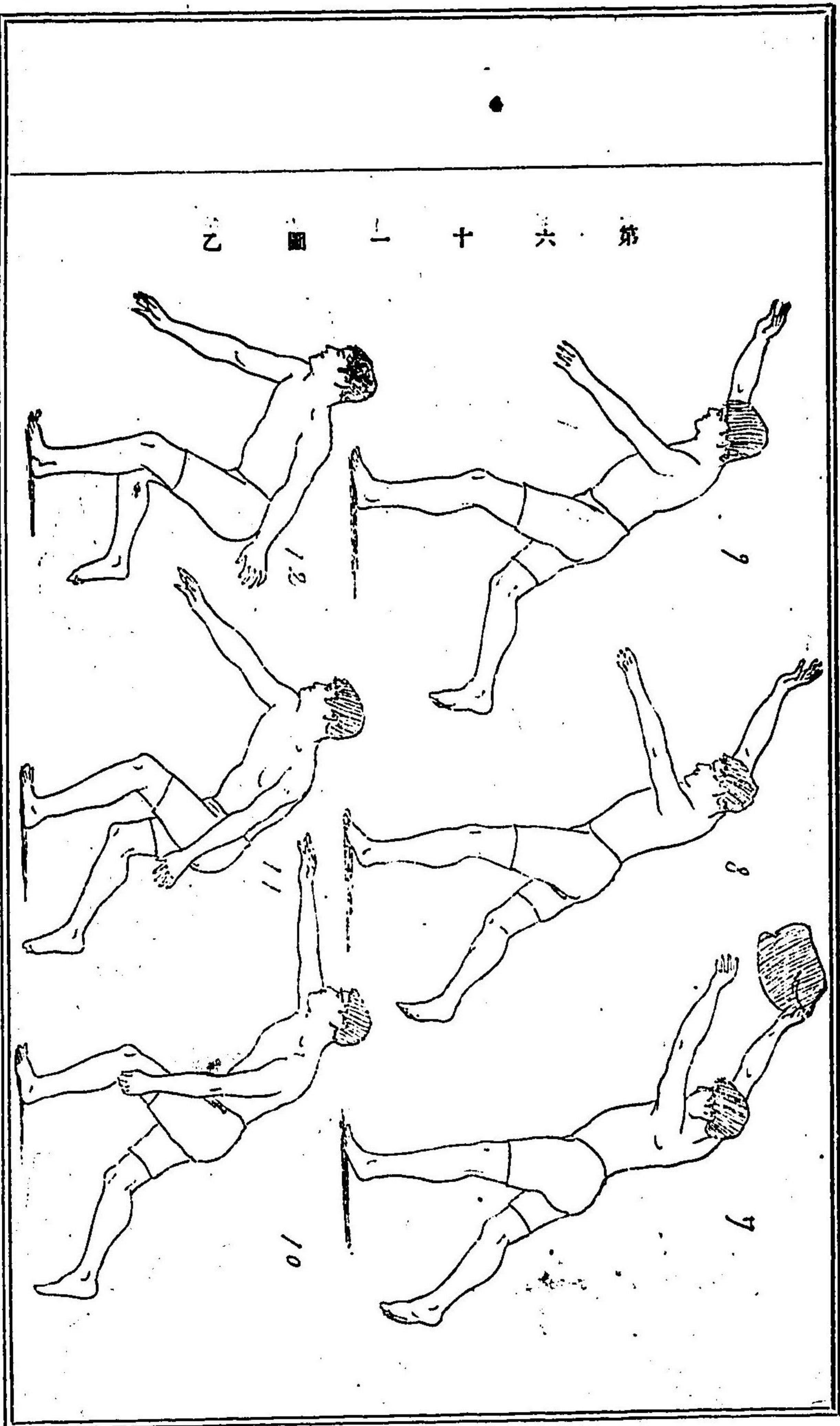
諸手投げには左の二法がある。第一の方は大なる石又は極めて重き砲丸を投げ

豫走

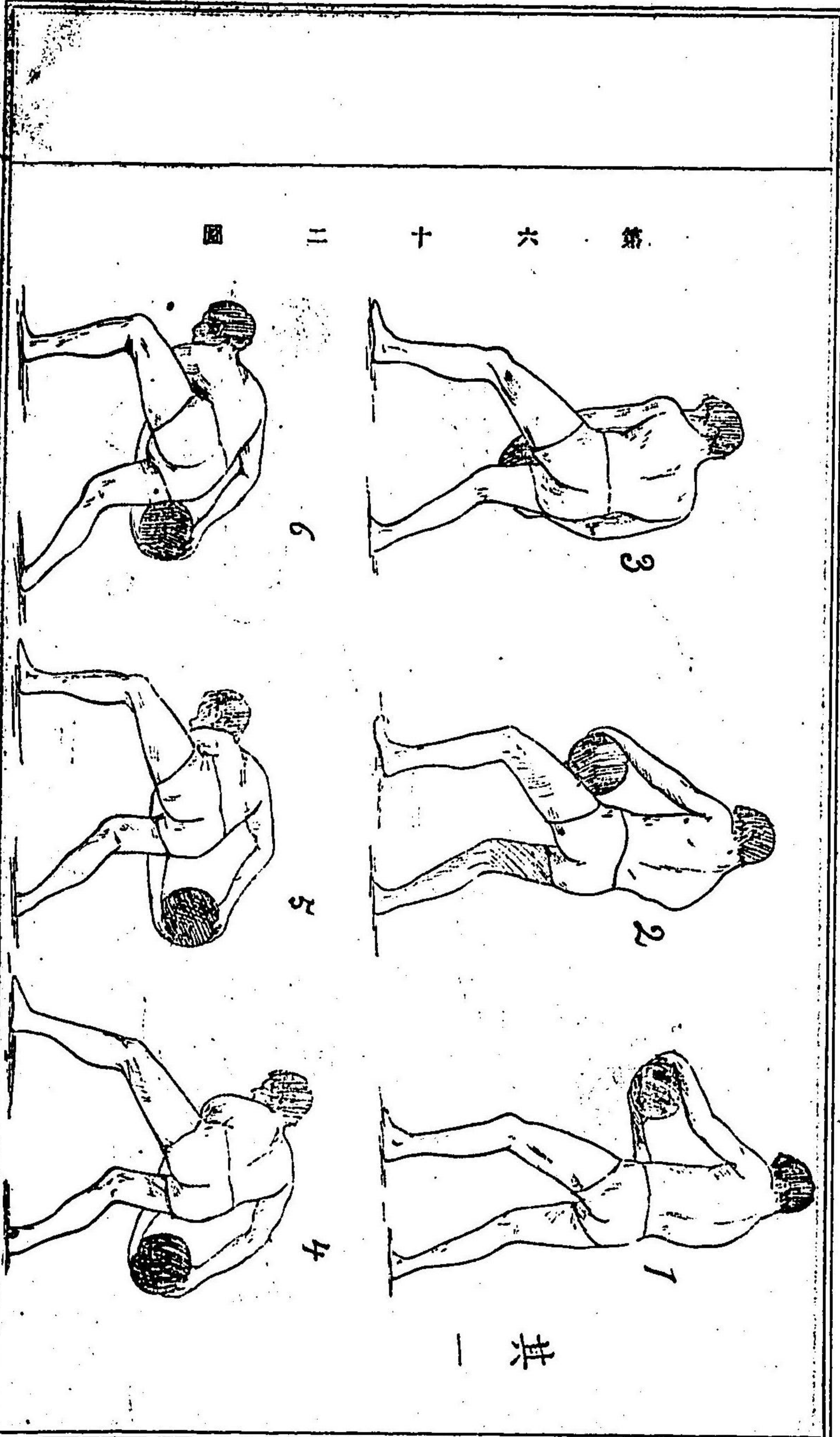
第十六圖 甲

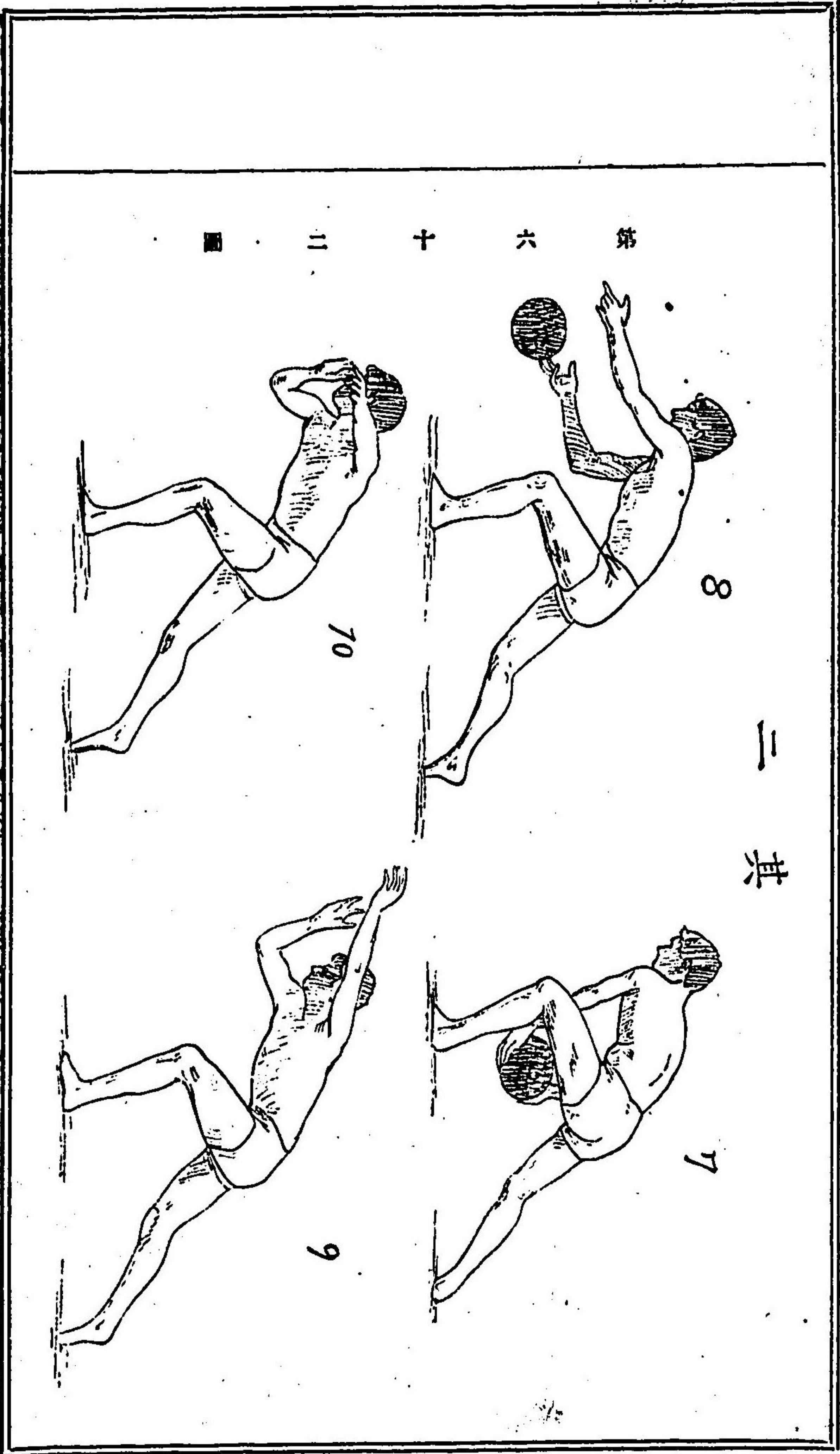


第十六圖乙



第十六圖





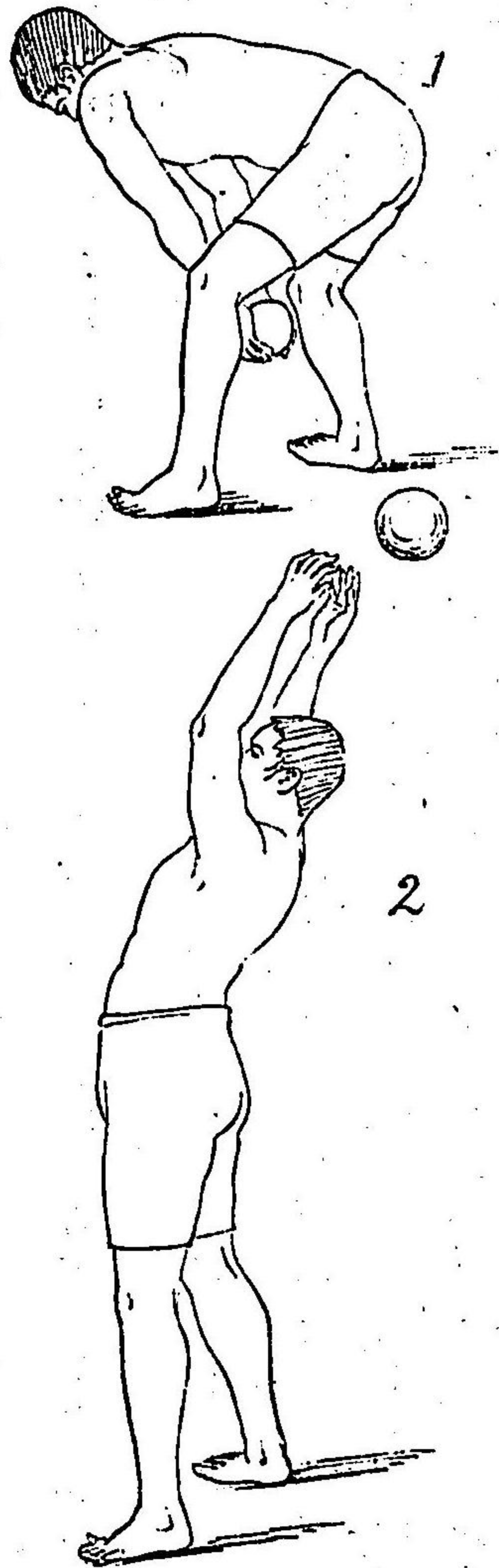
第 六 十 二 圖

背
投

獨乙ては之を
由なり
由なり

るときに用ゐるので、左手は只だ右手を助けて重さを支ふるのみである。
前圖は普通の砲丸ではなくて、砲丸に取手を附けた様なもので獨乙にて用ゐるものだと、の事である。けれども其の投げ方は普通の砲丸の諸手投げと同一であるから、茲に之を寫したのである。

第 三 十 六 圖



第三 後ろ向き諸手投げ。

此の投方は餘り流行しないけれども、體を後ろへ反らせる運動としては至極良
いものである。圖の如く後ろ向きになり、兩足を開き砲丸を頭上より兩足間に數

回上下して機みを付けて後ろへ投げるのである。割合に能く投げ得られるけれども、放し加減が六ヶし。

第三節 槌投げ

槌投げ

槌投げには(一)體を静止して居て投げるのと(二)槌を振りながら飛躍して、體を一廻轉して投ぐるのとの二法がある。

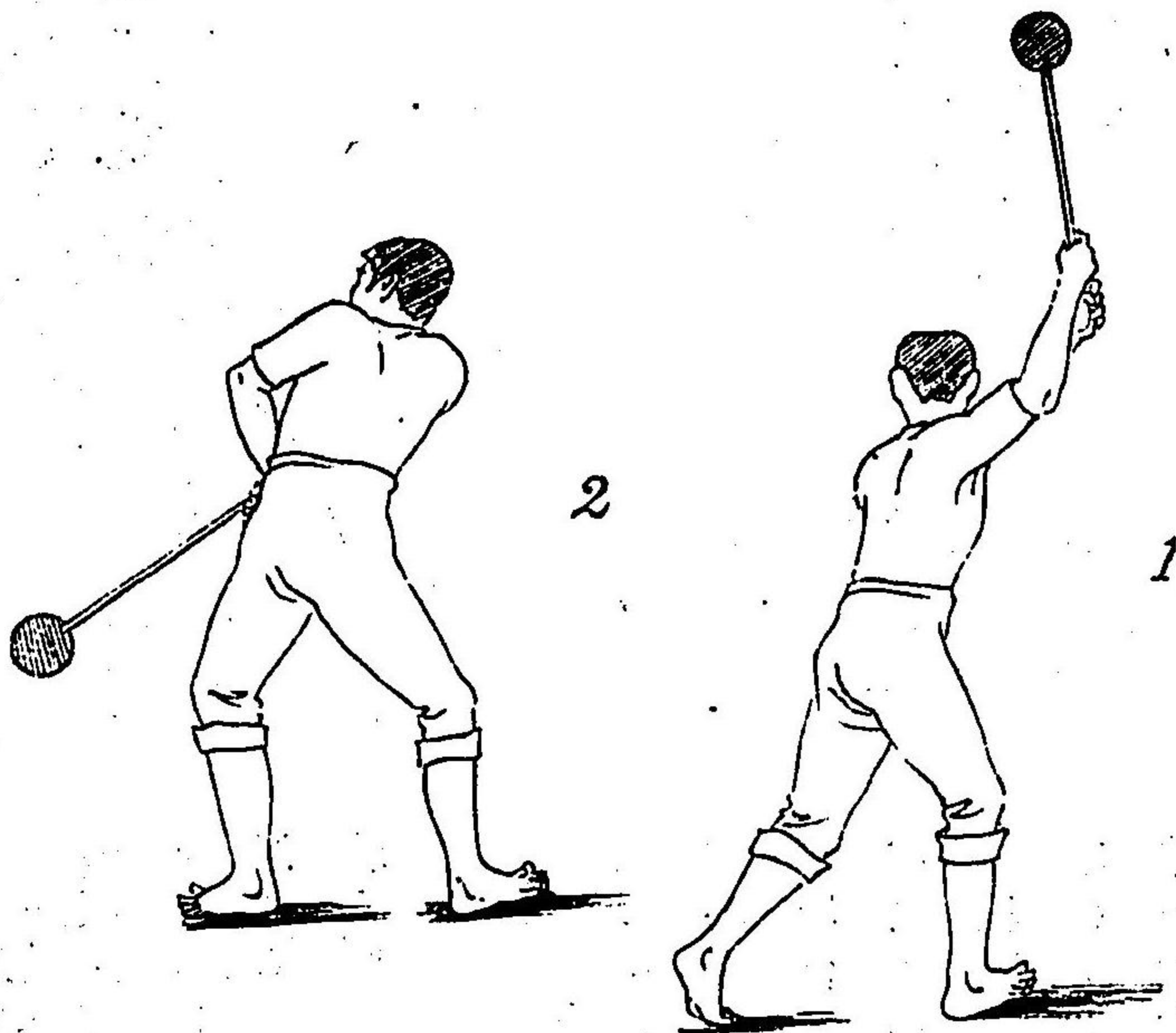
第一法

第一法
兩足を開きて、投ぐる方向の側面に向つて立ち、右手を下にし左手を上にして柄の端を握り、兩手を垂下しても槌頭が地面に觸れない様にし、さて槌を懸垂的に振りて次第に大きく之を振り、體重は槌の移動に随つて左右の足に移し、充分機みが付くを見計ひて手を放つのである。此の技は諸關係を充分伸ばし、筋肉を極度迄伸ばして置いて、急速に之を緊縮して槌に最大の初速を與へるのである。此の法では、踵を充分上げて、出来る丈け脊延びをして、槌を少しも高く振り上げなければならぬ。而して最後に槌を其の最高點より振り下ろすときは、力と體

第一法

第二法

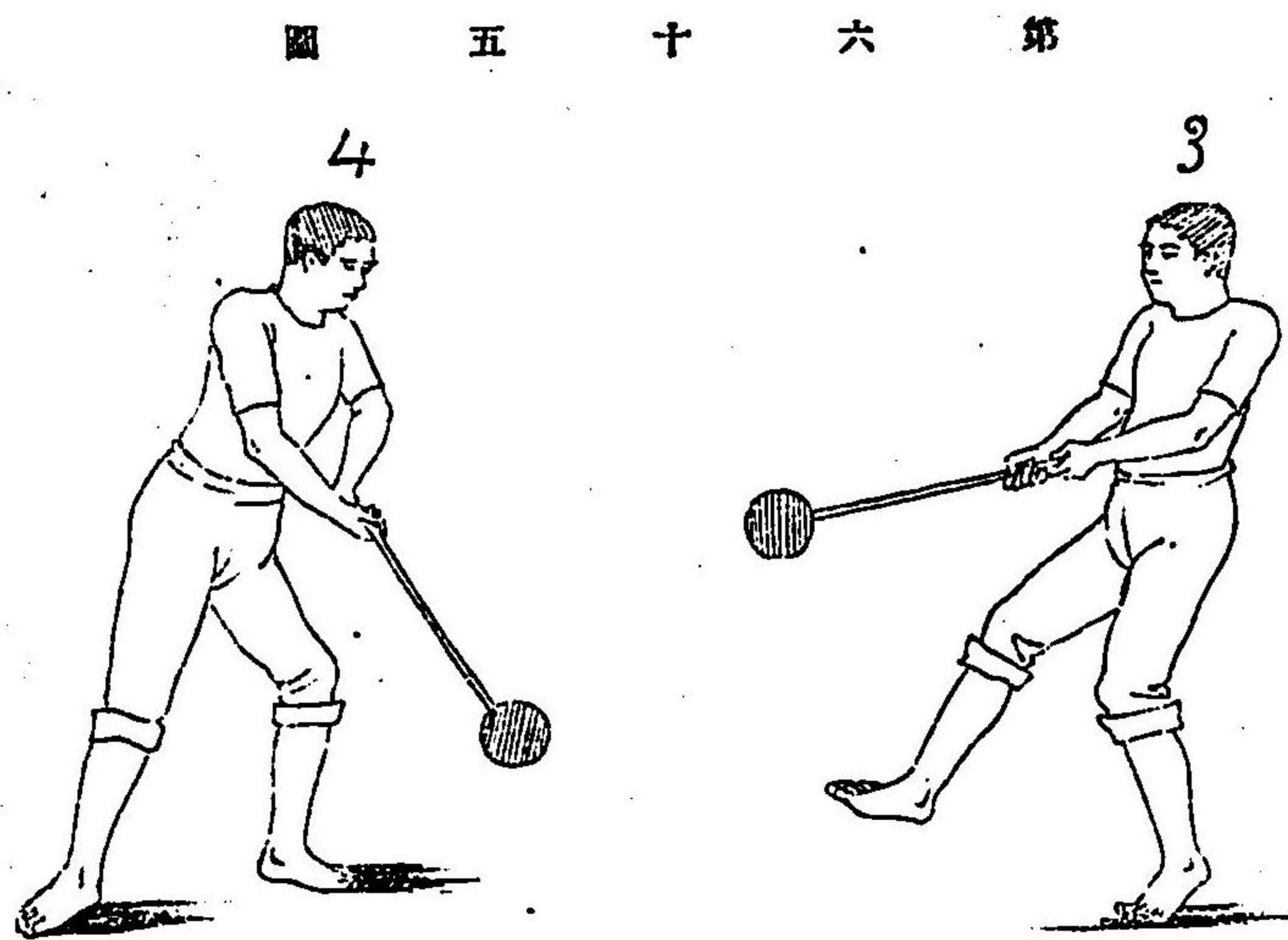
第四編 技術訓練 第七章 投擲技
第六十四圖



重とを用ゐて、急速に槌頭を何物かの手よりもぎ取るが如き心持ちにて之を引き下ろすが宜い。

槌の持ち様又放し様の巧拙は、餘程成績に影響するけれども、これは各自に工夫すべきこととして話すことも、教へることはたゞ練習の際は左手の拇指の爪を能く剪つて置かぬと、右手首の下に爪の傷がつく。

第二法



第一法の如くに静止して數回振り、最後の振り下ろしと同時に、兩足にて地を蹴りて飛躍すると、體は飛びながら槌頭に連れられて殆んど一と廻り廻つて地に着く。すかさずこれまで空中に輪を畫きて速力のつき來りたる槌頭に、最後の力を加へて之を投げるのである。

此の投げ方は餘程習熟を要するもので、初心者が浮つかり人の真似をしようと必ず顛倒する。故に始めは飛躍せず、只だ右足のみを浮かし、左足の爪尖を軸として槌頭に連れられて體を廻轉し適宜の處にて右足を地に着けて投げるが宜い。追々習熟して槌頭が最高點に上る迄に

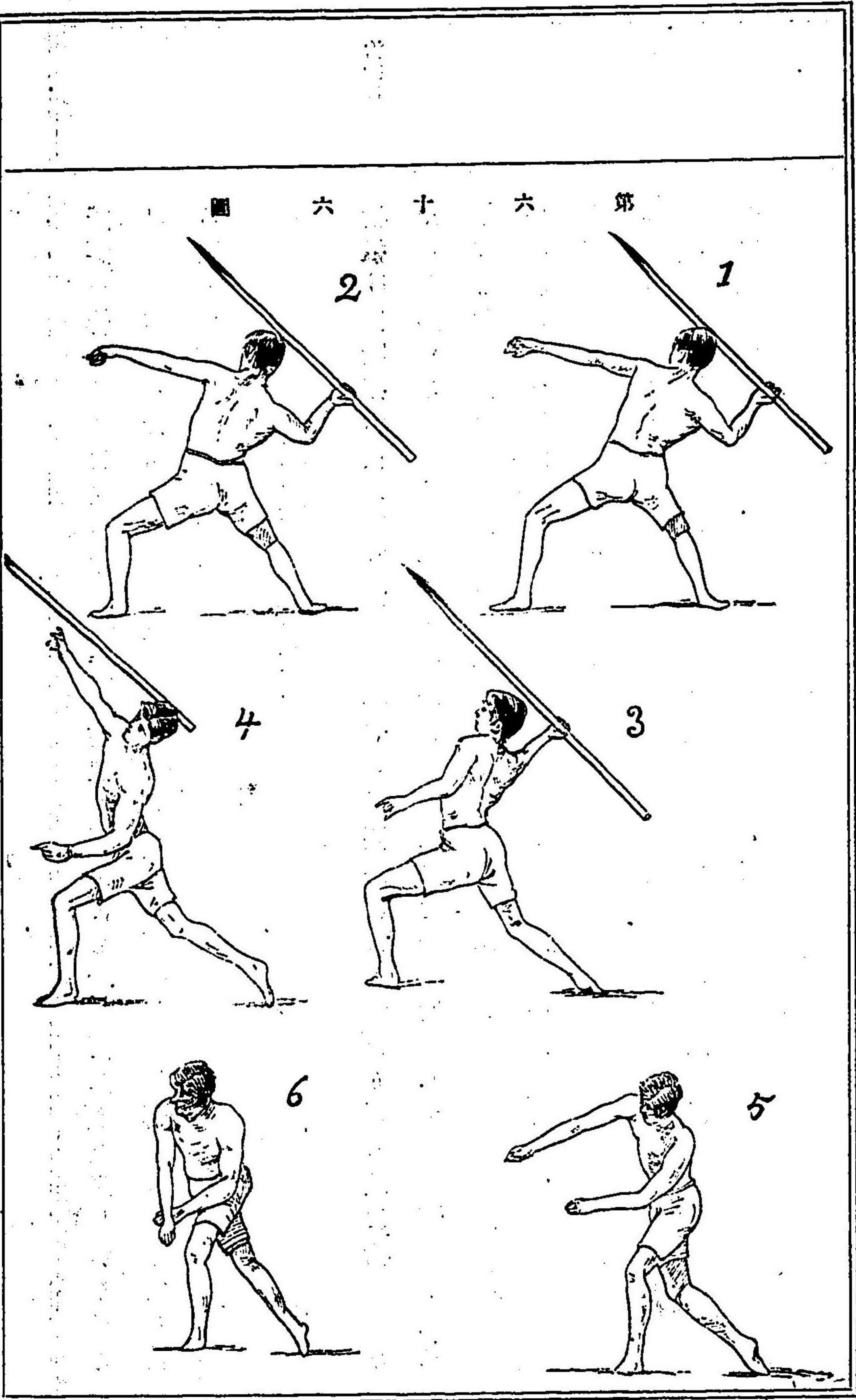
體が一轉する様になつたら、今度は前記の要領にて少しばかり飛躍し、かくてこれにも熟練したら始めて出来る丈け飛躍し、且つ飛躍及び廻轉の働作を成し得る限り迅速になすが宜い。

第四節 槍投げ

槍投げ

槍投げは歐州古代の戰鬪法で、本邦でも戰國時代には隔たりたる敵に槍を投げたことがある。歐米では今でも運動として之れを行ふ所がある。そのうち、投擲技に之を加ふれば殆んど異種の投擲働作が皆揃ふから、本邦には未だ行はれないけれども、茲に之を加へた。但し著者自身も經驗が無いから、詳しい事は述べられぬ。たゞ左の寫真圖を借り來りて説明を畧して置く。

圖では片手投であるが、左手を介副にして諸手でも投げられる。手離れるとき、五指の働きて槍を廻轉させる方が横振せずして素直に飛ぶと云ふことである。詳細は他日の實驗を待つとして、これ丈け述べて置く。



第六十六圖

第八章 應用競技

應用競技の目的

上來章を重ねて人類自然の運動たる純粹競技の重なるものを説いた然れども此等の競技は一步一躍一一走一擲皆單獨の運動である。今若し此等の各技を結び合せ、各技の適用を要する競技を案出して之を行はゞ、其の應用及び趣味よりするも極めて有益なるべきことは論を待たない。

而かも現時は何れの學校に於ても學生の數甚だ多く、此等多數の學生をして一日の内に悉く活躍飛行の快を恣にせしむることは到底望むことは出来ない。是非とも一時に多數の學生をして縦横奔馳せしむべき競技が必要である。

此等の望みを充たし得べき趣味實益及び修練を兼ねる善良なる競技を案出するは、實に本邦教育界目下の急務であらうと考へて、此に新競技四種を撰み敢へて世評を乞はんとするのである。

新競技四種

新競技を撰むに就いては、彼の所謂餘興的運動の如き、一定の主義なく、單に一時

の座輿を助くるの用に供せられんことを避け、修練趣味を兼ね、老少何人にも爲し得べきことを目的とした。而して差向き最も良好と考へるものは、左の四種である。

- (一) 流鏑馬競走
- (二) 打毬競走
- (三) 犬追物競走
- (四) 旗奪ひ競走

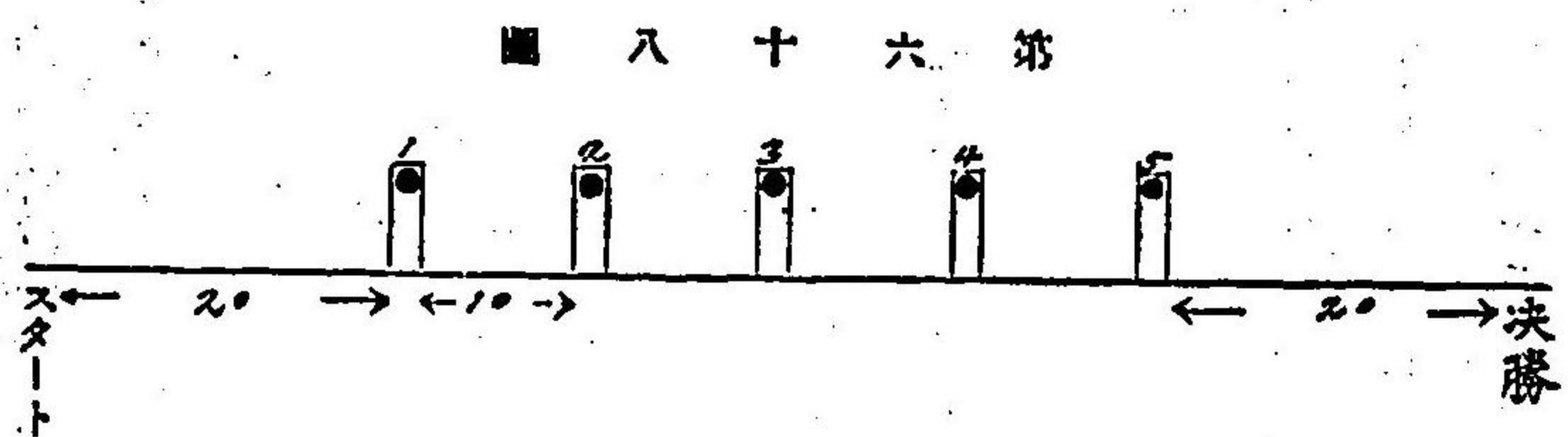
右の内流鏑馬競走は個人競争である。打毬競走はやり方に依りて個人競争とも團隊競争ともなる。(三)と(四)とは孰れも團隊競争である。これより順次にこれを説明しよう。

第一節 流鏑馬競走

流鏑馬競走

此の技は走りながら標的に球を中つる競技である。本邦の古武技に擬へて名を

其の標準



第六十八

附けた。

距離及び標的數は適宜であるけれども、試に其の標準を示せば左の通りである。

- (一) 距離。距離を八十米突として、發走線より第一標的迄二十米突、各標的間を十米突とし、第五標的より決勝線迄を二十米突とする。
- (二) 標的。標的は凡そ戸板位の大きさに作り、其の中央に徑一尺の圓き穴を明け、走路の内端より四五米突隔て、建てる。
- (三) 投球。

球は一個を右手に持つとしても、發走の際は左手に尙ほ四個持たなければならぬ。掌中に四個握れる大きさをなればならぬ。ゴム球でも木の球でも何でも宜い。

斯くて競技者は一名宛驅ける。而して其の優劣は左の二表の得點を合算して等差をつける。而して走るのに十六秒以上かゝつた者は、球が皆命中しても落第とする。

時	十六秒以内	一〇	命	一個	一〇
	十五秒以内	二〇	中	二個	二〇
間	十四秒以内	三〇	點	三個	三〇
	十三秒以内	四〇		四個	四〇
點	十二秒以内	五〇		五個	五〇

譬へば甲乙二人此の技を競ひ、甲は一個命中したるのみなれど、十三秒以内に決勝線に入り、乙は四個命中して、十四秒半かゝつたとすると、甲の得點は十に四十を加へて五十點となり、乙は四十に二十を加へて六十點となり、乙の勝となるが如く、此の得點表の定め様に依りては、脚の早き者必ずしも勝者ならず、投擲技に妙を得たる者又決して其の腕のみを誇ることは出来ぬ。

弓矢の代用

球に代ふるに弓矢を以てすれば、弓術を好む學生に興味ある競争を爲さしめる

標的の仕掛け

ことが出来る。

標的の穴の後部に銅鑼の如き球が中りて音のするものを吊るし、又は細に切り刻みたる五色の紙を一握り宛入れたる小箱を、球が中れば覆へる様に仕掛けて置けば、命中の有無が遠方からも明に分り、又一寸面白味を添へることが出来る

第二節 打毬競走

打毬競走

昔の武技の名を假りたので、詰り球を手にて投げる徒打毬である。

走路は二十米突とし、發走線と決勝線を同一線とする。發走線の後方約三米突に人數だけの箆を置き、其の中に球を數箇入れて置く。夫れから發走線の前方二十米突の所に青竹を一本地上三尺の高さに横へ、此の竹の前方四五米突の所に流鏑馬競走のと同じ標的を人數丈け建てる。而して走路中に高さ三尺の柵を數箇建て、往復とも之を飛ばせる。

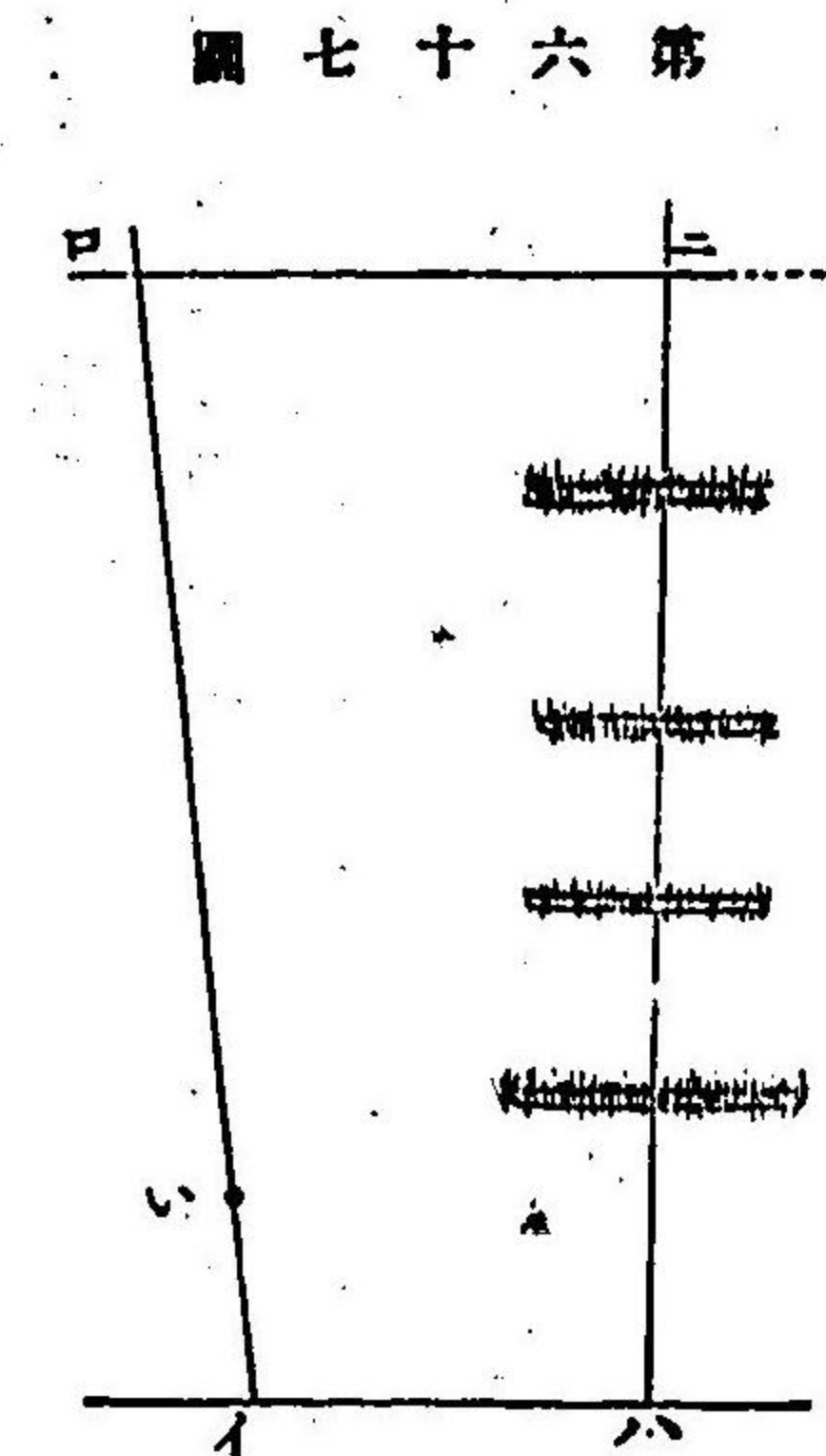
個人競争のときは、三個なり、五個なり、定まれる數丈け球を投げ入れ、決勝線に歸着せる順序で等差をつける。尤も球は一度に一個しか持つて行かせない事にす

る。
 團隊の時は發走線の後方に大なる箒二個を置き、赤白各組の球を纏めて入れて置き、標的も二個にする。此の場合には健脚の者は何回往復しても構はぬ。勝負は定まりたる數を早く投げ入れたる方を勝とし、若し又時間を制限するときは時間間に達すれば中止を命し、多く投げ入れたる方を勝とする。

第三節 犬追物競走

犬追物競走

これも古武技に據るので、競技者を等分して白赤の二組とし、交々獵師及び犬曳とする。



走路の長さは適宜とし、(イ) (ロ) を犬の走路とし、(ハ) (ニ) を獵師の走路とする。(イ) (ハ) は約五六米突とし、(イ) (ロ) の線は先に行く程(ハ) (ニ) に遠ざかる様にする。(ハ) (ニ) の走路には處々に高低不同の柵を置く、ベンチにて

第六十七圖

宜し。

さて各組とも出て、走る者の順番を定め、各組の總代抽籤にて追ふ方と逃ぐる方の順番を極める。假に白組が先づ追ふ方の獵師組となつたとする。

獵師組の白一番は、左右の手に一個宛球を持つて(ハ)の發走點に立つ。犬曳の赤一番は、犬を(イ)の所に据ゑ、これに附けたる紐の端を持って(イ)の先の方に發走の用意をして立つて居る。獵師の球は「ベースボール」の球で宜い。犬は「ゾック」にて普通のく、り枕位の大さの袋を作り、中に砂を入れ、其の重さは逃ぐる者が故意に紐を急速に引いても、地上を滑走する速度に劇變がない位を適度とする。勿論犬曳が之を曳いて行く時は片手にて紐を持たせ、此の手を伸ばしたまゝ曳き行き、故意に此の手を急に曲げて、犬の速度を劇變することは堅く禁じて置かなければならぬ。

合圖がある。犬曳は一生懸命犬を曳きながら逃げる。獵師は之を追ひ、可成兩線の距離が遠ざからない内に、犬に向ふて球を投げる。二つとも球を投げて仕舞へば中つても中らなくても、此の勝負は決する。獵師か(ニ)を過ぎて、尚ほ球を投げな

ければ落第になる。一つ當れば白の勝一點と云ふ事になり、落第は負一點になる。斯くて、白赤組とも全員残らず出走すれば、白組は代りて犬曳きとなり、赤組は代りて獵師となる。斯くて双方の命中數に依りて勝敗を定めるのである。

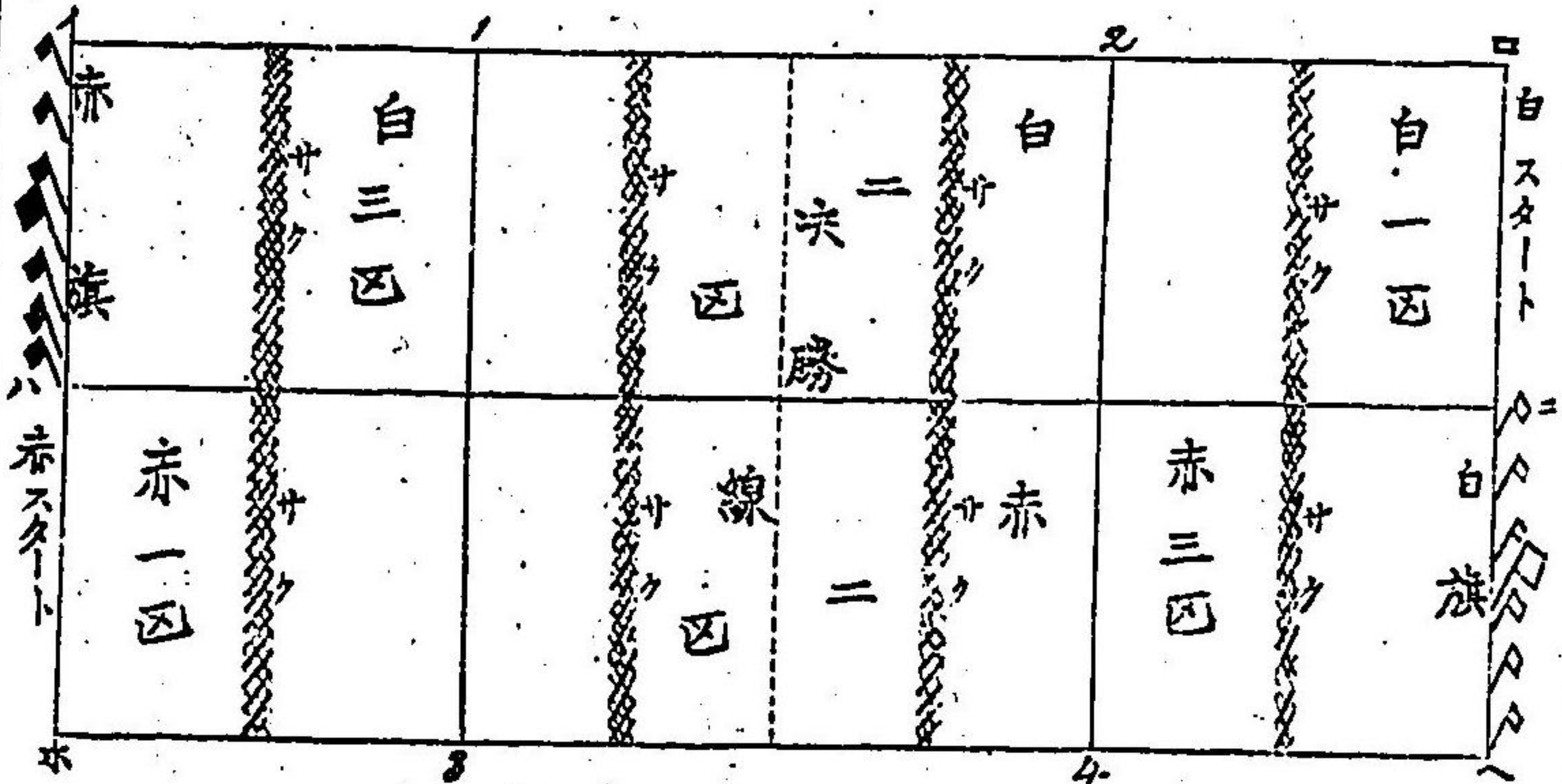
一) 双方から競走者の出る順序は、開戦前極めた通りて變更しないのと先づ犬曳きの方を先へ出し、夫れに對して獵師の人を定め(但し一旦出した犬曳きは獵師を見てから換へることは許さない)とのときは、後者の方が駆引上の面白味があるけれども、競走會の日には必ず前者の方法に依らせないと、時刻遷延の弊が生ずる。

獵師に、球の代りに弓矢を持たせれば尙ほ面白い。然し此の場合には犬の紐を長くしないと、過つて犬曳を射らぬとも限らぬ。

尙ほ此の競走に一段の興味を添へるには、兩組溜所の中間に幔幕等にて互に見透かされぬ様にし、別に一々發走の合圖を與へず、何時にても不意に犬が飛び出す様にすると宜い。

旗奪ひ競走

第十六圖



第四節 旗奪ひ競走

圖の如く戦場を二分し、(イ)を白の戦場とし、(ハ)を赤の戦場とする。而して各戦場を三分し、一區毎に柵を一二個所宛建てる(13)及び(24)の境界は青竹にて高さ三尺位の丈夫な柵にする。(ニ)を白の發走線とし、(ホ)を赤の發走線とす。而して決勝線は戦場縦長の中央線とする。

さて競走者(定數なし)を二分して白組赤組とす。各組とも又其の人數を三分して各一區宛受け持たせる。

白赤各區の競走者は、發走線及び發走線に近き區劃線に整列して合圖を待つて居る。合圖

がある。各競技者は皆敵旗の方へ向つて走る。白三區の者は赤旗を一本宛取り驅せ歸りて之を第二區の者へ渡す。第二區の者は驅せて之を第一區の者へ渡すと、是亦驅せて白の發走線へ行つて赤旗を地に建てる。赤組の方も同様である。斯くて旗のあらん限り、手を分け、力を合せて奪ひ取り、最後の旗が兩組の發走線へ達する遲速を以て勝負をつける筈だが、斯くては双方互角の時には孰れが早く着いたか見分け悪いから、最後の旗に限り一旦各組の決勝線迄持つて行き、直に引返して場の中央の決勝線迄持ち來り、此處での遲速で勝負を極める。戦場の長さや、幅や、各區の割方は適宜である。各區の長さは長短を異にし、競技者の體力に依りて受持を定めても宜い。又最後に取り大將旗は他のよりも大きくすべし。

以上新競技四種の要項を送べた。其の細目は之を試みんと欲する人自ら工風ありたきものである。茲には煩を避けて一々之を記述しない。

第五編 運動會

余輩は本書第二編及び第三編に於て、生理學に基づける體勢訓練の法を説いた。余輩は又第四編に於て、主として力學の原則に基づける競技の技術的訓練法を説いた。余輩は今より進んで、競技者が數句の辛酸を嘗め體勢を作り技術を磨き、踴躍一番腕を揮ひ脚を闘はし、機才を競ひ情意を練るべき最後の修練場試験場たる競技會其のもの、主義及び實行を講述すべき時期に達した。然れども競技運動會は運動會の一種であつて、これが主義とすべき所、又其の舉行の實務を論ずるには、勢ひ先づ運動會なるもの、性質を明にし、彼我の關係を明瞭ならしむる必要がある。殊に近時の所謂運動會なるものは、余輩が本書の卷首に序述したるが如く、往々其の趣旨の在る所を知るに苦むが如きものあれば、旁々先づ運動會全體に就いての性質を述べ、然る後其の一種たる競技運動會に説き及ぼすが順序である。

此の故に、本編は分ちて二章となし、第一章に於て運動會の總論を述べ、第二章に至りて競技運動の舉行に就きて、詳に之を説こうと考へる。

第一章 運動會總論

運動會の隆盛

一利一害

運動會弛廢の
原因

我が國教育界に始めて運動會なるものが催されてから、丁度滿二十年程になる、今では全國到る處、年々春秋になると殆んど虚日がない位、運動會が盛に行はれて居る。この短年月の間に此く迄盛になつたのは、國民訓練上誠に慶賀すべき事であるけれども、熟々近來の傾向を見るに、此の教育上の美事に種々の惡風陋習が生じて、棄て、置けば終には其の害が利を没するに至りはせぬかと懸念される事がないではない。而して其奇を衒ひ珍を競ふの極、終に世の所謂運動會なるものを次第に一種の興行物に近づけつゝあるは、實に争ふべからざる所である。嚴肅なるべく、眞面目なるべき運動會が、何が故に此く漸くに弛廢の傾を生じて

運動會の無主

運動會の六大
主義

來たかと云ふことは、一寸では云ひ盡せない。其の弊根の伏在する所極めて多岐に涉つて居て、一々之れを指摘するのは容易の業ではない。けれども、此の弊害の因で生ずるのは一言で蔽へば、何の爲めに運動會をやるのか、其の主義が無いのに歸して仕舞ふ。運動會の本旨を明かにせず、理想も無く、主義もなく、只だ徒らに時の流行を追ふて世俗の耳目を悦ばせようとはかりして居るから、不知不識の間に漸く種々の惡習を生じて來たのである。故に此の恐るべき傾向を喰止め、運動會の全く墮落し了るを防ぐには、運動會の本旨を明にするより外に手段は無

い。
運動は至大至高の靈能を有つて居るものであつて、其の教育上の眞價に至りては容易に説明し易からざる事が多い。故に運動會の本旨の如きも、所謂以心傳心の事が多くて筆を以て書き現はし難く、且つ此の事たる極めて複雑して居て簡畧に説き明し悪いけれども、試に其の要點を摘記すれば、大約左の六項に出ないと思ふ。

(一) 運動の獎勵。

- (二) 運動其れ自身の訓育。
 - (三) 運動會場の教訓感化。
 - (四) 質素簡易。
 - (五) 室内教育との聯絡。
 - (六) 運動の研究。
- これより此の各項に就きて之を詳論しよう。

第一節 運動の獎勵

運動會第一の目的は云ふ迄もなく學生運動の獎勵である。即ち少壯の學生をして室内教育を勵みて、其の學力を磨ぐと同時に、又絶えず室外教育を勉めて其の三育を完かしめんが爲に、時々運動會を催ふして、其の心身鍛練の度を驗し、活力を與へ銳氣を授け、趣味と希望とを以て益々其の心身の鍛練に熱中せしめ、士氣を振作し嗜好を高尙ならしめ、優柔懦弱に流れ佚樂放蕩に陥るを防ぐを目的とするものである。換言すれば、運動會は、學生をして能く學び面白く遊び、能く働

運動會第一の目的

何人が何人の
爲に運動の獎
勵に勉むべき
や
運動獎勵は國
民の義務なり

き愉快に休む良習慣を養ひ得しめんが爲に、趣味と希望とを以て青年の元氣を内外に活躍せしむるを目的とすべきものである。斯く述べ來ると、運動獎勵なることは極めて明々白々で、此の上の説明を要せざる様に思はれるけれども、この運動の獎勵と云ふことは、善い事である代りに、又其の手段を誤ると實に恐るべき結果を見るに至るものであるから、充分に此の事は研究して置かなければならぬ。運動會は運動の獎勵の爲に催ふすべきものなりと單純に云つて仕舞へば夫れまでであるが、今少しく考へて見ると、此の獎勵とは何人が何人ノ爲ニスベキモノかと云ふ事迄、研窮して見なければ充分とは謂はれない。運動會は學校が其の在學生を訓育する爲に開くものと考へてはならぬ。運動會は社會が其の後繼者を教育する手段である。現代の國民に此の考がなければ決して活力ある次代の後繼者を作ることとは出來ない。國の興るのも衰ふるのも、古今東西皆此の一事に基因して居ることは、茲に之を喋々するの要がない。此の故に學生運動獎勵の原動力は先づ社會から發して、學校は直接に其の任に

社會父兄學校

當るだけだと云ふ様になつて來なければ本統てはない。けれども今日の我が社會は、まだ仲々此れまで進んで居ない。故に我が國の運動會は、當分の内は學校自身が其の内外に對して運動の獎勵を計ることを忘れてはならぬ。

右述べた所を總括すれば、運動獎勵は社會が主となり、父兄が副となり、而して學校は之に従たるべきものであるけれども、今日の實況にては、逆も急には此の理想を現實ならしめることが出來ないから、當分の間は各學校が主として其の任に當り、獨り學生に對してのみならず、廣く父兄及び社會公衆に對して運動の眞價を鼓吹し、其の趣味を會得し、其の必要を認識せしむることを努めなければならぬ。

學生父兄及び社會の三者をして、充分に室外教育の眞相を知悉せしむるは、決して容易の業ではない。社會と學校との協同一致の力を假りなければ無論出來ぬことである。左に本節を(一)運動獎勵に對する父兄社會の義務(二)學生に對する獎勵(三)父兄社會に對する獎勵の三項に分ちて、聊か本問題に對する所見を述べよ

運動獎勵は社會父兄の利益なり

う。

第一 運動獎勵に對する父兄及び社會の義務。

運動の獎勵は父兄及び社會が辭すべからざる義務であるのみでなく、或る意味から云へば、自己の利益の爲に進んで自ら其の世話をしなければならぬことである。人誰れか我が子弟が立派に成業せんことを希はざるものがあらうか、又誰れか社會少壯後繼者の健全なる發育を祈らざるものがあらうか、父兄の恐るゝ所は子弟の病患及び墮落である。社會國家の憂とすべき所は後繼者の惰弱無氣力よりも大なるものはない。故に一家の幸福を計り一國の隆運を祈るものは、義務と云ふよりも今一層深き意味を以て子弟及び國の兒の訓育に勉めなければならぬ。

父兄及び社會が運動の獎勵に盡すべき道に二つある。(一)教育費の支出(二)金品寄附即ち之である。

其一 教育費の支出。

國家及び其の下級團隊及び父兄は、國兒子弟の爲に教育費を惜んではならぬこ

教育費

學校設備の偏倚

運動設備の不完全

とは云ふ迄もない。現今教育の爲に國家及び府縣郡市町村が支出して居る經費は決して尠くはない。然しながら余輩を以て之を觀るに、其の金の使ひ様が餘り上手とは云はれない。教育家も爲政者も眼中只だ室内教育のみ在つて、絶えて室外教育あることを知らない。故に諸學校の設備内容皆教室内のことばかりに偏倚し、運動なる訓育手段の方には心力も金力も殆んど注がれて居らぬと謂つて宜い。僅に體育とか云ふ名の下に學生を病はせない丈けの腹こなしの道が開かれて居るのみと謂つても決して過言でない。

多くの學校を見るに、室外教育の設備は其の學校が擴張される程縮少せられ、盛になる程衰ふるは争ふべからざる事實である。學生の數二三百のときも、四五百乃至一千に達しても、其の學校の「ポルト」の數は同じである。武術の道場も同じである。甚しきに至ると運動場の如きは、教室其の他の建増の爲に次第に蠶食せられて、學生の増加に連れて却て其の面積を縮められて居る所もある。運動に要する資金の如きも校費として支出さるゝものは、體操教員の俸給を除けば、他は殆んど云ふに足るものなく、僅に學生の離出に係る少許の資金を以て必需の十

今日の教育は人物を作るに過ぎず

の一に應じて居る丈である。教育に熱心なる我が社會が、教育の一面を見て他の一面を見ず、莫大の經費を支出して居りながら運動に要する費用と云へば出し吝みをするは誠に不思議と云ふの外はない。而して近頃の人は口を開けば、即ち當今學生の不活潑無氣力を攻撃して士氣の衰退を慨歎せざるものはない。實に自家撞着の甚しきもので、馬を繋いで置いて之を鞭ち、何故走らぬと小言を云ふのと少しも違つた所はない。

今日各學校の設備は孰れも完備せりとは云ひ難い。まだく、足らざる所が多いに相違ないけれども、室外教育程不完全を極めて居るものはないと確信する。今日の教育は智育一方に偏して居て、所謂人を作ると云ふ手段に至りては、驚くべき程缺けて居ると云はなければならぬ。我が社會は學校の形を造つて未だ之に精神を宿らせないのである。砲を購ひて火藥を給せず、瀛機を据ゑて石炭を惜むと同じである。學生が漸く文弱に流れ、士氣が日増に衰へて來るのは何も不思議なことではない。當然の結果に過ぎないのである。余輩は社會の先覺者が、今少しく其の活眼を青年學生士氣興廢の因て分るゝ所に注ぎ、必要の資を給するに吝な

室外教育費

らずして、所謂佛造つて魂入れずの愚を學ぶなからんことを切望して止まぬのである。

青年訓育の効果を完からしめようとするには、是非重きを室外教育に置き、學生の心身を鍛練しなければならぬ。室外訓育を缺ける教育は心身共に不健全なる國民を作るに適するも、事あるの曰起て國家の用を爲すべき人を作るに適しない。故に苟も國縣の教育に留意する者は、何は措きても先づ此室外訓育の道に於て缺くる所なきを勉めなければならぬ。而して各學校室外訓育の設備を完ふする爲に幾何の經費を要すべきやと云へば、實に驚くべき少額にて事足りるのである。之を今日迄の如くに學生自身の負擔とすれば、或は彼等の財囊の堪ふる所ではないけれども、一般の公費として之を支出するに於ては實に僅々たる少額に止るのである。

其の費用

法令の規定に依りて支出せらるべき體操教員の俸給及び體操用具の新調保存費を除き、各學校に於て年々室外教育の爲に要すべき費用は、生徒一人に付年額二圓と見れば充分である。其の内の一圓は積立金となして端艇新造、競技場設備

等の臨時費に供し、残る一圓を以て年々の經常費に充つれば充分なる運動の獎勵を爲して行くことが出来る。尤も此の見積は端艇部を有する高等學校を標準としたのであるから、夫れ以下の中學程度の各學校、又は漕遊の便を有せざる學校に於ては、端艇の新造保存及び競漕會に要する費用丈は前記の額より引去ることが出来る。生徒數四百名ある地方中學校は一年の經費少くも壹萬餘圓を要して居る。而して其の内運動獎勵に支出される豫算は大概僅に數十圓に滿たぬ。偶々年額百圓内外の豫算を有するものは、大に他校の羨望する所となつて居る。今之を増して年額八百圓とすると云はゞ、豫算議決の事に當る社會の代表者は必ず目を圓くして法外の濫費なりと云ふ者もあらう。然れども一萬圓に對する僅に八百圓の活動費は決して多大の支出と云ふことは出来なくて、余蓋は寧ろ室外教育費の極めて低廉なるに驚く位である。壹個年一萬圓を費して心身共に活氣に乏しき卒業生五十名を得ると、同壹萬八百圓を費して同數の心身共に強壯なる健兒を出す、其の得失素より日を同ふして論ずることは出来ない。蓋し此の費用たる、學校必需の費用にして、今日迄各學校が訓育上の不利を忍んで

現狀に甘んじて居たのは、十數年前世人が學生の體育すらも注意せざりし時の習慣が其のまゝ今日迄續いて來たのであつて、云はゞ全國各學校とも今日迄其の最も必要とする訓育費を缺き、充分に學生を薰陶することを得なかつたのである。既に其の欠點を見出した以上は一日早ければ即ち學生一日の幸福である。國家一日の利益である。余輩は國縣郡市町村の教育爲政者が一日も早く帝國教育の此の一大欠點に對して相當の施設を運らさんことを熱望して止まぬのである。

大學運動會

東京帝國大學運動會は全國運動會中の最も富有なるものであるにも拘らず、其の一個年の収入は、基本財産の収益、會費、寄附金を合して僅に三千五百圓餘に過ぎない。而して此の収入は學生の數五百内外に過ぎざりし十五六年前も、學生の數四千に垂んとする今日に於ても殆んど同一である。此の僅少の収入を以て、春季の競漕會、秋季の競技會を始め、柔道部、擊劍部、球技部、水泳部等の經常費及び大會小會の費用を辨じ、一方には端艇新造費の積立てを爲す等其の經濟決して裕なりと云ふことは出來ない。今日大學の現況に應じ、充分に學生の室外教育を奨励しようとするれば、年々少くとも兩大學に向ふて各一萬圓位の經費を支出しなければならぬ。而して帝國最高の兩學府に對し、國家須要の人材訓育の道を完からしめんが爲に、僅々二萬圓の活動費を

投ずるは決して惜むに足らぬことだらうと考へられる。

又此の活動費は一面公費の支出を増すと同時に、一面授業料の一部として年額一圓乃至二圓を學生より徴收するも一策である。運動會は今日では全國各學校とも學生の私立團隊の事業であつて、學校の事業でないから、強制的に入會を迫るすら不穩當だと議論さへある所に、其の費用を授業料の一部として徴收するが如きは暴なりと考へる人もあるかも知れない。併し是には余輩一説を持つて居る。運動會が私立のものとなつて居るのは、運動會の事業が學校の公の仕事とすべからざるが爲めではない。全國運動會の元祖たる東京帝國大學運動會が始めて成立つたときに、大學の經費として國庫より支出すべき道がなかつた爲に、私立の會とした迄である。若し其の當時始めより大學の公の事業として經費を國庫支辨としたら、其の例が手本となりて、今では全國の學校皆公の事業として、運動會は即ち學校の當然爲すべき事務の一となつて居たかも知れぬ。此く偶然の事より今の様な習慣になつた丈けて、決して運動事務を校務の一となすべからざる理由はない。余輩は行く／＼は是非此く成り度きものと考へて居るのである。而して運動の費用として相當の金額を學生より徴するは決して不當ではなく、若し之を不當とせば普通の授業料も亦た不當と云はなければならなくなつて來る。

小學校の活動費は僅少の金で濟むから、左して町村當事者の頭を悩める程の事はな

篤志者の寄附

其二 金品寄附。

公費を以て室外教育の資を給し、學校教育の効果を完からしむるは、社會が辭すべからざる義務であることは今述べたる通りである。然しながら公費の支出は御義理一遍の獎勵に過ぎずして、心からの獎勵にはならぬ。人情と云ふものは妙なもので、公費で仕賄はれるものは左程難有くは思はぬものであつて、學生をして社會の同情に感ぜしむるには、公費の支給よりも寧ろ篤志者の寄附の方が効力が多い。運動會の費用で買入れた賞品は受賞者一人のみを悦ばすに過ぎないけれども、學校に縁故深き人又は社會知名の人よりの寄贈品は、其の校全體の生徒を悦ばす力がある。

此の故に英米等の運動會には、重なる競技の賞品は大概有志の寄贈に係らざるものはない位である。以て如何に彼の社會が運動を重んじ、又如何に彼等が運動の獎勵に巧なるかを知ることが出来る。

我が國には遺憾ながらまだ此の美風が盛でない。世人が室外教育に重きを置かざる今日であるから無理はないけれども、是非此の美風は漸々に一般に盛なら

寄附請求の弊

廣告的寄附

しめたいものである。金額の多少物品の高下は決して問ふ所でない。たゞ温き同情さへあれば宜いのであるから、社會後進の利益の爲に各々其の縁故ある學校に向ふて、運動用器の新造費とし、又は運動會用の賞品として、金員物品を寄贈し、以て青年學生に一の勸化を與ふるは、極めて必要の事と信ずる。

寄贈すべき物品は如何なるものを撰むべきやは次章に詳しく述べる。

地方の諸學校にては、運動會の資金に乏しく、年一回の競技會を開くのも、充分に物品などを調へることが出来ない爲に、終に忌はしき弊害を見るに至つた。

之は別の事ではない。學校に關係ある商人に迫りて、賞品の寄贈を爲さしめることである。彼等商人は利に敏き者のみであるから、快く學校の爲に大に同情を喪するが如くに見せかけて、棚古しの書籍や、其の他各々其の商品の賣れ残りや寄附し、夫れだけのもものは、平素の賣價の内に如才無く懸けて居る。故に時とすると寄贈品の内に煙草とか菓子とか又は酒類とか、運動會に不必要なる物品を見ることもある。

又今一つ面白からざることは、商人等が自己の廣告の爲に物品又は「メダル」等を寄贈することである。此等の寄贈物を受けて悦んで居るものは、自ら廣告の爲に使はれて居るのである。角力稼業の力士すら少しく氣概あるものは、彼の所謂廣告用の懸賞廻はしを着くるを厭しとしないではないか。世の運動家たる者今少しく自己の品格を重んずべきである。

要するに是等の陋習を生ずるに至らしめたるは、其の罪全く我が社會に在りと云はなければならぬ。運動の奨励は眞面目でなければならぬ。運動會を廣告場たらしむる如きは我が社會の大なる耻辱である。

以上述べ來りたる如く、父兄及び社會は、公費の負擔及び篤志の寄附に依りて、直接間接に、學校教育の施設を完ふし、學生の士氣を鼓舞し、以て後繼者誘掖の資を盡すべきは勿論、其の他萬事に就け誠實深切なる同情を以て、絶えず學生を激勵し、同時に之を監視して過なかしむるは一國一家の繁榮の爲に實に怠るべからざる天職である。獨り其の責を完ふする所以なるのみならず、亦た實に其の利を計る所以である。

第二 學生に對する奨励

運動會なるものは極めて盛に行はれて居るが、實際運動が盛んであるかと云ふと、遺憾ながら「否然らず」と答へなければならぬのは、今日の實況である。今の所謂運動會なるものは平素の運動があつての運動會ではなくして、運動會の爲の運

運動果して盛なりや

運動不振の源

動會である事も不幸にして亦た事實である。此の事は全國教育者の口を揃へて歎息して居る所である。一國の青年學生が斯くも其の心身鍛鍊を棄て、顧みざるに至りたるは實に憂ふべきことであつて、之れが救済の道を講ずるは實に一日も忽にすべからざる急務であらうと考へる。

獨り學生が學則規定の強制體育の外に、自ら進んで運動に勉めざるのみでなく、これが父兄たる者も又我が子弟を制肘して運動を勉むることなからしむるものあるに至りては實に驚かざるを得ざる所である。甚だしきに至りては、學生が競技に参加するの前、豫め親屬會議を開きて其の許否を議するなど云ふ大騒ぎをしたものがあつたとの事を聞いた事がある。

何が故に運動なるものが此く迄學生又は父兄に悦ばれざるに至れるやは色々な原因に依るのであるが、歸する所は社會が一般に室外教育の眞價を知らず、其の奨励に於て足らざる所あるに基くのである。試に運動不振の原因中の重なるものを算へて見ると。

(一) 運動の誤解。

運動の誤解

と先づ此の三點に歸着する。
第一に運動は單に體育に過ぎずとは一般の誤解である上に、近時の運動會が往々心事の陋劣なる所謂、メダル乞食の爲に其の神聖を汚され、運動家とは怠け者生○の異名○の如くに思惟さるゝに至つたのが、運動の發達に非常なる妨害となつて居る。

運動設備の不完全

第二には今日各學校の室外教育に對する設備は、先に詳に述べた如くに極めて不備であるから、學生が各其の好む所に依りて運動を勉めんと欲しても、其の希望を充たすことが出来ない。漕艇に、球技に、武術に、人多くして設備足らず、止を得ず多數は健全高尚なる運動の恩恵に浴することが出来ずして、他に慰樂消閑の道を求むるに至るのである。近頃各學校ともに運動をするものは誠に少數に過ぎぬとて歎じて居る人が多いけれども、それは其の等である。ポルトでも其の他の技でも、道具が足らず場所が狭いから、初心の者又は未熟の者は、自然他の優者

學生の自棄

の練習を妨げんことを遠慮して、自ら練習の念を断つて仕舞ふから、室外教育に對する趣味は終に全校一般に擴められずして、總べての運動は皆一部少數者の専有に歸して仕舞ふのである。故に、強壯なる者は益々強壯に、病弱なる者は何時迄も病弱で、年々運動會を行つても、仕掛けばかり大きくて、出て、技を闘はずものは僅に指を折つて數ふるに過ぎざる様な奇觀を呈するのである。
又今日の制度では兩大學を除くの外は、各學校とも一週數時強制的に兵式又は普通の體操を課して居る。然れども此の強制運動は何分其の時間が少いから決してこれのみで充分に學生の心身を鍛練することは出来ぬ。體育としても、又精神訓練としても共に充分なる効果を收め難きは勿論の事である。故に是非とも任意運動に對する設備を完ふし學生全體をして運動の機會を得せしめる様になければならぬこと、考へる。特に學則中強制運動の規定なきものに對しては其の必要一層切なりと云はねばならぬ。
運動不振の第三の源因は學生の自棄である。今日は智力競争の時代であるから、病つて死にさへしなければ、何も特に強壯な體を持たなければならぬ必要はな

運動會の改善

い。運動に空費すべき時間があらば其の間に書物を一ページでも餘計讀む方が宜いとは、今日一般學生の考である様である。之が爲に今日の青年の多くは、其の壯年期極めて短く、年若くして早く既に老年期に入り、病弱事に堪へず、又は中道にして夭折する人尠からざるは、國家の爲に誠に悲しむべきことである。

- (い) 成るべく屢々小集會を開くべきこと。
- (ろ) 學生の好む所に依り數種の運動を撰むべきこと。
- (は) 體質の強弱に依り運動の種類を撰むべきこと。
- (に) 成るべく多數の競技者を參加せしむべきこと。
- (ほ) 衡平率に依りて競技の趣味を増すこと。
- (へ) 聯合運動又は對抗運動に依りて他校との優劣を闘かはすこと。

學生の自覺

等に依りて常に學生の運動に對する興味及び嗜好を喚起するを勉めなければならぬ。此等各項の細目に至りては次節以下に之を詳述しよう。然れども右列記したる各項は寧ろ運動獎勵の窮策であつて、學生自身に心身鍛練の忽にすべからざることを曉り、自ら進んで運動を勉むるにあらざれば、如何なる獎勵手段も決して其の効を奏することは出来ない。故に父兄たり又教員たるものは、青年學生をして心身鍛練の義を明にし、運動は即ち其の最良手段たることを知悉せしむるに於て決して其の勞を辭すべからざることである。

第三 父兄社會に對する獎勵

學校の運動は父兄及び一般社會が外部より大に之を獎勵すべき等のものであるけれども、我が國目下の有様では、余輩が先に述べたる如く、今日の學校は内學生に對すると同時に外、一般社會に向つて、運動の利益を鼓吹すべき位置に立つて居るのである。故に今の運動會は其の目的の一として、社會に對する運動の獎勵と云ふことを加へて置かなければならぬ。

社會一般に運動の眞價を知らしむべし

競技會場の感

の眞價を知悉せしめ、社會一般をして運動に關する知識と趣味とを併せ有せしめ、運動の獎勵せざるべからざる所以を曉らしむることである。即ち運動なる觀念を實地に就て深く腦裡に印象せしめ、口や筆で容易に了解せしめ得ざる運動の眞價を、競技場の空氣と共に吸込せることを云ふのである。

此の故に、運動場に於ける參觀人に對するの獎勵は、單に競技者走漕の技を示すを以て足れりとすべきではない。必ずや、動く艇、走る人の影が眼に映ずる外に、一種云ふべからざる感化を其の心に起させる所のものがなくてはならぬ。若し之れ無くば、運動會場は輕業の見世物と一も擇む所なしと謂つて可なりである。此の點に關しては、本章第三節に至りて詳に之を論じようと思ふ。

運動會の惡弊

上來述べ來りたる如く、運動會は結局運動の獎勵を目的とすべきものであるから、此の目的を外にして、無理にも運動會を催ふす如きは、極めて戒むべきことである。余輩は今左に近來運動會に伴ふ弊風にして、最も戒めざるべからざるもの數例を附記して、世人の猛省を促そうと思ふ。

- (一) 運動の設備完からず資金も又乏しき學校は寧ろ運動會を催ふさざるが宜い。無理に之を催ふしても充分の事は出來ずして、一日の爲に一年の計を誤るに過ぎない。故にかゝる不幸の境遇にある學校は寧ろ大會を開かずして、時々校内限りの小會に全力を注ぐが宜いと考へる。
- (二) 各學校とも運動會の事業は數部に分たれて居るけれども、會の資金の大部分は、競漕會及び陸上競技會に使用せられ、他部は少しも活動費を與へられて居らぬ。これは運動獎勵の上頗る遺憾の事である。事情の許す限り、各部の活動費を潤澤ならしむるは極めて肝要の事と思はれる。尙ほ此の事に就いては、本章第七節に述べる考である。
- (三) 運動獎勵の爲めと稱し、平素少しも運動を勉めざる學生等の爲に體育の一助にすらならざる様な競技を加ふること、近來漸く流行し始めだ様であるが、此かる兒戲に均しきことは斷然排斥すべしである。
- (四) 參觀人を接待するには、單に茶を薦め菓餅を供するのみでなく、競技の理法に通ずる人をして丁寧深切に説明の勞に當らしめ、又會の歴史記録等を始め、其の他一般人の參考となるべき印刷物を配布して、勉めて運動に對する趣味を喚起せしめる様にしなければならぬ。無益の飾り物を拵へたり、滑稽極まる行列などを催ふして徒に兒女を悦ばすが如きは、偶々以て識者の同情を失ふのみであつて、却て社會に對する獎勵とはならなくなる。又氣概ある學生は、かゝる競技場に出場して一

種の演藝者視せらるゝを辱しとせずして、漸次其の足を遠ざくる様になり、學生に對する運動獎勵にもならなくなる。尙ほ此等の所謂餘興なるものに就いては、次節に至りて更に詳論しようと思へる。

運動獎勵に關しては、尙ほ述べたい事があるけれども、説明の便宜上之を本章の末節に譲り、茲に本節を終るに當り、那珂梧樓著「旅の苞」中の一節を抄録して讀者の參考に供したいと考へる。

旅の苞の一節

著者は相馬の馬祭の事を叙し來り、更に語を續づけて實に左の如く云へり。

「あのれは、相馬の馬祭を世にめぐらしとちもひつれば、一日伊勢の人松浦武四郎にかたりいてしに、武四郎の馬祭もさるとならめど、細川の御家にてものし給ふ、とんとやきにはいかてかとして語りいてぬ。こは正月望ひつぎのたそがれに、けふまで大路に立わたしたる、松竹しめ縄なごりなくとりあつめて、御城のそとなる川原に、山なすほどつみかさね、としわかき御内人の、なごりなく馬に打またがり、其のほとりに集ひきつゝ、人して火かけさせぬれば、まぐろなる煙の其の

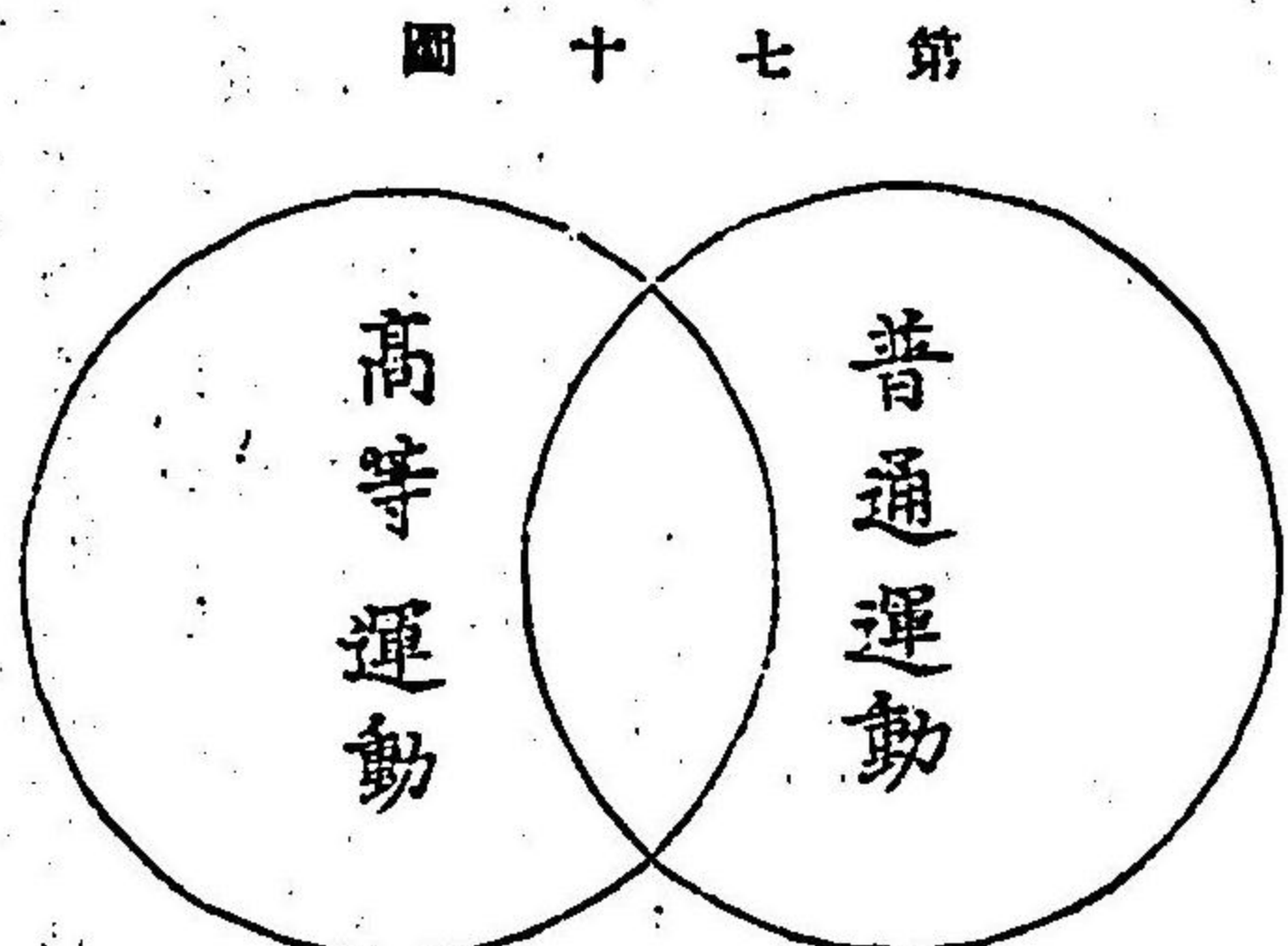
中よりうづまきのぼると見るまゝに、焰四方にほとばしり、すさまじさいはんかたなきを、つどひ居たりし人々の御中にて、すぐれて馬のるわざにかしこきをのこの、唯ひとりむれをはなれて乗りいだし、ふたたびみたび輪かけて、いとしづかにのりめぐらし、焰のひまより鞭あぶみあはせて、けぶりの中にかけるれば、見わたる人々のもろごゑあはせときつくるをしるべとして、我おとらじとのりいれくかけめぐるに、松のけぶりの目に入り口にむせびて、見るものすら得たふべくもあらぬ其上に、竹のやくるちと、人のおめく聲、唯千よろづの雷霆の、ひとつ所に落かゝるごとおぼゆるを、とし十なり四五の童だに、ものゝかずとも思ひたらぬさまなるよし、かくくるしげなるならはしを、いとたはやすくせさせ給ひし、御掟のいかなるにかと、魚住源二兵衛がりまかりてける時、人々に問ひたりしに、初はたれもおれも、さちもひたりしにや、いづるものもまれなりしを、家の長岡某のかゝるとは、之が母や妻の、焰のうちにちいりてうせ給はじなど、とにかくいひきたゆるをもて、あのれと怯氣づくものよ、又のとしは、女どもにめざましき様見せたらましかばとて、見せはべりしほどに、

そのめざましさのうらやましくて、我子ものしさをぶらはん。君の夫もいたさせ給ひてよなど、送にいさめはげましつゝ、今はとしごとひと多くなりもてはべりと、末松孫三郎のものがたりなりき。

第二節 運動其れ自身の訓育

運動の訓育
運動會第二の主義とすべきは、苟くも運動會を開く必ずや何等か學生に有益なる訓育を興ふることを期するに在り。即ち運動其の物に依りて學生の心身を鍛練することを目的としなければならぬ。若し其の目的を定めず、運動會を以て娛樂又は餘興の如く思惟するが如きことあらば實に由々敷大事である。運動の目的は體軀を練ると同時に智情意を鍛練するに在ることは第一編に於て之を畧述した。而して各種の運動遊技を其の目的に依りて區別すると、娛樂的、休憩的、復活的及び修練的の四種となすを得べき事も又前に之を述べた。此の四種の運動の體育として又智情意育としての價值を比較評論するは、頗る趣味あることであるが、本書紙面の許さざる所であるから之を見合せ、茲にはた

學校の種類と運動の種類と
高等運動
普通運動



と心身育としての各技の價值は前記の順次に増大し、修練的運動に至りて其の最高位を占むるものであるとの一言を以て満足しようと思ふ。假に、説明の便を計り、修練的運動を高等運動と名づけ、復活、休憩、娛樂の三者を普通運動と名づけ、而して此の二種の運動が學校運動會に於て占むべき地位を研窮して見ると、余輩は左圖に示す所を以て最も適當の配劑であると信ずる。即ち

小學校及び各種の女學校に於ては普通運動を主として、之に少許の高等運動を加へ、而して中學以上の男子學校に於ては高等運動を主として、多少の普通運動を加ふるのである。而して余輩が高等運動を主として中學以上の男子學校に行はしめんと欲するのは、此の種の運動は第二編第三編に詳論せる如く、極度の體力を要するものであつて幼年兒童及び婦女子に適せざるが爲である。

平素の運動

運動會は絶えず開くべし

此の區別は主として運動會に就いて述べたのであるけれども、平素の運動も大體此の區別に依りて適宜之を定めるが宜いと考へる。運動の目的は要するに心身の慰樂と修練とにあるのであるから、運動會も此の目的に適合する様にして行かねばならぬは無論である。而して此の運動に依るの室外訓育は常時絶えず之を勉むべきものである。隨て運動獎勵の手段たる運動會も事情の許す限り成るべく度々之を行ひ、學生をして慰樂修練の機會に接すること多からしめなければならぬ。

運動會の種類

今試に慰樂鍛練を目的とし學校に於て行ふべき運動會の重なるものを列擧すれば、

- (一) 室内遊戯會
- (二) 校内遊技會
- (三) 球技會
- (四) 郊遊會
- (五) 遠足會

運動大會

(六) 武術會
 (七) 陸上競技會
 (八) 水上競技會

と先づ此の八種になる。而して(一)より(四)迄は慰樂を主とする普通運動で(五)以下は即ち修練運動である。而して此の八種の會は皆多少其の趣を異にし期する所の訓育にも又夫々の區別がある。故に何れの學校に於ても、學生の數、男女の別、其の年齢、其の體質及び嗜好、其の校運動の設備、所在地附近山河の情况等を基とし季節に應じて絶えず右八種の會を催し、以て學生の體軀を養ひ心情を暢快し、其の心身の健全なる發達を計り、而して年々期を定めて水陸修練的の大會を開き、廣く父兄公衆を招きて鍛練の成績を驗し、其の批評を求め、又は之を既往若くは他校の成績に比較して學生活力の消長を考へ、教養上の參考に供すべきである。運動會は今述べたる如く凡そ八種の別があつて、何れも事情の許す限り成るべく絶えず其の小集會を催ふべきものであるが、大會として盛に舉行すべきものは、運動の性質上水陸の競技會、武術に限られる。其の他は皆態々大會を催ふじ

運動の目的を
漏らす勿れ

て特に廣く人を招く程のものではないのみならず、一日の中に多數の運動者を
 闘はして其の功拙優劣を判定することも出来ず、又之に依りて全校學生生活力の
 度如何を知ること出来ぬ。要するに性質上是等は校内限りの運動會として隨
 時隨處に舉行すべきものである。

此の如く學校に於ける運動會は高等普通種々の別があるから、學生は其の體質
 と嗜好とに依り各適當のものを撰みて其の心身の慰樂修練を勉むべく、又運動
 會役員たるものは、能く此の別を明にし、各種の目的を混同する事なきを期さな
 ければならぬ。若し此の區別に頓着せず一日の運動會に性質の異なる數種の
 運動を併せ行はんとすれば其の會は主義なきものとなりて失敗に歸するのみ
 ならず、却て種々の弊害を醸すに至るものである。故に運動會を催ふときは、高
 等運動、普通運動と劃然其の區別を明にし、各運動の特長を發揮し、所期の訓育を
 完からしむることを勉めなければならぬ。修練は他く迄も修練なり、慰樂はどこ
 迄も慰樂なり。此の二個の別物を一日の中、一場の上に巧に調和せんとすれば、二
 つながら其の本領を没却するに終るべきこと、近時の運動會の歴々證明して居

る所である。

運動會は其の目的に依りて高等及び普通の二種に分つべきこと、大會として開
 催すべきは高等運動中の競技會に限るべきこと、而して此の大會は修練の外他
 の目的を混すべからざること、右述べたる通である。然るに近時の運動會中に
 は如何なる目的を以て催ふざるかを知らず、苦むものがあるから、其の此に至り
 たる原因を指摘して、其の誤を正したいと考へる。

多くの運動會が其の主義本領を失ふに至りたる原因は、主として左の二點に在
 ると考へる。

- (一) 多數の學生を参加せしめんとすること。
- (二) 會の趣味を増さんとすること。

此の二項は共に運動會獎勵上忘るべからざる要點であつて、運動會の盛否は實
 に此の二點に因つて分るゝは論を待たぬ所である。然れども此の二項は其の方
 法を誤ると運動會を腐敗せしむるものである。而して近時多くの運動會は不

運動會失敗の
原因

競技者多からしめんとす
るの弊

幸にしてこれが爲に腐敗しかけて居る。

第一 競技者を多からしむること。是非勉めなければならぬことである。今日何れの學校の運動會に於ても、競技者の數は誠に曉天の星の如くてあつて、全校學生總數の百分一にも満たぬ程である。漕艇家の方ならば學校の漕艇が不足だからと云ふ理由もあるが、陸上競技に參列するものが此く少數であるは誠に悲むべき事である。これが爲に成るべく運動會に參加するものを増加せんとして、色々な窮策が行はれるに至つた。誠に無理のない事である。然しながら此の悲むべき傾向を挽回するが爲に根本的に學生の志氣を振興することゝを爲さずして、換言すれば、修練的運動に參加するもの増加を計らず、兒戯に類し、又は滑稽に近き遊技を案出して之を番組中に加へ、以て學生を釣らんとするが如きは斷じて不可である。若し修練的競技を試むるものなくば、高等運動は一切廢止して、惰弱なる學生の欲するまゝに棄て、置くが宜い。其の方が平常ゴロ／＼寝轉んだ居た體で、運能くば立派な賞品が貰へるなど云ふ、情弱なる根性を養はせるよりも遙に害

別に自ら其の
手段あり

運動會の趣味
を増さんとす
るの弊

がなくて宜いと考へられる。眞に心身鍛練の何たるを解するものは、運動會なくも自ら其の手段を講ずるに怠る氣遣はない。若し今日の流行の如くに平素強制的體操時間の外、運動場裡絶えて運動者の変影を見ざる様な學校にて、強いて運動會を催ふし、平素運動を勉めざる學生を釣り出して、兒戯を試みしむる如きは百の害あるも一の利はない。練習が要らずに誰れにでも出来る競技はないかと、は能く人の云ふ所である。有るところかいくらもある。近頃其の様な遊技を案出する人が澤山ある。然れども此等の遊技は一の座興として普通運動場裡に適すべきも、競技會の番組面を汚すべきものではない。

要するに競技者の増加を計るは目下の急務に相違なきも、これには自ら他に手段を求むべきことであつて、競技會の性質を枉げ其の主義を没却して迄も、柔弱なる學生の機嫌を取るには及ばぬことである。

第二 運動會の趣味を増すこと。

競技場に於ける競技者の活躍飛走は、人の四力の天真爛漫たる活畫であつて、實に比びなき壯觀である。これ丈けても人をして思はず聲を放ち手を拍ちて、其の

運動會の流行物

我れあることを忘れしむる力がある。數旗の彩旗場の一隅を點綴し、喇叭たる軍樂の時に歎呼の聲と相和するあらば、運動會場に於て觀るべきもの、聴くべきもの悉く完備せりと云ふて宜い。此上に詰らぬ催しを附加ふるは所謂蛇足で、運動會の品位を卑ふし色々の弊害を來たすものである。

其の害毒

此等の所謂餘興なるものは、皆運動會に何等の必要なのみならず、却て其の品位を汚し、運動獎勵の本旨に違ひ、之を外にしては、さなきだに運動の眞價を辨知せざる一般社會をして、益々運動の何たるを誤解せしめ、之を内にしては心ある學生をして益々競技に参加するを屑しとせざるに至らしむるものである。乞ふ少しく其の有害無益なる事を論じて見よう。

花火

花火の利益

第一花火の無用なることは云ふ迄もない。往年東京某銀行競漕會の日に花火の爲に火災を起して數戸の家を焼いた事がある。花火に若し何等かの利益がありとすれば先づ此の位の處である。

飾り物

滑稽行列

其の起源は農夫の慰より出づ

素人音楽

第二の飾り物、これ亦た運動會に無用の長物であるのみならず、心身鍛練に餘念なかるべき學生等が此の如き無益のことに心勞するが如きは愚な事である。次の滑稽行列の如きは、一の狂態と云ふべく、學に志すの青年が此かる痴戯を演じて得々たるは實に慨歎に堪へざる所である。抑も此の飾り物行列等は、其の始め某學校の定雇農夫等が運動會當日の餘興として演じたのであつて、學生の關與する所ではなかつたのである。其の校の職員學生も、決して之れを嘉納した譯ではないが、たゞ農夫等の心情を憐察して、之を不問に附して居たのである。然るに此の事情を知らざる他校の學生等が、何と思つてか其の眞似を始め、追々各地に擴まつたのである。學校所屬の農夫等の座興としてならば尙ほ恕すべしである。か、苟も學生の身として公然此る痴態を演ずるは實に苦々しき事である。

第四の音楽演奏は、一二年以來の流行であるが、是れ亦餘り獎勵すべきことではないと思ふ。學生として勉學運動の餘暇音楽を學習するは極めて善き事である。余輩は多くの學生に對して、其の消閑の手段として音楽學習の如き健全有益なることを勸誘して止まないけれども、運動會の囃方とまでなつて其の技に耽る

會場新聞

自轉車曲乘

餘興を催さん
が爲に名を競
技會に藉るの
實あり百乎

が如きことは、害の却て利を没するなからんかを恐るゝものである。拙劣なる演奏は人に苦感を與へ却て運動會の興味を減殺するに至るべく、左りとて之に熟達して聴者の耳を悦ばせんことは素人樂手の容易に爲し得べきことではない。故に運動會音樂は之を専門家に譲るに如くはなし。

第五の會場新聞發行、是も近年の新流行である。來賓接待の一法として極めて妙案なるに似て居るけれども、是れ亦た新奇を悦ぶ二三好事者の文才を銜ふに過ぎざる戲で、決して稱揚すべきものでない。最後の曲乗りの如きに至つては、學生の身を以て自ら藝人を以て甘んずるものと謂つべく、余輩は之に對して殆んど云ふべき所を知らぬ。

凡そ以上の所謂餘興なるものは、普通運動會場に於て、之を行ふは暫く別論とし高等運動會場に於ては断じて之を排斥すべきものである。否極めて活氣に富める運動會場には決して此等の兒戲を容るゝ餘地を存することはない。此等の痴態を演じて運動會の興味を助けなければならぬに至りたるは要するに會其の物に活氣なく、競技として一の觀るべきものなきが爲である。此くても尙ほ競技

是等の弊根は
小會を顧みず
強いて大會を
開かんとする
に在り

會場教育

會を開かざるべからざる理由は、余輩如何にしても之を發見するに苦しむのである。

要するに上來述べ來りたる兒戲的運動及び餘興の流行を來したるは、種々複雑したる弊根もあるだらうけれども、各學校ともに普通小集會に力を入れずして一年一回の競技大會にのみ全力を集注するから、體質比較的強壯ならざるものは、修練的競技に参加するの念を断ち無事に苦しむの餘り、種々の兒戲を案出して自他の娛樂を求むるに至りたるは、慥に其の一原因である。青年訓育のことを念頭に措く人々の深く考慮すべき所であらうと考へる。尙ほ此の運動會振興策に就きては、本章の終に至りて重ねて詳述する考である。

第三節 運動會場の教訓

運動會は一の教育である。運動其のものゝ訓育以外に會衆一般に對して一の教訓を與ふる所なかるべからずである。何事によらず多數の人が一所に會すると

其の要素

きは、其の會場の空氣即ち會衆一體の氣合ひなるものは、善惡ともに一の感化を會衆に與ふるものである。運動會は運動の效果其のものゝ外に、内學生に對し外觀者に對し、有益なる會場教育を與ふるを目的としなければならぬ。此の善良有益なる運動會場の感化は、たゞ漫然運動會を催したからとて望まらべきものではない。主催者及び競技者の苦心と注意とに依りて、始めて會場の氣合を引立てることが出来るものである。左に運動會を活動せしむるに就き特に注意すべき事柄を述べて見よう。

第一 紀律

會場に於て最も貴ぶべきものは紀律である。此の事は深く説明する必要もなく極めて分り切つて居るにも拘はらず、何れの運動會に於ても最も注意を拂はれて居らぬは事實である。如何にして紀律を正さなければならぬかは何人も能く知つて居るが之を實行するものは誠に少ない。特に近來の運動會の惡風となつて居るのは時間を正しく守らない事である。是等は主催者の嚴に戒めなければならぬことである。

紀律

敏捷
吏才の實習

第二 事務處理の敏捷

運動會は萬事敏捷を主としなければならぬ。即ち運動會は學生をして敏捷に事を處することを實地に教ふるを目的としなければならぬ。處務の準備、順序、實施、役割り、分擔、協力、等如何にせば同一の仕事を成るべく、小人數で短時間に、正しく順序良く、簡便に敏捷に心持が善い様に準備し、處理し、後の整理を終るを得べきや等のことを實地に就いて實習又は見學せしむるを目的としなければならぬ。換言すれば運動會の主催者は全校の職員生徒を引率して運動會なる手段に依りて事務處理の才能を實地練習しつゝあるものと覺悟しなければならぬ。

第三 活氣

運動會は活氣を貴ぶべきは論ずる迄もない。此に活氣と云ふのは、競技者役員を始しめ人夫に至る迄、苟も競技場に立働く者の進退動作に關することを主として云ふのである。此等の人々が無精な装をして居たり、佇立して話をして居たり、ノソノソと緩歩して居たり、煙草を吹かして居たり、自ら面白がつて見物して居たり、身仕度に苦圖ノソとして居たりするのは、何れも皆活氣を滅殺し、會場に惰氣

活働

を充滿せしむるものである。要するに運動會場に在る人は火事場か戰場に在るが如き心持を以て立働がなければ、單に會衆をして欠呻を催ふさしむるのみならず、延いて競技者の氣合をも鎮沈せしむるものである。人夫を使用するときは特に此の點に注意して年若く活潑なるものを選び用うべきである。

第四 禮讓。

競技は君子の争であるから、競技會場にあるものは何人を論せず諸事公德を重んじ禮儀を貴び、終始紳士淑女の會合たるに耻ぢざることを勉めなければならぬ。本邦人は一體に多人數集合すると行儀が悪くなる。是は社交の禮に慣れざる爲であるから、運動會などでは多くの人に社交的禮儀を教ふることを其の目的の一とし、主催者は會衆一般の風紀を正すと以て己れの任としなければならぬ。夫れには競技者の方から立派な實例を示して一般會衆に善良なる感化を與へる覺悟がなくてはならぬこと、信ずる。己れ先づ悔つて人之を侮るて、競技者間に一點禮讓を尊ぶの風かなければ決して會衆の公德を維持することは出来ぬ。運動會場に於ける無作法なる實例二三を擧げると、第一には他人に當てたる案

禮讓

風紀の維持

内狀を貰ひ受けて參觀に来る者かある。次には案内狀に示されたる通りの服裝を爲さずして来るものがある。又指定以外の觀覽席に入込み、又は老幼婦女子を排除して獨り展望を食らんとする者もある。これ等は接待の任に當る人の責務として、區々たる私情を排し嚴に詰責して一般の風紀を正さなければならぬ。又競技場に在る競技者にして、觀覽席の前方に立塞り其の展望を妨げ一向意とせざるものなども往々見受くる事がある。其の他近來の惡風として、他校選手の競技中などには、對手に向ふて罵詈訶笑を極め、甚しきは酒氣を假り來りて占勝對手を要撃するが如きものなどあるは、實に驚き入る外はない。競技者又は學生等がかゝる蠻風を脱せざる以上は決して運動會の風紀を維持することは出来ぬ。公德養成の實地教育などは、逆も望むことは出来ぬ。

第五 鼓舞獎勵。

會衆は滿腔の熱誠を以て我を忘れて歡呼喝采し、以て競技者を鼓舞賞揚しなければならぬ。運動會に於ける獎勵は實に此の自然的に出づる拍手喝采の力に依ると云つても、差支ない。

鼓舞獎勵

拍手喝采

拍手喝采又は掛け聲は、人が善に感じ美に酔ひ、又は強き同情の念に驅られたるとき、其の天性に依り覺えず涌出する表情の形式であつて、而して其の自他の人心に及ぼす影響は誠に靈妙なるものがある。

其の筋肉刺戟力

人の筋肉は意力又は外來刺戟の強弱に依りて其の感應力及び收縮力の強弱を來たすことは第二編に詳述して置いた、而して競技者が觀者の鼓舞激勵によりて走漕飛躍の勢を増すことは運動會毎に吾人の親しく目撃する所である。而して觀者の同情が競技者の心意に同様の刺戟を與ふることも亦た吾人の熟知する所である。

會衆が美に打たれ同情に驅られて、其の天性の表情を恣にするのは、即ち自ら其の心情を暢快する所以であつて、且又會衆中の幼少年、又は母たり姉たる人に對しては實に運動獎勵に關する有力なる訓育となる。

故に此の種の表情は所謂心を以て心に傳ふる運動獎勵の情育である。これなき運動會は即ち精神的獎勵の一大要素を缺くものと謂つて宜い。故に運動會の會衆は競技中は無論のこと、其の賞品授與のときに於ても盛に拍手喝采して會場

運動會と式場

“College yell.”

の空氣を浮き立てさせなければならぬ。故らに感情を抑へ威儀を繕ひ嚴肅を粧ふが如きは式場に於て爲すべきこととて、運動會の本旨ではない。一般運動會腐敗の反動として、時に餘に窮屈なる主義を採る會も見受けられるから、茲に此の事を一言したのである。

米國の學校には自校の競技者を激勵する爲に各校にて定めたる一種の喊聲イェルがある。之は無論歌ではなく、たゞ一種特別の喚び聲であつて、随分長い文句もあるとの事である。各種の競技中自校の選手を激勵する爲め、各校學生競ふて其の聲を張上げ、一齊に自校の調の聲を唱へて味方に勢援を與ふるのだとこのことである。一定の表情法を有せず、激昂の極我れ識らず對手に對して「馬鹿」呼ばりを爲すもの多き本邦の學生間にも、米國の例に倣いて、自校の調聲を一定せしめたら宜からうと考へる。

以上は運動會の紀律を正し、風紀を保ち、且つ之を活動せしむるに就ての大綱を示したに過ぎない。要するに運動會は活躍飛走の壯觀の外に、紀律、風紀、禮儀活動

運動會は其の學校の働きを示すものなり

運動會美

等の深く會衆を感動せしむるものがあつて、内學生に對し、外社會に對して、人が集つて或る仕事を爲すにも、其のやり方に依りては、能く此の如く見て居てさへ、心持が好い様に運ぶものであるとの實地感化を與ふるを以て、其の目的としなければならぬ。かくてこそ始めて閑をかけ金を使ひて運動會を開く甲斐があると云ふものである。

運動會は此の點から観ると、云はゞ其の校實力の試験である。其の校常識の試験である。之を行ふ者も、又之を觀る者も、常に此の心を以て運動場に臨まなければならぬ。

運動會は又他に觀るべからざる實地の教訓を社會一般に與ふるものである。之が主催者たる者深く自ら警むる所がなくてはならぬ。

若し夫れ飛走の技、諧謔の術、奏樂の妙、修飾の巧に至りては、世間幾多の興行場あり、又各々専門の名手あり、又何ぞ學生を驅りて彼等の爲す所を學はしむるの必要あらんや、娛樂を求めて藝術の美に飽かんと欲する兒女等に對しては、行て一日の佚樂を恣にすべき所は世間至る所、其の場に乏しくない。我が運動會は此等

の見物人に來て貰ふには及ばない。又此等の輩の歡心を買ふべきものでない。我はたゞ天下同感の士女と共に、學生の爲に社會の爲に、他に觀るべからず求むべからざる運動會美に飽くを得ば、足るのである。

第四節 質素簡易

質素簡易

心鍛身練艱苦缺乏、質素簡易、此の三者は皆親族關係を有つて居る運動會は、嚴に奢侈を戒め、萬事質素簡易を主としなければならぬ。一時運動會が獨り學校のみでなく、廣く民間にも擴まりかけて間もなく、全く廢れたのは、心なき主催者等が前後の辨もなく、競ふて豪華を衒ふた爲に、終に其の費用に堪へず廢絶したのである。

運動會に無益の金を費すは愚なり

運動會は祭禮でもなく、又祝典でもない。期する所は心身の修練に在るのであるから、諸事實實を尙び、虚飾を捨て、人に質素簡易の美德を獎勵するを目的としなければならぬ。故に其の設備の如きも成るべく簡便を主とし、參觀者の接待等も必要の便宜を計るの外、強いて飲食起臥の慰樂を供するに及ばない。縦しんば會

の經濟に餘裕があるときでも、會の主義としてかゝる事には金を使はぬ様にす
るが宜い。

左に此の主義に基づきて運動會主催者等の注意すべき事項を述べて見よう。

器具

- (一) 會場及び觀覽所の設備に要する物品は成るべく校内に有合ふものにて間に合すべし。

裝飾

- (二) 會場の裝飾は有合せの國旗、信號旗等にて極めて清楚なる飾りをする丈
けにて充分なり、詰らぬ飾り物造り物等は排斥すべし。花火やアルコール、輕
氣球、飛揚等の無益危険なることは云ふ迄もなし。

接待

- (三) 來賓に折詰立食等の接待を爲すは斷然廢止すべし。若し事情止み難きと
きは、構内の一隅目立たざる場所に商人をして酒保を開かしめ、來賓をして

酒保

隨意に飲食せしむるが宜い。會としては一と通りの茶菓を休憩所に備へ置
けば充分なり。競技は成るべく午後より開始するが宜いけれども、都合上午
前より開始しても、來賓の案内は午後よりとすべし。地方に依りては從來の
慣行上、折詰めを開き飲食しながら觀覽する者がある。小學校運動會には殊

飲酒の惡弊

勞役を辭すべ
からず

に此の惡弊があつて、案内されたる者は恰も芝居か角力でも觀て居る積り
て居る。斷然峻拒すべし。

(四)

會場の準備、飾付け、競技中の諸雜役は成るべく人夫の手を假らず、職員生
徒分擔して自ら其の用を辨すべし。人夫等は概してかゝる仕事には役に立
たぬものであるのと、一つには校員をして校務の爲に献身的に舉手投足の
勞を辭せざる良習慣を養ふが爲である。由來本邦人は勞役を賤しむ風があ
る。運動會は卒先して此の惰風、打破の實例を示すべし。

(五)

競技後役員の慰勞を唱へて響應するが如きも無用の事なり。運動會の爲
に多少の勞力を提供するは校員當然の事にして特に金を使つて慰勞する
には及ばない。斯かる斟酌を爲すときは、爲に少なからぬ雜費を増すのみな
らず、人をして不知不識卑しき根性を起さしむる害がある。往年某學校にて
「メダル」の圖案を募りたる時、學生一人の應ずるものなく、當局者が止むを
得ず多少の金を懸賞するに至りて忽ち數名の應募者を見たるが如きは、學
生心事の陋劣驚くべしと雖も、當局者の不見識も亦た甚しと云ふべきであ

慰勞會に費す
べき金をあらば
他に之を利用
せよ

公義心の養成

要するに運動會の事務に當る者は、諸事勉めて簡便質素を主とし、新開墾地又は新殖民地の計營でもして居る心持を以て、有合せの材料、居合する人手で、深切敏活に諸般の仕事を行き、金を使はず他人の手を假らず、獨立自營諸般の計營を爲し、其の働き振りを人に示して、所謂錢金せんかねで買はれぬ貴き人の努力の好模範を垂るゝ覺悟がなければならぬ事と信ずる。今の世人皆私利を見るに敏く、事の直接己れを利するものなきときは、即ち傍觀座視して識らざる以爲するもの多き時であるから、青年學生を訓練して、共同の利害榮辱の爲には、利を捨て、義に赴き競ふて其の心身の勞を効さんとするの公義心を養ふは實に必要のことであつて、運動會はこの點から云ふと各校學生の公義心の厚薄を試験する有力手段の一である。

第五節 室内教育との關係

學業と運動

運動即ち室外教育は人の體育を完ふする外、室内教育を助長して智徳の活用實

演習時間換合せの巧拙

運動會の季節

踐を資くるものである。此の二者は恰も鳥の兩翼車の兩輪の如く、學業の爲に運動を廢すべからざるが如く、運動の爲に學業を怠ることも出来ない。双方の間に能く聯絡をつけて、同時に能く併せ行はれる様にしなければならぬ。運動は單純の體育ではなく、一の科學又は藝術として之に従事するは、即ち智徳育に關する補修であつて、之が爲に費す時間は決して單に體育の爲にのみ費やされるものではないが、假に運動に費す時間を單純の體育時間と見做し、さて勉學の時間に甚しく切入ることなくして充分運動の効果を收めようとするには、平素及び運動會前の練習時間の操り合せを巧にすることが極めて必要である。世間幾多の學生は絶て此の問題を講究して見ないから、運動は非常に時間を奪ふものと誤り信じて之を怠るに至るのである。

平素の運動時間に對して注意すべきことは、之を本章の末節に譲り、茲に運動會と學期との關係に就て留意すべき二三の事項を述べて見よう。

第一 運動會の季節

競技前の練習期間は、競技者平素の状態の良否に依り四週乃至六週を要す

ることは前に説いた通りである。而して此の期間中は、土曜日、日曜日は例外とし、平日には先づ日々約二時間の練習時を要するものと見なければならぬ。勿論此の練習時間は水上技と陸上技では大に其の趣を異にして居る。陸上技の練習は朝夕零碎の寸暇を利用して合計二時間になれば宜いが、水上技では同じ二時間も纏つた時間でなければならぬ。夫に艇庫又は端艇定繋所迄の往復時間を加へなければならぬから、陸上技に比すれば夫れ丈け多くの時間を要することになる。假に之を二時間とすれば合計四時間を要することになる。

此の故に水陸の競技會は成るべく學期の始めに行ふが宜い。中學以下の學校は三月が學年末である。以上の學校では七月が學年末である。故に春季の競技會は成るべく四月下旬に行ひ、秋季のは十月に入りて行ふが宜い。要するに春季には學年又は學期試験の終れる日、秋季には夏季休暇後の始業の日を以て競技練習を始める様にすることが一番宜いと考へる。

右は競技演習の爲に學業を妨ぐることをなきを主眼として説を爲したのであるが、實際は種々の事情の爲に理屈通りには行き兼ねる。其の事情の重なるものを

練習開始の最
初期

練習の不便

運動會と櫻の
花
競漕場の不足

天候

運動會を十一
月中に開く不
利

競技會日を定
むる困難

掲げて見れば。

(一) 春季の競技會は人情として櫻の盛りの時に行ひたがる。

(二) 東京に於ける端艇競漕は、場所が一個處しか無いから各校任意の日を撰むことが出来ぬ。爲に競漕會開催の日取りの爲に制せられて、學校教育上幾多の不利を忍ばなければならぬことになる。

(三) 次には季節の天候を考へなければならぬ。春秋とも本邦には殆んど定りたる天候がある。例せば九月下旬より十月一杯は兎角雨勝である。故に練習中の好天氣續きと、競技當日晴天の機運イキダシを多くしやうと思へば、止むを得ず九十の兩月を避けて十一月の十日前後を撰まなければならぬ。此くすると第一には、夏季休業中の旅行、水泳、山嶽跋涉等に依りて鍛練したる體力と體勢とを、一旦棄て、仕舞つて、更に十月に入りて體勢の拵へに懸らなければならぬ不利があり、第二には、競技の日が短日になると、冷氣が強くなるので萬事都合が悪くなる。

右述べた様に色々の事情があつて、競技の日を定めることは中々思ふ様に行か

ない爲に今日ではたゞ單に運動會開催の便宜にのみ重きを置きて、他の不利不便は一切顧みざるが如き一般の風あるは、少しく考へなければならぬこと、思はれる。事情は事情として無論之を斟酌しなければならぬけれども、今少しく時間の經濟及び學業との關係を重んじないと、運動會は學業を妨ぐるものとなる恐あるに至るべしと考へられる。

第二 競技前の休課

今述べた様に單に種々の事情に拘泥して運動會の日を定めると、此に掲げた様な悪弊が生じて來る。此の弊は近頃端艇競漕に伴ひて生じて來た悪弊で、平素漕遊を爲すことなく競漕前に俄に練習を始むるもの多き學校に見る所である。然此の悪弊は其の跡を絶つて仕舞はなければならぬこと、考へる。

此の弊の生じたのは、彼の「チャムピオン、レース」に是非勝ち度い、又勝たせたい、と云ふ狂熱に起因して居るのであるけれども、課業まで休んで漸く勝つたからとて、決して學生の名譽ではあるまいと思はれる。競漕は何も是非櫻の花の下でしなければならぬこともないから、少しく競漕會の日の撰み方に注意すれば此の

練習の爲めの休課

運動會の中心
各校互に競技者
の心を招待する
の利害

様な弊風は一洗することが出来る。學生をして同時に試験の下讀みと、競技の習練とに其の心身を苦悶せしむるは、決して人を教育するの道でない。室内及び室外の習練は并すすべし、決して其の一の爲に他を棄て、はならぬ。

第三 運動會の中心を設くること

各學校の競技者が互に他の學校の競技會に招かれ、自校同志又は對他校の競技を爲すは、競技の練習として最も有益なることである。然れども之には餘程注意しなければならぬとがある。自校と他校の競技會日の日取りの如何に依りて、大に利害の關係を異にして來る。即ち他校の競技日か自校の先に先てる時は至極好都合であるけれども、之と反對の場合には自校の競技會が濟んでも尙ほ其の練習を持續しなければならぬ不利がある。其の隔りが一週間位ならば宜いけれども、二週間以上だと何時迄も練習を止めることが出来ない殊に對他校の競技の場合には選手として各校を代表するものは、熱中の餘此の期間殆んど他事を顧みずして、日々其の練習にのみ心身力を傾注するの弊に陥り易い。此の不利は各學校とも成るべく之を取去ることに注意しなければならぬこと、考へる。今日

の實況を見るに、各學校間の禮儀として、又年來の慣例として、互に他校の競技者を招待して、競技せしむることになつて居るけれども、能く此の點の聯絡を計つて居るとは云はれぬ様である。競技者も又深く此の點に留意せずして、隨處隨時の運動會に参加して其の技を銜ふものある様である。併し之は戒むべきことだらうふと考へる。熱中の餘り又は自校學生に擁せられて不本意ながらも選手となりて何時迄も練習の爲に多小學業を棄てなければならぬ様になる。誠に氣の毒の至りである。

其の匡正策

此の不利を避くるには各校の協議に依りて運動會の中心を定め、而して各校の競技會は此の中心たる運動會の開設日の長くも一週間前に悉く之を済まして成るべく中心運動會に參列すべき選手をして無益に暇を費やさせぬ様にするが宜いと考へる。

陸上の運動

此の方法は陸上競技には極めて行ひ易い。陸上競技會は皆自校の運動場にて行ふことが出来るから、中心となる學校以外の學校は、皆日と同ふして競技會を開くことが出来る。故に在學生徒の年齢を同ふする學校、即ち中學は中學、同志、中學

競漕

以上の學校は其の仲間同志で團隊を設け、其の内の一校を推し、又は年々順番に之を中心として、先づ中心運動會の日を定め、各校は成るべく其の前に於て之に近き日を選びて自校の運動會を催ふことにすれば宜い。
 端艇競漕は場所が東京でも一個所しかないから前述の様な譯には行かない。故に各校の漕手たるものは、他校の招待ありとも、其の日が自校競漕會日の前後一週間以内のときでなければ参加せぬ様にするが宜い。競漕は陸上競技と異なり、隨處隨時に参加すると尠くも七人の學生が貴重の時間を浪費することになる。

以上は學生をして室外教育の爲に時間を浪費せしめざらんが爲に各學校に於て注意すべきことを述べたのである。而して此に時間を惜めと述べたのは決して練習の爲に日々少許の時間を割くことを惜んで云ふたのではない。日々二三時間位の暇潰して済めば、強いて之を惜むにも及ばないけれども、競技の済む迄は餘程老熟した競技者でないとい何事も手に附かずして、其の注意力を悉く運動

中心運動會の
實例

の爲に奪はれ易い恐があつて、詰り一週間なり二週間なり全くの暇が潰れる、夫れが良くないと考へるからである。

東京帝國大學にては去る明治二十年以降年々其の陸上競技の日に官立學校生徒の選手競走を行はせる例になつて居る。京都帝國大學では去る明治卅二年より京都府及び京都府に境を接する隣府縣の中學校と師範學校選手の爲に義勇旗競走、啓發旗競走を設けて毎春其の技を闘はせて居る。東京高等師範學校にては昨明治三十六年秋季の運動會より東京府及び神奈川、千葉、埼玉、三縣の中、師範學校生徒の爲に一の「チャムピオン」競走を始めた。是等が自然所謂中心運動會になつて居るのである。各地とも斯くの如き運動の中心を作り、他校は其の中心に集りて力を闘はすことにし、各自に競技者を招待するは、爲に學生の暇を潰す恐れなき場合のみに限る様にするが一番好いと考へる。夫には各校とも此の點に關する聯絡を一層能く附ける様にすべしである。今日迄運動の事に關して各學校間に一回も協議會を開きたる事なきは、慥に我が教育界の一缺點と考へられる。又毎々八月琵琶湖に行はれる武德會主催の競漕會も追々整頓したらば、我が

端艇界に新紀元を開くに至るだらうと思はれる。

之を要するに運動會は是非盛に行はなければならぬけれども、爲に直接間接に學生をして多くの時間を潰させ、其の極時間を惜むか爲に運動を廢するに至らしめざる様、會の季節、又は各校の聯絡等に注意し、學生をして運動練習を口實として學課の休止、又は試験定日の變更を情願せしむるが如きことなき様にしなければならぬこと、考へる。

第六節 運動の研窮

運動の研窮

運動會最後の目的は運動の研窮である。數句の練習を積み、數千の觀者を集め、拍手喝采半日の快を貪り、會散じて何等遺す所なき様では決して運動會の目的を達し得たりとはすることは出來ない。運動會は運動の理法を研窮すべき好機會を與ふるものであるから、競技者は勿論世の教育者たるもの、及び醫科、工科、理科を始め、苟くも人の心身に關する科學を研窮する人士は、此の機會を利用して自

運動協議會

家專攻學理の研窮を資くべきである。漫然運動會を催ふして之を興行物視するが如きは、決して學に忠なる者、又は人の教育に深切なるものと云ふことは出来ぬ。

如何にして運動の研窮を爲すべきやは、本書に論すべき限りでない。余輩はたゞ本邦に於ける運動會の大流行に比して、運動研窮の極めて幼稚なるを見て世の識者に向ふて少しく其の腦力を心身鍛練術の研窮に注がれんことを切望して置くのである。前節に述べたる各學校の運動協議會は一日も早く其の開催を見たまきものである。

上來節を重ねて運動會の主義とすべき大綱を述べ、主義なき運動會が如何に多くの恐るべく厭ふべき弊習を生じて、一般の運動界を腐敗せしめたるかを詳述した。これより本章の結論として、以上述べ來りたる各項を總括し、目下我が教育界の一問題たる學校運動振興策に對し聊か愚見を述べて見よふと思ふ。

第七節 結論(運動振興策)

余輩は前數節に於て運動會の本旨を説き、近時の運動會に伴ふ種々の弊害を指摘した。讀者は如何に運動が誤解せられて居るか、如何に一般社會に重視せられて居らざるか、如何に恐るべき弊害を醸しつゝあるか、又如何に一見甚だ盛なるが如くにして、其の實は即ち極めて不振の極に達せるやを識り、同時に其の腐敗不振の原因の那邊に在りやを明にせられた事ならんと考へる。

運動の振はざることは、今日何人も認むる所であつて、其の振興策に就いて苦心して居る人が甚だ多い。然れども未だ能く良結果を得たと云ふ話を聞かないのは、運動不振の原因が前各節に述べたる如く、極めて複雑して居て、根本より其の改善を試みなければ到底之を振興することが出来ぬからである。世人が運動不振と云ふのは多くは競技會のみを視て云ふのであつて、其の平素に於ける運動の盛否に就いては餘り意を注いで居らぬ様である。

競技會の年々衰退したるは事實である。今日に於ては各學校の競技會は全校生

運動不振の甚
く所遠く且つ
深し

競技會の衰退

平素の運動の衰退一層甚し

運動不振の原因を青年士氣の銷沈のみならず、
因るは酷な競争の過剰に

徒の一部の爲に開かれて居て、大多數の學生は少しも利害を感じて居らぬは一般の實況である。此の故に局に當る人々は百方苦心して參列者の多からんことを勉め、爲に却て種々の惡弊を醸すに至つたのである。

競技會が今日は殆んど運動獎勵の實なき迄に衰へたのは事實であるが、然らば競技に參列する者が年々減じて來たばかりで、平素に於ける運動は左して従前と異なれる所なきかと云へば、哀い哉平素の運動の衰へたること、競技會に比して更に一層甚しきものがある。要するに平素の運動は本である。本が衰へたから其の末たる競技會の衰へたのは敢て不思議とするには足らぬ。

斯く運動が衰へたのを觀て、是は全く今日青年の士氣銷沈したる爲なりとて大に慨いて居る人もあるけれども、運動不振の原因は先に詳述したる如く種々の事情があるから、獨り今の青年のみを咎むることは出來ない。否、實の處は青年に對する鼓舞獎勵の道が全く欠けて居るからである。故に此の不祥なる傾向を挽回して、室外教育の効果を大ならしめようとするには、先づ根本的に運動の大刷新を行ひ、青年をして自ら其趣味を感じ、利益を曉らしむるが、一番捷路である。

其の六

其の五

其の四

平素の運動を振興する策

其の三

其の二

青年が運動を重んずる原因

其の本を窮めずして其の末のみに勉むるは、勞して功なきのみならず、却て益々運動の眞面目を失はしむるのみである。

運動振興策を講ずるには、眼中に競技會を置かず、先づ平素の運動を盛ならしむることから始めなければならぬ。競技會は畢竟するに平素時きたる種の實である。平素の培養が外宜しきを得れば、どんな奇麗な花でも實でも思ひのまゝである。

平素に於ける運動を振興するには、左の三點に留意することが肝要である。

(一) 學生を鼓舞獎勵すること。

(二) 運動の設備を完ふること。其の設備の乏しきものは、運動の盛んなることを期すべし。

(三) 小集會に力を入れること。小集會は、運動の盛んなることを期すべし。

これより此の三策を詳述しよう。

第一 學生を鼓舞獎勵すること。運動の盛んなることを期すべし。青年士氣の銷沈が運動不振の主要原因たることは、前ふべからざる事實である。然れども、天下の青年をして、漸くは文弱に流れしめたるは、之を起して運動の趣味を

其の一

解し利益を識らしむることを怠れるが爲である。更に之を詳述すると今日の青年學生が運動を輕視して之を勉めざるは左の事由に依るのである。

(い) 運動の眞價を知らず運動は單純なる體育たるか、又は一の娛樂たるに過ぎずと思惟すること。

(ろ) 今日には智力競争の時代なるを以て身力を鍛ふるの暇なしと思惟し、而して身力の伴はざる心力は結局其の働の乏しさものたることを曉らざること。

其の三

(は) 智力は身を終ふる迄研鑽することを得るも、身力は一定の年齢を過ぎては悔ゆとも及ばざること、に氣が着かざること。

其の四

(に) 小學中學時代に於ける室外教育不完全なるが爲に學生をして却て運動を一の苦役の如くに思はしめ、其の趣味を失はしむること。

其の五

(ほ) 體力と智力は反比例に發達すとの俗説に惑はさるゝこと。

(へ) 運動に沈溺し學業を顧みざる所謂「メダル」乞食をして運動界の覇者たらしむるが如き傾向あるを以て、心ある學生は自然に運動家と稱せらるゝを

其の六

屑しとせざること。

其の七

(と) 運動は競技會の爲にするものと誤解し、自ら競技會場の優者たる能はずと信ずるときは全く運動を勉めざること。

其の八

(ち) 運動は多くの時間を空費するものと誤解すること。

(り) 運動會の期日當を得ず、爲に安んじて其の練習を爲し能はざること。以上は今日の青年をして日を追ふて柔弱に流れしむる主たる原因である。勞を避け佚を求むるは人の弱點である。青年を鼓舞激勵して其の士氣を盛ならしむるは實に父兄及び教育者の責任である。彼等をして室外教育の忽にすべからざることを識らしめ、彼等の迷信を破り、誤解を正し、彼等をして運動の趣味を解せしめ、又安んじて之に従事するの便宜を與へ、彼等の爲に適當の運動を擇み、最良の演習法を教へ、運動界の空氣を一洗して、以て青年の士氣を鼓舞するは實に運動振興の第一義であると考へる。

運動設備を完

ふせよ

第二 運動の設備を完ふすること。運動の設備が不完全で、多くの學生をして其の利便を享有せしむることが出來

ないのは、今日全国の各學校皆然りと云ふべく、これでは運動不振を訴ふる権利はないと謂つて宜い。土臺運動をすることが出来ぬのである。運動に因る高尚の娛樂を味ふこと能はざる青年は、好ましから方向に快樂を求め易くなる。斯くて益々運動は振はなくなるのは當然である。資金乏しき學校などは、競技會など開くことを廢して、平素に向つての運動の設備を少しでも多くする方が、學生の爲め、どの位仕合だか知れないと考へられる。

第三 小集會に力を入れること。

一年一度の競技大會のみに全力を注ぐと、其の學校の運動は衰へて腐敗する。學校は兵營の様に強壯なるものゝみ揃つて居りはしない。體力學業に堪へ得るを限りとして、夫れ以上の體力あるものが雜つて居る。夫れ故に年一回の競技大會のみ行ふと生來強壯の體格を有するものゝみが之に參列し、他の多數の學生は自然之に遠かつて、少しも利害を感ぜぬ様になり易い。尤も運動の目的は決して競技に列せんが爲ばかりではないから、體格比較的強壯ならざる者は、競技には加はらずとも矢張り運動はしなければならぬ筈ではあるが、人情は理屈の外で

屬々小集會を開け

大會のみ行ふの不利

あるから、自ら競技に列する見込なきものは、自然運動に對する趣味を失ひ、終に平素少しも運動を勉めざる様になり易きものである。こうなると運動場は愈々少數強壯者の獨占となつて、競技會の當日參觀者の殆んど全部は外來の人のみにて、其の學校學生の殆んど全部は、早朝より外出して己がしゝ校外に慰樂を求め、めるなど云ふ奇觀を呈することがある。

其の必然の弊

そこで其の學校で頻に苦心して競技會を盛ならしむる策を立てる。誰れにても出来る様な競技を加へる。多數で行ふ團隊運動を工合する。番附が長くなる。運動が活氣がなくて、觀て居ても少しも壯快を感じない。そこで滑稽行列となる。飾物が出る。花火を打揚げ風船を飛ばす。心ある學生は出場を厭ひ、眼ある人士は次會よりは來觀しなくなる。篤志者の同情は年々減じる。爲政者は運動會を無用視して運動に關する經費を減ずるとも増しはしなくなる。

運動の目的

抑も室外教育の目的は、全校の學生總員に其の利益を享けしめるのにある。平素全學生が運動を盛にやりさへすれば、競技會などはやつてもやらなくても宜いのである。又競技會なるものは、其の性質上決して多數の學生に競技せしむるを

目的とするものではない。之に向ひて強いて多數學生を參列せしめんとするは甚しき誤りである。學校に於ける運動は成るべく多くの學生をして室外教育の利を享けしむるを本旨とすべきであるから、此の目的を達するには獨り競技大會のみに力を傾けてはならぬ。是非とも年中絶えず各種運動の競技小會を開き、全學生をして各々其の好む所に従ひて、技を圖はし身力を鍛へしむることを勉めなければならぬ。

一般の實況

現時全國各學校の慣行は全く之と反對で、年一回の大會のみにて小會と云ふものは行はれない。故に大會の時に競技に列するものは全校運動家中の精銳と云ふのではなくして、此の小數者以外には又一人の運動家なしと云ふ如き學校もある。これ全力を大會のみに傾け盡して、平素全員に對する運動の獎勵其の宜しきを得ざる爲である。畢竟經費の關係上屢々小會を開き得ざる爲めであらうけれども、大會の費用に大削減を加へ、場合に依りては全く之を廢して、資金と力とを全く小會に注ぎ込む方が運動の本旨に協ふのである。例せば賞品の如きも大會に於ては何等賞と書きたる奉書四つ切りでも構はぬから、小會には必ず相當

の物品を與ふることにし、勉めて平素の運動を獎勵するが宜い。小會が盛になれば大會も隨て振つて來るべきは自然の勢である。我が校五百の生徒あり、内百米突を十一秒以内、走り得るもの五六名あり、他は皆虛弱にして、劇働に堪へずと云ふのと、我が校五百の生徒中、著しく健脚のものなしと雖も、十中九迄は百米突を十二秒内外に走り得ると云ふのと孰れか運動の本旨に協へりや、云ふ迄もなきことである。

平素の運動は以上述べ來つた手段を用ひなければ決して之を振興することは出來ぬ。平素こゝ迄盛になつて來た處で始めて競技大會を開くべきである。若し平素の運動なく、又全生徒の運動なきに拘らず、小數の運動家を捉へ來りて大會を開き、以て自校生徒の體力を誇るが如きは、百の害ありて一の利を見ざる所である。世此の類の競技會多きは誠に歎ずべきことである。次に少しく競技會の性質を述べて、之に對する一般の誤解を正して置き度いと思ふ。

競技會の性質

競技會の特色
其の原則
其の例外

競技會は優秀者のみを集めて技を闘はすものであつて、多數の運動家をして之に参列せしむべきものでない。故に競技者の數多きときは、豫め撰拔競争を爲さしめて其の人員に制限を施すを通例とする。此の故に嚴正に云ふと、競技大會のときは、全校中最も優れたる小數の競技者のみが其の技を闘はすことを得るのである。然れども學生の數多くして平素の運動盛なる場合には、獎勵の一助として成るべく多くの學生に競技の快を與ふることを忘れてはならぬ。

多數者獎勵の意義
其の誤解

併し、此の多數者の獎勵と云ふことには深く注意しないと例の色々の惡弊が生じて來る。今日普通の陋習は全く此の競技大會の性質の誤解から來るので、即ち(一)所謂餘興的競技を加ふること(二)兒戲に均しく技術も體力も何も要せず、全くの機運一つにて賞品か貰へる様な遊戯を加へることがこれである。鼻下に鼻を著へた學生で往々熱心に兒戲的競技の必要を論ずるものもあるのは滑稽と云ふより外はない。こんな窮策を講じたり、情ない弱音を吐かなくとも、嚴正なる競技大會場裡尙ほ多數に對し、又は比較的劣者に對して、其の快を分つの餘地は幾

多數を参加せしむべき方法

らもある。試に之を述べれば

- (一) 競技者を甲乙丙等の數級に分ちて、各級別々に競技せしむること。
- (二) 衡平率を用ゐること。
- (三) 應用競技を加ふること。

等である。然しこれにしても、少くとも體力中等以上の者でなくては参加するとは出來ない。競技に加はりたくは自ら筋骨を練るべしである。これを之れ勉めずして、兒戲的運動を競技の番組に加へんことを求むるものがあるが如きは餘りに情ない事である。以上節を追ふて一通り運動會に關する一般の總論を述べた。これより競技運動會の事を述べよう。

第二章 競技運動會

競技會は運動會中の最も重要なるものであるから、所謂運動の六大主義を貫徹

して華も實もあるものとするには、極めて周到なる注意を以て諸般の計營をしなければならぬ。これより競技會に關する實地問題に就きて主催者の心得べきことを詳述しよう。

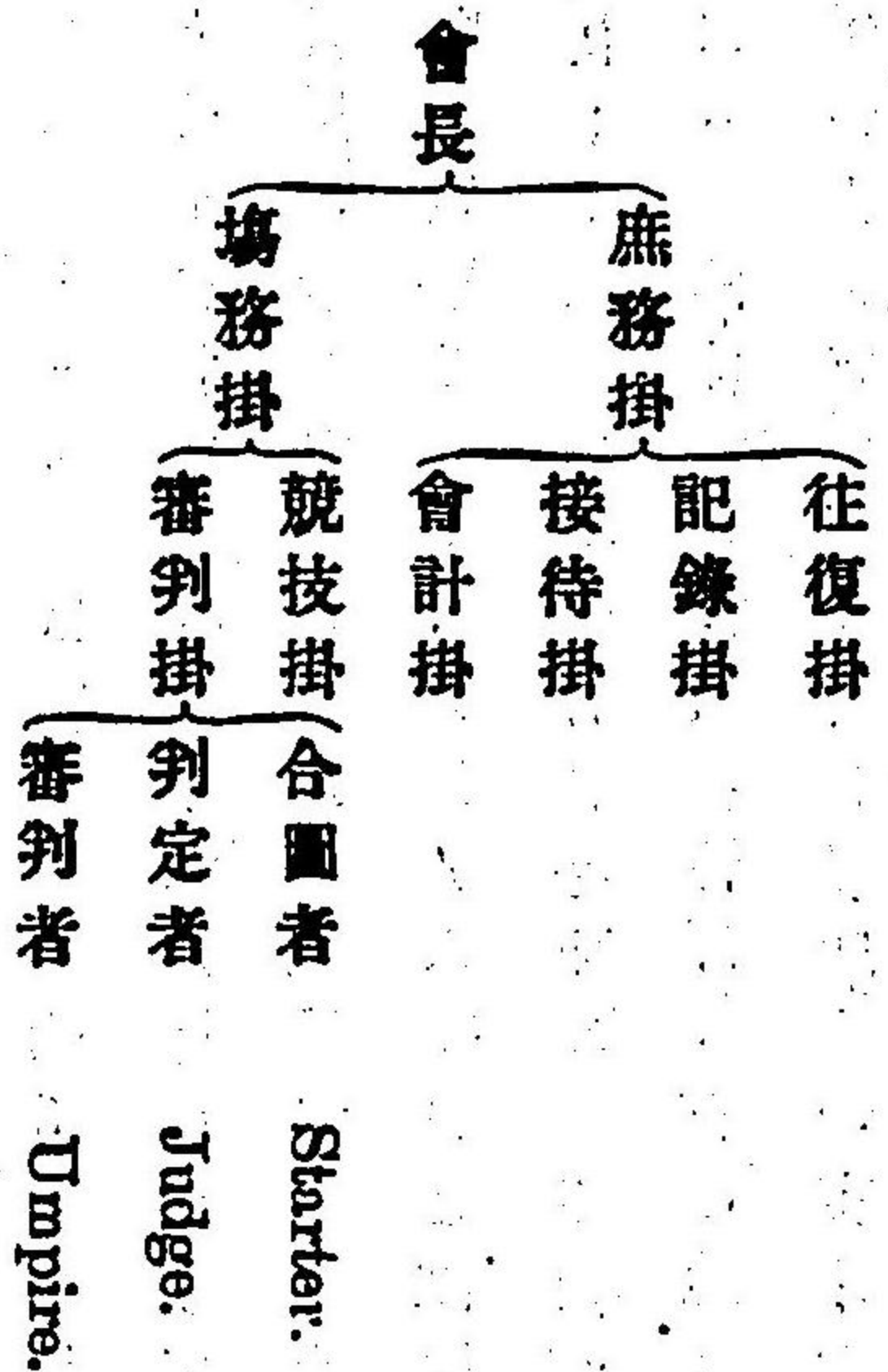
第一節 事務處理

競技運動會の事務は大別して庶務と場務の二とする。庶務とは往復、記録、接待及び會計の事務を總稱するので、場務とは即ち競技場に於ける一切の事務を云ふのである。

運動會は或る意味から云へば、學生に事務處理の才、即ち所謂吏才を養ふ機會を與ふるものであるから、役員組織、事務の處辨、勉めて簡便敏捷を旨とし、成るべく少人數にて短時間に、極めて繁忙で寸時の遲滯を許さざる仕事を片付けて仕舞ふ好實例を示すを專一としなければならぬ。試に其の役員組織と事務の分掌法とを示せば左の通りである。

庶務 場務
運動會は吏務
練習の場から
分るべきから

事務の分擔
庶務掛
競技掛
審判掛



庶務掛の分課は別に説明の要はない。各掛又必ずしも別個の人たるを要しない。少數の同じ人で兼務して宜いのである。たゞ接待掛は成るべく多人数の方が宜い。

場務掛中の競技掛は、競技場の設備、競技中競技用具の備付及び其の撤去、競技成績の計測、競技成績の揭示、來賓競技者の應接及び通信記者の應對等を掌るのである。

審判掛の職務は分ちて、合圖、審判及び判定の三とする。合圖とは發走又は發漕の

合圖者
審判者

合圖を下すこととて判定とは競歩走者又は競艇の決勝線に着する先後を見分けることである。而して審判とは競技中競技者の所爲の正否を監視し、競技の公正を維持することを云ふのである。

其の兼務

競漕の審判者は汽艇に乗りて競艇に尾行する必要がある。此の場合には審判者は合圖者を兼ねることが出来る。

助手

陸上競技では審判者は自ら競歩走の判定者を兼ねることが出来る。競漕の合圖者及び判定者には、助手として銃手又は砲手一名を附屬せしめなければならぬ。陸上競技には、審判者に四五名の助手が必要である。

競技委員

場務掛りの事に就いては本章第六節に至りて更に述べることにしてしよう。此の外、競技の種類を撰定したり、競技者の組合せをしたり、衝平率を定めたり、番組の順序を定めたりする爲に、別に委員を設けて此の事務を處理せしめる必要がある。併しこれは競技當日に必要な役員ではない。

學生の役員

競技會に直接關係ある役員の幹部は右の通りである。而して各掛りの人員は成るべく少い方が宜い。學生をして此等の吏才を養はしむるには小會を以て其の

場務の勞役

手習双紙とし、大會には物慣れたる少數の人に一切を委任し、學生をして見學せしめ、高級の學生のみを撰みて其の助手とし、實地の責任を分たしむるが一番良法である。

受付門衛番人

競技場に於ける各種の勞役は成るべく職員生徒自身之に當り、止むを得ざる場合の外、人夫の手を假らざる様に勉むべきことは前章に述べた通りである。右の外、受付とか、門衛とか、競技者仕度所の番人とかの事は茲に述べる必要はない。

競技會の役員幹部は本文に述べた通りである。其の人員や事務の分掌又は兼務の事などは、人の問題でもあり、又各學校の事情の如何にも依ることであるから、茲に一定の標準を示すことは出来ぬ。宜しく實地に就いて考案すべきである。運動會と云へば競技にのみ重きを置きて、全般の事務處理の事は次の次にされて居るけれども、學生に常識を與へ吏才を授け、他日世に立ちて巧に仕事を爲し得る様に訓練しようと思はば、先づ學校内でやる此の如き仕事に就いて充分の實習見學をさせなければならぬことと考へる。教育上決して輕々視すべからざる事である。

次に本文に述べた事項二三を追補しよう。近頃何處の運動會でも極めて多數の審判部員を置くことが流行して居る。即ち審判

判定合圖の三部とも各々長一人部員數名ありて、審判部員の數が競技者よりも多い
 様なこととも折々見受けられる。これは無用の事と思はれる。人が多くなると兎角無責
 任に流れ易いものである。現に數年前京阪地方の或る運動會に、番附に掲載してある
 審判者が當日一人も出席しなかつた實例がある。競技者が審判部員を蔑視して其の
 審判に服せず、紛擾を來すことなどあるも別に怪むに足らざる所である。

- (一) 審判部員を多人數にする慣習の生じたのは左の原因に依るのである。
 - (二) 病氣又は不時の差支を恐るゝこと。
 - (三) 競走の判定者は多くは端艇に乗せられて島流しにされ、又其の合圖者も同様發
 漕艇に島流しにされて居るから、時々交代して其の體屈を救はふとする爲に人數を
 増すに至れること。
 - (四) 競走者の風儀悪しく、審判者の目を掠めて不正を働かんとするものある爲め、監
 視の必要上其の數を増すに至れること。
 - (五) 競技の時間長時間に過ぎ、審判部員を交代休憩せしむる必要あるため。
- 審判の公正を衡ふが爲に多數合議制を採らんとする爲め。
 先づ重なるものは此くの如してある。孰れも止み難き理由とするに足らぬ。萬一の差支
 を慮りて補欠者を置くは必要であるけれども、餘り多人數にするのは不必要であり、
 且つ前述の如く各自無責任となり易い。競走の合圖者は審判者に兼ねさせれば、多く
 の人を迷惑させなくとも済むべく、又其の判定者の如きも點庫内に其の席を設けさ

へすれば、決して之を體屈させる恐れはない。要するに競技に長けたる多くの人を審
 判部員として賃を持たせるよりか、寧ろ此等の人に競技の技術的觀察を委託し、専心
 之に従事せしめ、其の報告又は批評を集め、運動研究の材料とする方が餘程利益があ
 る。審判部員として責任あるときは、専心技術的の觀察を恣にするとは出來ない。
 何處の運動會にも其の役員中に召集掛と云ふものが匿いてあるが、是は無用の役員
 たるのみならず、此の如き役員を必要とするのは偶々以て其の校競技者の不規律な
 ることを表白して居るものである。小學兒童ならばいざ知らず、苟くも中等以上の教
 育を受けつゝあるものが、自己競技の時刻をも知らず、呼び集められて始めて出場す
 る様な事では學生たるの面目が立たないと云ふて宜い。斷然かゝる役員は廢止すべ
 してある。此の召集掛なるものは明治二十年の大學競漕會の時に臨時に設けたもの
 である。舊東京大學は明治十九年に數個の官立學校を合併して作つたのであるから、
 二十年始めて大學第一回の競漕會を開くときには、職員も學生も面識なき者多く、又
 競走者の任度所等も一個所に纏つて居らなかつた等の爲に、萬一の混雜を慮り召集
 掛を設けたが幸にして此の掛員は何も用がなくて手持無沙汰で居た。これが召集掛
 りの起りである。今日では各地の運動會とも此の掛りは極めて必要欠くべからざる
 ものとなつて居るか、此の掛員が設けてある爲に、競技者は益々不規律になつて來て、
 之を呼び集めるのが一仕事になつて居る。運動會の行政整理の第一着として速に此
 の冗員を廢するが宜い。これあるは即ち其の校の不名譽である。

會場設備の三要素

競技會は其の會場教訓の一として、多數の會衆を秩序を尊び、公德を重んずるの美風に馴致することを目的としなければならぬ。而して此の秩序公德の弛張は會場設備の良否に關係することが多い。故に競技會場は利便、區劃、及び展望を以て其の設備の三要素としなければならぬ。

其の一 利便

利便とは競技執行及び會務處理に都合好くすることを云ふので、競技の公平を保ち其の進行を速ならしめ、會務の敏活勢力の輕減等は一に設備の良否に關係して居る。

其の二 區劃

區劃とは競技場及び觀覽場の區劃を云ふので、主として會場の整頓、會衆の秩序、接待の利便、非常に對する警戒等に留意して遺算なきを計らなければならぬ。

其の三 展望

展望の良否は公德維持の第一義である。會衆が不行儀に流れ、來賓中の老幼又は婦人等に不満足を與ふるが如きことは、主として此の展望の不良に基づくのである。獨り運動會場のみでなく、何れの式場でも會合でも、展望が不良だと決して居る。

第二節 競技場の設備

會長の用意

會衆の公德を維持することは出來ない。必ず無作法を働くものが出て來る。利便、區劃、展望此の三者は實に競技會の成功と失敗とを分つ重大なる要素である。故に運動會に長たる人は、深く此の點に留意し、會場の設備を爲すに當ては、杭一本の打ち處、繩一筋の張り處まで、一々實地に就いて其の適否を検すべく、決して心なき人夫任せなどにしてはならぬことである。

第一 競漕場の設備

競漕會場として適當の場所を得ることは極めて困難である。何となれば、直線にして巾、深さ、長さとも宜しきを得、而して水流均一なる場所は容易にない。湖水の如きは此の要素はあるけれども、無論普通の場合には役に立たない。多くの學校では是非河流か、海岸に求めなければならぬが適當の場所は誠に少ない。東京の隅田川の如くてさへ、先づ比較的好的場所の内に加へられて居る。單に競漕の場所としてならば、随分好い所もあるけれども、競漕會を開く場所となると、學校に近きこと、觀覽に便なること、等色々の事情があるから、水流の適否のみに依りて

良好なる競漕場を見出す困難

場所を定めることは出来ない。たゞ成るべく直線にして、水甚しく淺からず、水流甚だしく不均一ならざる場所を得て満足すべきである。

さて競漕水路を定むるには、正式に云へば、或る一定の長さを取り、之を縦に割り、水面に數條の線を引き、此の線に於ける水流の平均速度を實測して、各水路の長さを伸縮して公平を保たせる様にして見たいとの慾が出て来る。然し之は一の空想で到底之を實行することは出来ない。第一實測が極めて困難である。河岸河底海底の様子は常時變つて居るから、幾多の苦心を積んで實測したものも、數月を経れば皆狂ひを生じて来る。川の水量も日々同じでない。海の潮流も旦夕違つて居る。又假に數年間著しき異同なきものと假定して見た所が、競艇の進路は決して「レール」の上を走る汽車の如くに、毎次一線上を進行しやしない。又各競艇の形も重さも、姉妹艇だからと云つて決して均一ではない。此の如き複雑な關係があるから、到底理想的に競路の公平を計ると云ふことは出来ぬ。故に競路の平均速度に著しき差がないときは、水流均一なるものと断定し、甚だしく緩急の差あるときは、目分量で適宜發漕線に對して決勝線を曲げて置くより外仕方がな

競路の長さ

い。

競路の長さは英國流では一海里を基準として二分一、四分三、二海里等として居る。本邦では東京帝國大學で千百米突と定め、たのが目安となり、東京に於ける他の學校では百米突減じて千米突にして居る。此の百米突減じたのは大學生に比して年齢若く、且つ重い端艇を用ゐて居ると云ふ邊から割り出したのらしい。而して大學では何故千百と云ふ半端の數にして居るか、と云ふと別に理由はないので、たゞ艇庫の中央を決勝線として夫より南方へ千米突測つて行く、と丁度一、小支流の注流口の僅か下流の所に當り、其處から吐き出す水流の爲に競艇は發漕後未だ十分の速力が附かざる内に艇首を横に押し曲げらるゝ恐れがある。依りて之を避けんが爲に少しく下流に下がると丁度測量するに好い場所があつたから、乃ち其處を起點として測つたら偶然千百に近い長さが出たと云ふ次第なのである。これが目安となりて今では全國一般千米突と云ふことになつたのも亦た一奇と謂ふべしである。然れども競路の長さは競艇の大小輕重、又は水路の實況に依りて定むべきもので、是非千米突と云ふ一般の流行を襲ふには及ば

競路は成るべく長きを宜とする

競路の實測

發漕決勝兩線の設備の其否は實に競漕の生命なり

發漕線浮標併列の巧拙

ない。艇軽く競路短きときは競漕は機運マキンスの争となりて實力の争たることが出来なくなるから事情の許す限り長くする方が宜い。さて適當の場所を見定め、長さも定りたらば、第一に着手すべきは發漕及び決勝兩線を極めることである。これは學生をして實地に測量させるが宜い。若し學校の手にて測量が出来なければ、其向きの技術家に依頼して測量して貰ふべし。一度測量して其の實測圖を保存し、又兩線に標杭なり、標石さへ建て、置けば次の年からは大に手が略ける。

競路の實測が出来たらば、競漕の前日中に發漕決勝兩線の設備を済まさないければならぬ。此の兩線の設備は實に競漕の生命である。無用の遷延遲滯と彼の忌はしき判定上の紛擾は、此の設備の不完全なるに起因することが多い。

(一) 發漕線の設備。

發漕線の浮標が一直線に浮べてあると、競艇が各其の浮標に着いて、艇舳か舵手か、浮標の索を手に取りさへすれば、艇首は殆んど皆一直線に列んで仕舞ふ。多少前後して居ても五寸か一尺位の差である。合圖者の命に従ひて少しく索を伸

浮標併列は難事にあらす

其の良法所要の器械物品は、錨は八貫目内外を好しとす

縮すれば艇首は正しく一直線に揃つて仕舞ふ。此くて合圖者の仕事は小供にても出来る様になる。之に反して浮標が揃つて居ないと、競艇を揃へること、競馬の馬を揃へるよりも困難になり、潮流急なるとき、又は強風あるときは、非常なる長時間と合圖者の忍耐力とを空費し、而も竟に公平なる發漕を見ることが出来なくなる。故に此の浮標の浮べ方には最も力を注がなければならぬ。

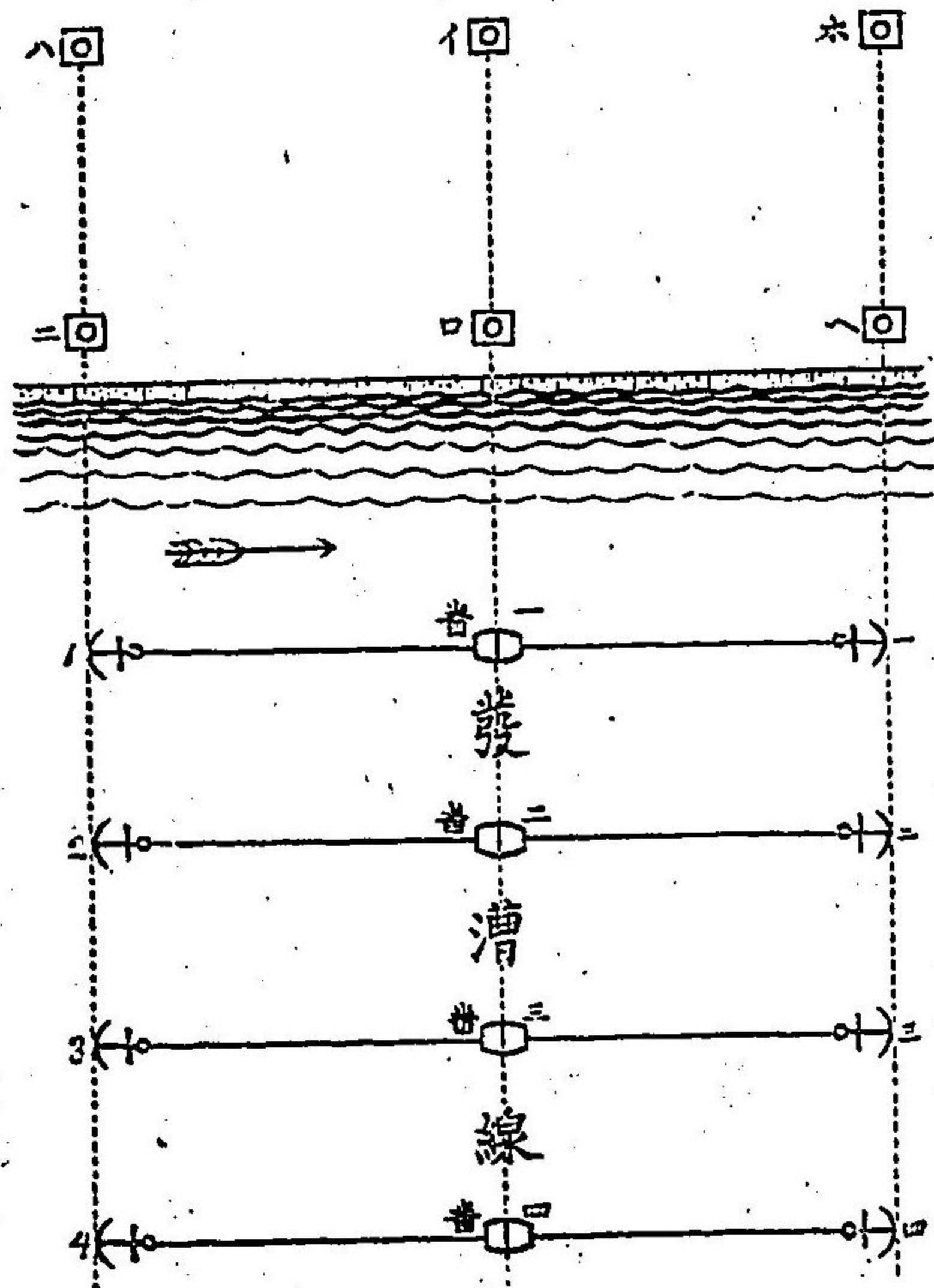
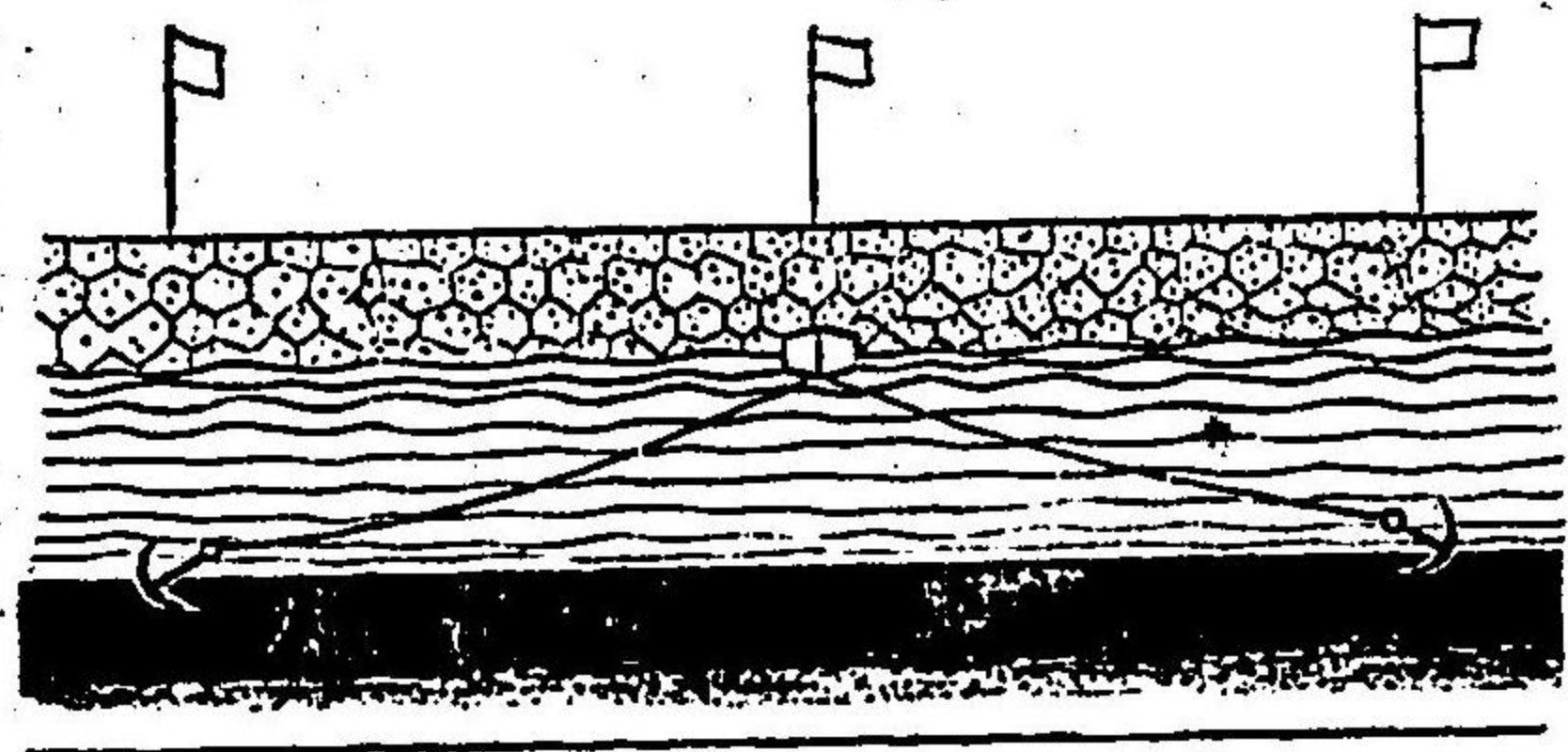
三個以上の浮標を一直線に浮ぶることは非常に困難なること、考へて居る人が多い。然しやり方一つでは決して六ヶ敷事ではない。全く始めての人にも容易に出来る。其の法は左の如してある。

入用な品は競艇の數だけの浮標、假に艇數四隻とすれば、浮標四個、成るべく重さ錨八個、成るべく長さ錨索八本、測量に用ゐる、アルヘイ棒六本、若し無ければたゞの竹竿に小旗を附したるのでも宜い。此の棒の六本と云ふのは、浮標數とは關係はない。何時でも六本入用である。夫から一升樽若くは其の位の大さの木片に、水深よりも少し長き細糸を付け、其の端に小さき錨でも、煉瓦石でも、又は手頃の石でも、何なり錘を付けたる假浮標五六個、外に小さき和船一艘とポート一艘。

所要の人員
作業の順序
陸上作業

所要の人員は競技掛三名と船頭一人都合四人。
競技掛は發漕點に至り、第一に發漕線の延長線上に數歩を隔て、(イ)の標竿を建て、次で(イ)線の上流及び下流に(イ)に並行する(ハ)及び(ホ)の二線を畫き、

第十七圖



水上作業

(ハ) (ニ) (ホ) (ヘ)に標竿を建てる而して此の各線の(イ)よりの距離は浮標に用ゐる錨の長さの約五分の四とする。水深から割出すべし。
陸上の準備が済んだら競技掛二名は和船に乗り、一名はポイントに乗りて發漕線の上でも下でも約二百米突程の中流に漂泊して居る。
和船は第一着に潮流に逆つて一番浮標の(1)の場所に至り、岸より適當の距離を見(ハ)の延長上に船を停止せしめて其の線に垂直に錨を投じ、同時に假浮標をも同じ點に投げ込み錨索を手繰りつゝ下流に流れ(イ)線上にて船を止め浮標を水面に浮べ、夫れが(イ)の見通し線上に在る様にして(1)の錨索を以て之を繋ぎ止め、直に(一)の錨索の端を浮標に繋ぎ、今度は其の索を手繰りつゝ船を流し(ホ)の見通し線に至りて船を止め、暫く其の儘にして居ると、此の兩錨索が十分に伸び切つて水流と同方向の一直線となる。其の頃合を見て(一)の錨を(ホ)の見通し線へ下げる。
(一)の錨を投じて和船は直に一番浮標の處に歸り、兩索を解き一人は(1)を取り一人は(一)を取り、先づ(一)の索を充分曳き締め、次に(1)を同時に曳き締め、此の間絶

えず(イ)(ロ)の見通しを睨み、浮標の中央が其の線上に在る如く加減し、愈々好いと云ふ所にて兩索を固く結ぶ。之にて一番浮標の位置は極つたのである。船は次に(ハ)(ニ)の延線上(2)の邊に行き、(1)の假浮標に對し適宜の間隔と思ふ所に(2)の假浮標を投げ、遂に、ボート乗込の競技係を顧みて一番假浮標との間隔の適否を問合せる。ボートよりは豫め定めたる簡短な信號測量手の普通用ゐるものにて宜いて相當の指圖をする。此方の兩人は其の指圖に依りて、更に第二第三と假浮標を投げ込み、愈々孰れのが好いと極つたら、夫れのみ残して他の假浮標を引揚げ、今度は三番浮標の(3)の錨の位置を極めに行き、(2)の錨と同一法で之を極め、引續き同じ順序で四番浮標の(4)の錨の位置を極める。此の各浮標の間隔を取るのが浮標列へ中の最も面倒なる仕事である。假浮標の位置が極まれば、ボートは用済みとなる。

残る所は二番三番四番の浮標を浮ぶるのみである。これは一番と同一法を繰返すだけで、上下兩索を最後に結び止むるときに、浮標が(イ)(ロ)の見通線上に据わる様にしなへすれば宜いので、少しく丁寧にやりなへすれば誰にでも出来る仕事である。

浮標列への秘訣

である。

浮標列への作業は右述べた順序でやりなへすれば、始めての素人にでも容易く出来るが、若し此等の準備を爲すの勞を厭ふて、何等前述の様な準備なくして掛らうものなら、夫れこそ非常な難仕事になつて、タトへ前述の時間勞力の倍又は三倍を費すも、決して満足の結果を得ることが出来ぬこと請合である。此の浮標列へには只一の秘傳がある。退潮の所謂八合目位の時に作業する事である。潮流緩慢なるときには兩索が緊張しないから、兩索を流れと同方向にすることが出来ない。之れが爲に少からぬ勞力と時間とを要する。又干潮の極度に近い時に兩索を締めて置くと、潮の干満即ち水面の上下の爲に浮標線が水底に對する位置に著しき狂を生ずることがなく、浮標は潮の干満に拘はらず常に發漕線上に列んで居る。成るべく太く重き索を良いとするのは全く此の爲である。重い索だと人の力で充分締めても、尙ほ幾分か垂んで居て、滿潮時には水の力で丁度宜い加減に緊つて来る。潮が引くと又好い加減に垂んで来るから地盤に對する、浮標の位置は著しく移動しない。又成るべく重い錨を用ゐよと云ふのは、競艇

が浮標に着いてから、艇首は揃つて居ても、艇身を競路と同方向に保つ爲に、兩舷の棧を使はなければならぬ。風のある日は殊に然りである。詰り錨を下ろして漕いでるのである。軽い錨や又は短き錨索を用ゐると、錨が曳けて位置が狂ひ、切角苦心して列べた浮標も競漕二三番後には役に立たなくなる。

(二) 決勝線の設備。

決勝線の設備は發漕線程に骨は折れない。たゞ見透し板を建て、水面に舵手の目標を兼ねる小旗付きの浮標二三個を浮べて置けば充分である。

「スリット」は巾五六寸長さ五六尺の板の中央を、巾一寸乃至二寸切り透し、尙ほ其の中心線に白き絹糸一本を張りたるもの二枚を作り、數尺の距離を隔て、決勝線上に建て、置くのである。建て方は適宜の方法で宜しく、只だ前後の絹糸が正しく決勝線上に垂直になつて居さへすれば宜いのである。

判定船を水上に浮べ、其の前面の水中に「スリット」を建てると、仕事が面倒で金もかゝる。故に金錢勞力の經濟の爲には判定所を陸上に設ける方が宜い。又斯くすれば前に述べた如く多數の判定者を撰任する必要もなくなる。

決勝線の設備

「スリット」の製法及び建て方

判定船の不利

決勝線上の浮標

決勝線上の浮標はたゞホンの目標に過ぎないから一つ錨りて、無雜作に投げ込んで置けば宜い。

第二 陸上競技場の設備。

陸上競技場の設備に關しては走路の作り方が一番重要である。

走路も完全なるものは容易に造られない。理想的に云へば走路は五角以上の多角形が一番好い。何故だと云へば廻り角が皆鈍角の角を取つたものとなつて不公平が減ずるからである。然れども此の如き走路は極めて廣大なる運動場でないければ造られないから、普通の學校では先づ望を絶たなければならぬ。

普通一般に造り得るもので比較的完全に近きものは長方形の角を丸めたるで、長邊の長さが尠くも百二三十米突あるものが一番好い。これは百米突競走には曲線の走路を思ひからである。

さて長邊の長さが尠くとも百二三十米突もあれば、短邊の長さ等即ち走路一周の長さは何程になつても好いかと云ふにそうは行かない。これには自ら一の條件がある。

理想的完全走路

走路

普通完全の走路

走路の必要條件

走路の設計をするには、先づ第一に競技場坪外の觀覽所の上席を定め、其の正面の少しく右方に決勝線を設け之を起點として

- (一) 其の左方に尠くも百十米突の直路あること。
- (二) 二百米突の發走線の前方少くも五十米突の直路あること。
- (三) 四百米突の發走線が廻り角に接近せざることを。

此の三要件を具備する様に走路を造らなければならぬ。

第一の條件は百米突競走に「ハンデカップ」を附するときの便宜を計るからて、第二のは二百米突競走は始めから先を争ふものであるから第一の廻り角迄に多少「スパート」の餘地が欲しいからである。而して第三の四百米突は最も六ヶ敷競走であるから、始めより落付かせるには廻り角から發走させない方が宜い。走路の損得より云へば著しき差はないけれども、競技者の心持を好くする爲には非常の關係がある。謂はゞ一の主觀的障害で理外の理である。

五百米突以上ならばどんな所から發走しても構はない。

右の外走路の造り方に注意すべきは、廻り角の曲線と長方形の短邊の長さである。

今一つの條件

一周三百米突の走路の利便

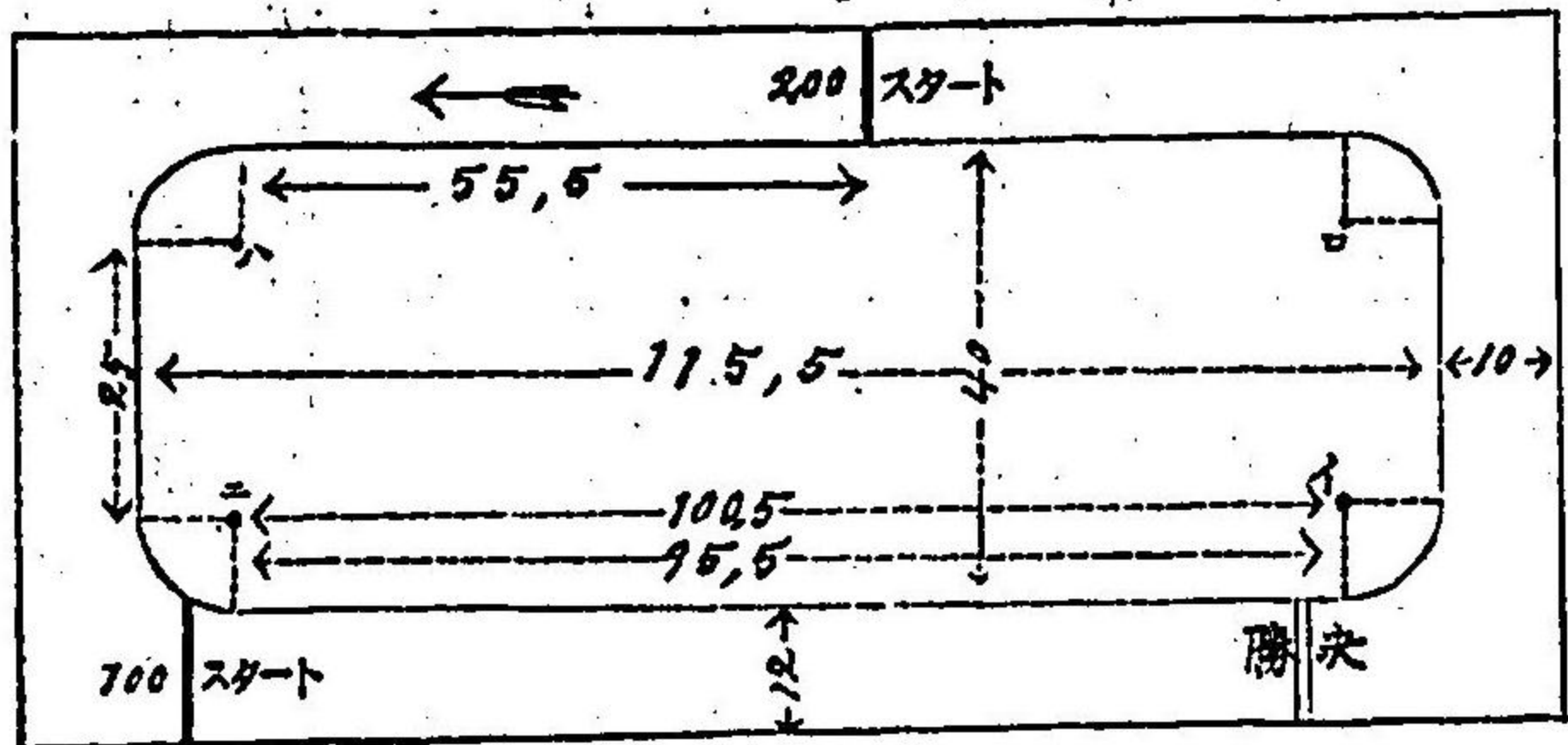
廻り角の曲線の工合には色々な説がある。擲物線形で先に行く程急になるが良いの、弦月の内輪の如き形が良いの、其の他色々な説もあるけれども、要するに走風を異にし、體重を同ふせざる各個人に對し、一般に適する一定の形を案出することは到底出来ぬことである。實際の經驗に依れば半徑七八米突の圓形の曲線が何人にも適する形である。

短邊の長さは長さよりも寧ろ短い方が宜い。普通の運動場では充分長く取ることが出来ず、無理に長くしても此處の直線部で「スパース」する譯に行かず、且つ二百米突發走後の直路を短縮する不利がある。故に長方形の中は四十米突乃至五十米突を適度とする。

以上の諸條件に基づき設計をすれば、數種の設計が出来りけれども、實用上最も便利なのは一周三百米突の走路である。此の走路だと百米突の發走線は四百七百、及び千米突の發走線となり、二百米のは五百八百の發走線となり、決勝線は又三百六百九百の發走線となる便利がある。勿論此の便利があるから此の大きさ

撲籠走跡

圖 二 十 七 第



数字は米突を示す
()の数字は曲線の中心

が良いと云ふのではない。たゞ全国の諸学校の運動場の大きさに當て箝めると丁度此の位が適度であるから、夫れなら寧ろ此の利便ある形にするが宜からうと云ふだけのことである。

以上述べたる所に基き試に設計をして見ると上圖の如きものが出来る。
此の設計では四隅の曲線部を半径七米五の圓の四分一とす。即ち曲線部の全長は直径十五米の圓周と同じである。然れども實際人が走るときは走路内隅の線上を走らぬから、其の外方凡そ人の體の巾の半分丈け離れた並行線上を走るものとして計算しなければならぬ。故に茲には人の巾を〇米六〇と假定して走路の長さを計算した。此くすると直線部の長さは内隅線も實際の走路も同一で、違ふのは曲線部

只一の欠點

の長さのみである。即ち實際の計算では、其の半径を七米五に〇米三を加へ、七米八として其の周圍を求めれば丁度四九米突になる。
そこで長方形の短邊を四〇米突とすれば、其の短直線部の長さは二五米突となる。二邊にて五〇米突、之に四曲線部の全長四九米突を加へると、九九米突となる。残り二分すると長直線部の長さで即ち百米突五〇である。
上圖左方の外隅より十二米突五の所を、百米突の發走線とし、右へ百米突取ると、決勝線は右下の曲線部の取付きより五米突五手前の所になる。之より左へ二百米突測ると其の發走線より第一の曲線の取付き迄五五米五ある。
走路の巾は十米突とし、下方の一方丈けは二米突増して十二米突である。是は十五人迄百米突競走に加はり得るを目的としたのである。
此の設計の一の欠點は四百米突競走の衡平加率を有する優者の發走點が曲線部なることである。大した害はないが欠點は欠點である。此の點を除けば普通の走路としては先づ完全に近いと云つて宜いと信ずる。
走路の形と大きさは以上の諸條件に基き、各校運動場の廣狹形狀に應じ適宜設計

圓形又は橢圓形
走路は最悪なり

すべきで、茲には其の一例として其の模範を示したに過ぎない。往々圓形又は橢圓形の走路を造るものがあるが、此等の走路では始めから不公平の競争をさせることになつて、萬事公正を目的とする運動會の本旨を没却するものである。是非改めなければならぬ。

走路の路面

次に走路の路面の事を一言しよう。

運動場は充分地ならしをして、正しく水平になつて居なければならぬが、此く迄金をかけたのは滅多にない。普通のは皆不齊に傾斜して居る。中には水排きの爲に態々或る一方に傾斜させて居る。心なき土木技手の手に懸つたらば仕舞である。排水を能くするには運動場内に碁盤目に溝を堀り、其の中に小砂利と砂とを填めて置かなければならぬ。甚だしく費用を要することでもないから、世の爲政者たるもの、教育の爲に此の費用を出してやるが宜い。排水が悪く地盤が水平でない、運動場使用の不便多きのみならず、何の運動でも公平に行ふことは出来なからぬ。

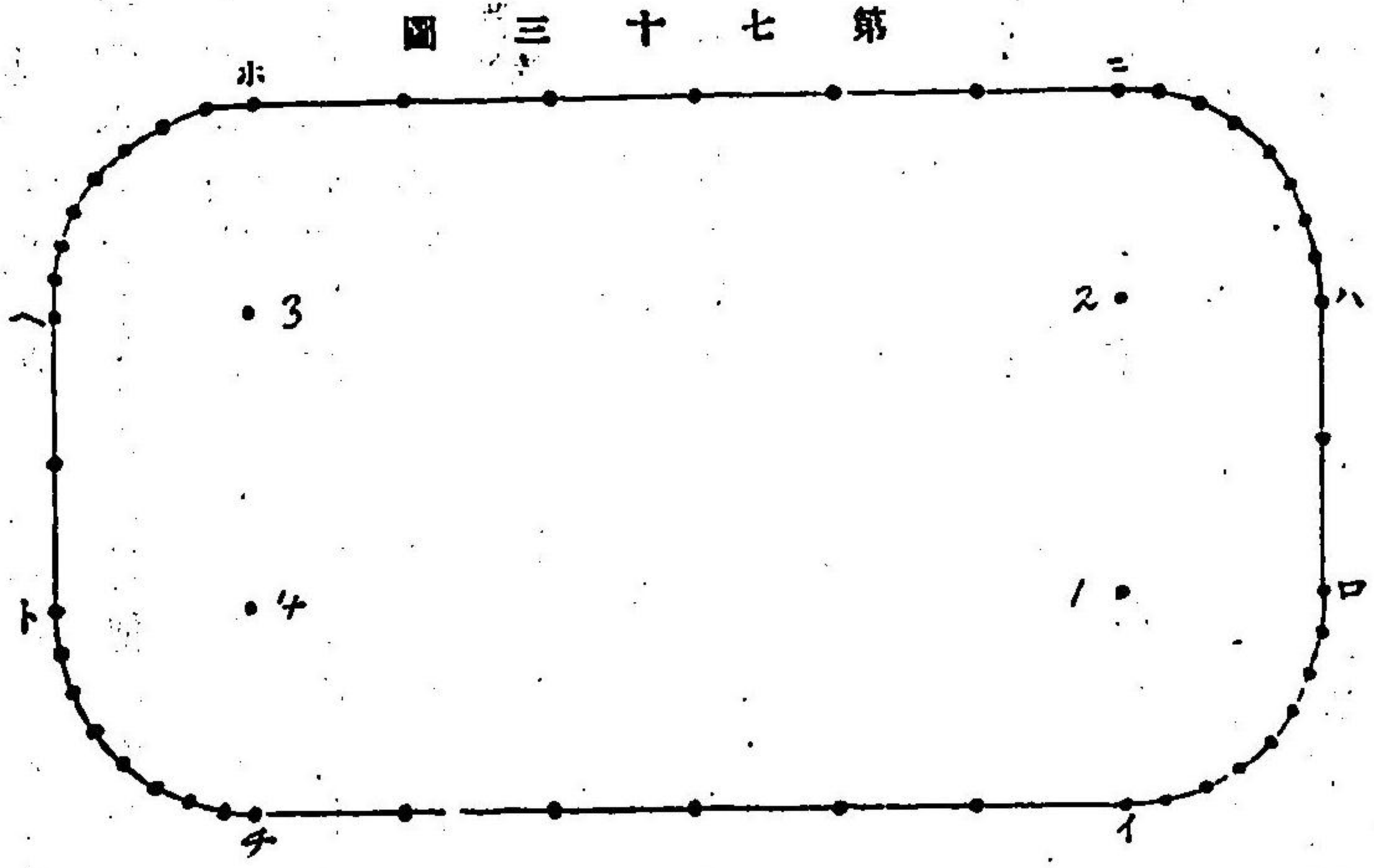
さて走路は全く平坦でないとならぬ。目に見えぬ程の傾斜があつても、降りには樂

隅角傾斜式

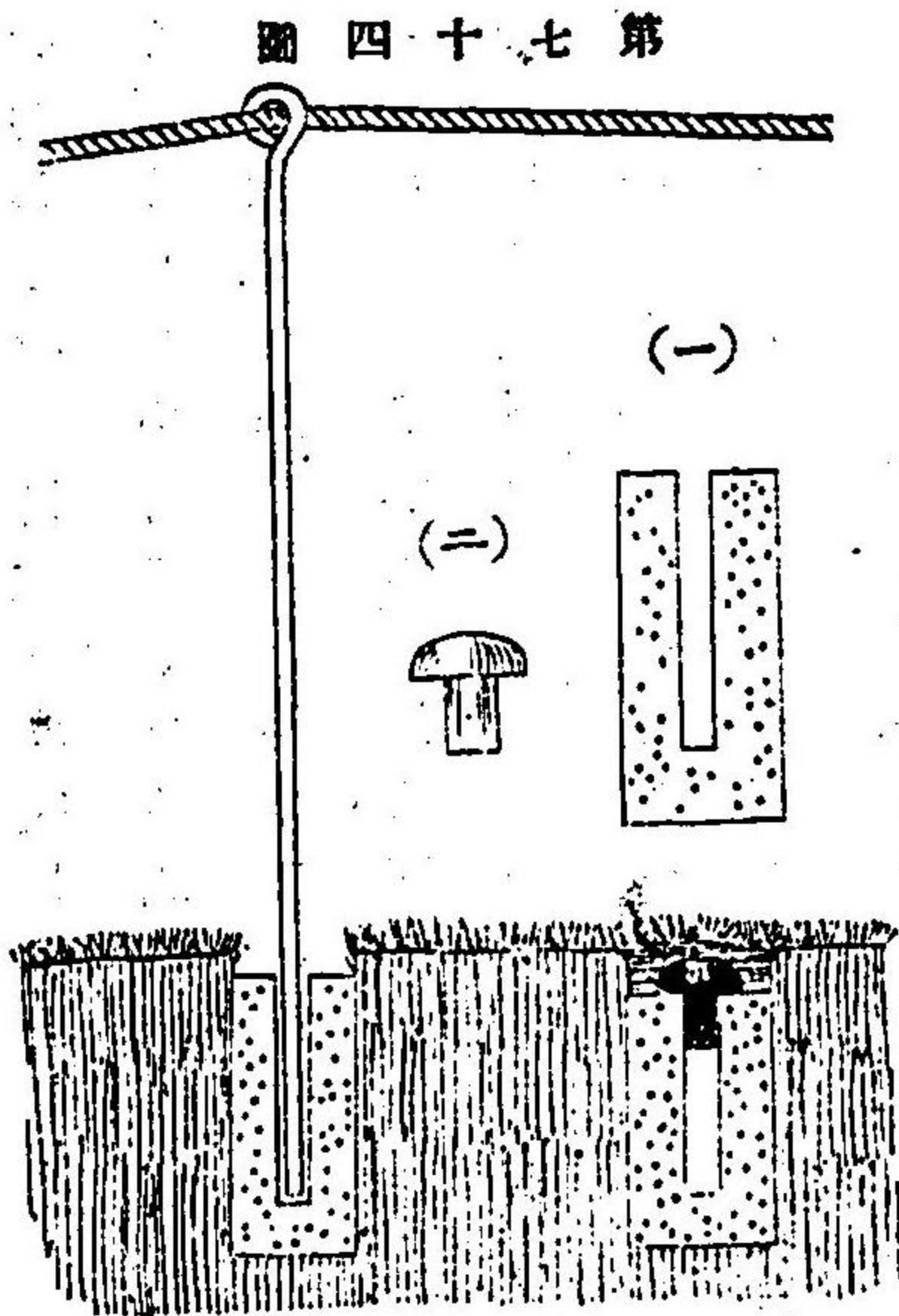
であるが、登りが甚だ苦いものである。而して廻り角丈は成し得べくんは走者の遠心力を殺く爲に外側の方を少く高くしたいものである。此の勾配は成る丈け急な方が良し理であるけれども、餘り急に過ぎると外埒に沿ひたる所が、曲線部の前後、餘程遠くまで斜坂になる不利があるから、實地に就いて適宜の勾配を撰むか宜い。第七十二圖の設計は廻り角に傾斜を附する場合には極めて不完全な設計となる。何となれば百米突競走のとき、外埒に近く列べられた者程、發走の際斜坂を馳け下る利益があるからである。故に隅角傾斜式の走路を造るときは、此の不公平を除く爲に長方形の縦長を今少し延長しなければならぬ。しかし此くすると自然の結果として二百米突の發走線前の直線部が短縮する不利は免れない。

走路の路面は石炭の燒屑と砂と混ぜて固めたのに限るけれども、これも經費其の他の都合で出来なければ、芝を植ゑ能く之を培養して充分に繁茂せしめ、競技の前日迄に短く丁寧に刈込むのが一番好い。此くすると滑ることが無い。然し多くの學校では、運動場には芝生も何もなく、たゞ砂利を敷き詰めたる上に所々雜

内埒の造り様



第三十七圖



第四十七圖

草が生えて居ると云ふ有様であるから、之
すら行はれない。此の様な運動場では止む
を得ないから土質相當の手段を講じるよ
り外仕方がない。
次には内埒の造り方を述べよう。
運動會毎に、青竹と杭を用ゐて内埒を造ら

せるのは、不經濟であるのみならず、年中絶えず小集會を催ふす利便を得ること
は出来ぬ。故に初度には少し費用を要するけれども、左に述べる様な設備をして
置くが一番良し。

前圖の如く内埒の線を實測し、直線部は約五米突、曲線部は約二米突毎に深さ一
尺二三寸程の穴を掘り、又曲線の中心點たる(1)(2)(3)(4)の處にも同様の穴を掘る。
此の穴には第七十三圖(一)の如く長さ一尺一二寸の四五寸角の石材、又は徑五寸
位の松材の中心に、深さ八九寸徑六分に少し太い位の穴を穿ちたるものを埋め、
而して此の穴には鐵の鑄物か又は桎材にて、同圖(二)の松茸形の栓を以て蓋をし
て置き、其の上一寸程土を蔽ひ地均しをして置く。但し曲線中心點に埋むるもの
は穴のなきものを用ゐ、且つ其の上面を地平面に平に現はして埋め、何時でも直
く分る様にして置く。

次に徑六分の鐵の「ボルト」の頭を曲げ、徑六七分位の眼環となしたるものを、内
埒の穴の數丈け拵へる。此の埒鐵の長さは、之を土中に埋めたる捨抗の穴に挿し
て、頭が丁度人の腰の邊に在る位の長さがあれば宜い。先づ三尺五寸程として置

捨抗

松茸栓

埒鐵

埴索

けば宜し。

さて走路を造るときには、先づ(1)(2)(3)(4)の中心を起點として(1)(2)(3)(4)等の捨杭の位置を見出し、夫によりて總べての穴の處在を求め、表面の土を掘り起し、松茸栓を抜き、捨杭の穴に埴鐵を挿す。夫れから徑五六分の長索を持ち來り、其の上端の眼環に通じて之を張れば、視て居る内に内埴は出來上る。會が終れば此の索を外づし、埴鐵を抜き取り、松茸栓を挿し、土を蔽ふ。亦視て居る内に索との通になる。此の設備があればいつ何時でも、思ひ立つた時に即座に内埴を取附けて競走を試みることが出来る。

捨杭は木よりも石を用ゐるが宜い。造る時の費用は少し増すけれども、石ならば命知らずである。木のは長くて十年とは持たぬ。

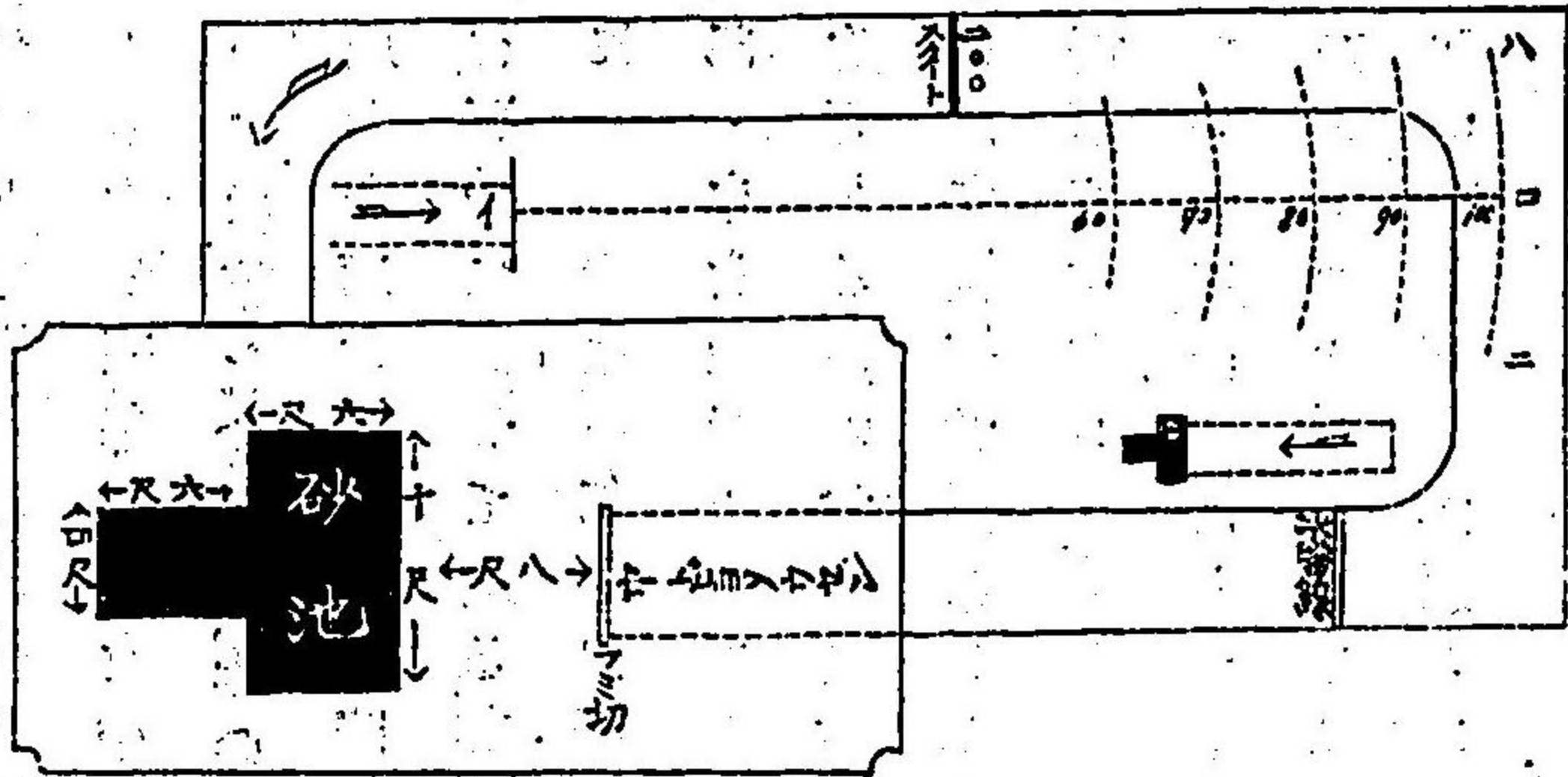
捨杭を探り當るには、此の邊と思ふ所を鐵の火箸にて衝いて見れば直ぐ分る。時々小集會を開いて居れば、表土の工合で直ぐ知れる。運動場が芝生ならば、其の上だけ朝鮮芝の如き異つた芝を張つて置けば尙ほ便利である。序に一言して置くのは、芝生には首着の種を落さぬ様注意が肝要である。若し首着が僅かでも生え

發走點決勝點の埴鐵

埴索の太さ長

内埴内の設備

第七十五圖



たら直ぐ之を抜き去らなると見る／＼芝が負けて仕舞ふ。

發走點及び決勝點の處には、埴鐵の定まりたる距離に拘らず、特に捨杭を埋め埴鐵を建てる様にしておき、置くが便利である。普通の埴鐵は白色ペンキで塗り、此の分は赤く塗り置きて一目瞭然たらしむるが宜い。

又埴に張る索は太いものには及ばない。成るべく細くして(徑四分前後)軽い程が宜い。持運びに人手を要する事が少なくて済む。又此の索の長さは一本三十米突位にして置く方が便利である。長過ぎると持運びにも取扱にも不便である。

走路の事は一通り述べ終つた。これより内埴内の設備の事を述べよう。

クリケットの基線

飛躍技の砂池

「クリケット」球投げの基線は第三隅角附近に設け、基線の中心(イ)の前方六〇米突の所より十米突毎に(イ)を中心として、弦線を書き、(胡粉を濃く水に溶したので書き) (ロ)に標旗を建て、此の兩旗の間隔は三十米突とする。

観覽所の上席の前方に飛躍技の場所を造る。砂池は深さ一尺五寸程掘り起し、砂と土を等分に混ぜて造る。其の形、及び寸法は圖の如くする。此の池の形を圖の如くにしたのは、(イ)部は巾飛びの爲に用立て、(ろ)部は高飛びの爲に用立てる爲である。(い)部の巾を四尺としたのは、四尺以上だと、飛んだ長さを測るとき不便尠からざる爲である。(ろ)の如く左右に翼を張り出したのは、右又は左のスコッチ流の高飛びを爲す競技者があるからである。棒飛びのときは(ろ)部に藁布團を敷く。

運動場が芝生ならば、クリケット基線の前と、飛躍技踏切の前に、圖の如く芝を刈込み、豫走の便を計るべし。又飛躍の砂池は成るべく、観覽席に近いが宜いけれども、左、スコッチ飛を爲すものに充分の豫走地を内埒内に取ることを忘れてはならない。若し都合が悪ければ、高飛競技中一時内埒の埒鐵と埒索を取外すが宜し。

必要の區劃

観覽場の設備

種投げは場内適宜の地にて行つて宜い。砲丸投げは砂池の左方適宜の場所で行へる。

綱引や旗奪ひ競走、犬追物競走、打毬競走、一脚、三脚競走等は場の中央が宜い。柵飛び競走、流鏑馬競走等は百米突走路で出来る。

障礙物競走の障礙物中、固定のものは他技の邪魔にならぬ所に設け、即時取付け、又取外づしの出来るものは、どこでも構はない。

第三 観覽場の區劃及び展望

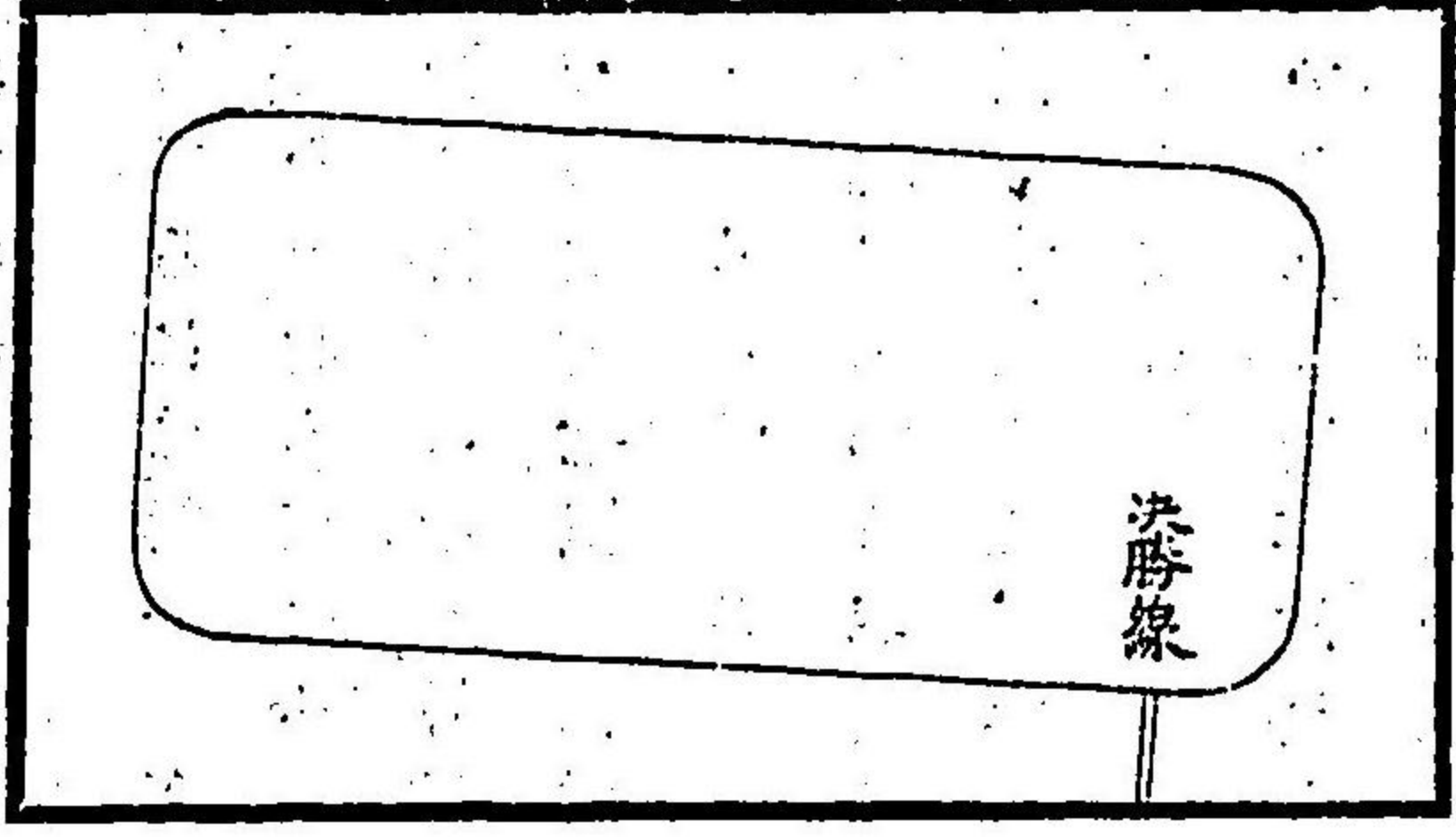
観覽場の區劃は、便利、整頓、及び展望を主として設計しなければならぬ。

此の區劃は實地に就いて繩張りをなすべきものであるから、茲に之を述べることは出来ぬ。たゞ大體の標準を述べて見れば、第一に特別観覽席を定め、之を中心として他に及ぼすべく、而して所要の區劃は、(一)特別観覽席、(二)普通來賓席、(三)父兄席、(四)學生席、(五)役員席、(六)通信記者席、(七)接待所、(八)便所、(九)救護所、(十)競技者控所、及び仕度所、(十一)奏樂所、(十二)賞品陳列所と、先づこれ丈の區劃が必要である。而して各席の廣狹は元より會衆の人数に依りて適宜見計ふべしである。右必要の區劃

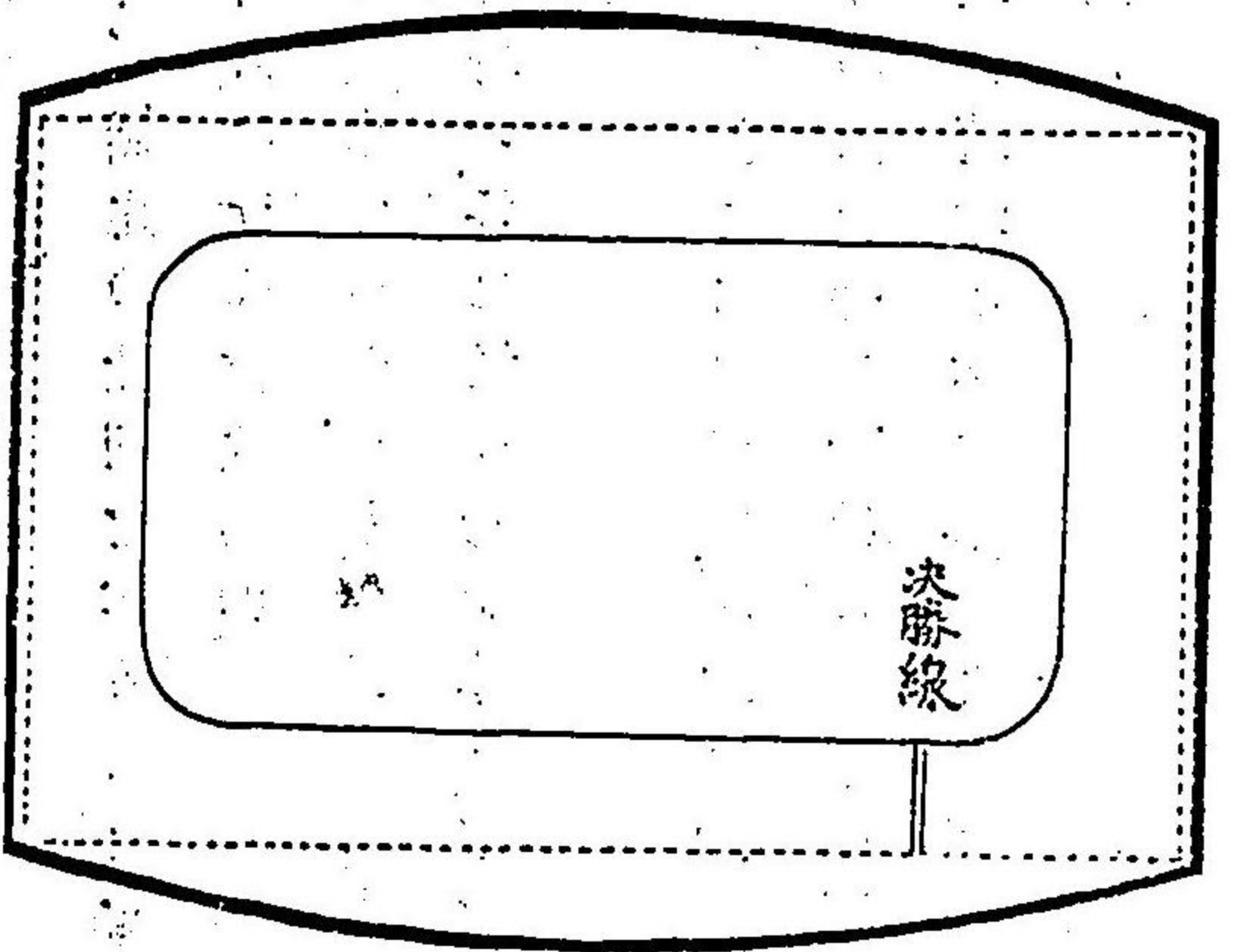
賣店	<p>を取りたる餘地を一般參觀人に開放し、自由に觀覽せしむべく、又若し必要なるときは構内目立たざる所に茶菓煙草等の賣店を設けさせるも宜い。然し一時流行したるが如く學生に此の賣店を出させるのは弊害が生じ易いから禁止するが宜い。</p>
椅子	<p>觀覽席は青天井を通則とす。金が許すときは殊別觀覽席、接待所、競技者控所丈けに日蓋を設くるが宜い。各席の間仕切は高さ三尺程の粗末なる柵を設ければ充分である。幔幕などで仕切るのは展望を妨げるから宜くない。多數の來賓に悉く椅子を供へることは出來ないから、これは老幼者及び婦人丈けに供し、男子は立見て澤山である。何れの運動會でも注意の届かぬのは便所の設備である。これは十分數を多く要所へに設くるが宜い。數か少ないとやたらに垂れ流す不行儀者が出來る。婦人來賓の爲には殊に注意して目立ざる様に念を入れて設備して置かぬと行かぬ。此の點はどこでも注意が足らぬ様である。</p>
便所	<p>役員の席は特別觀覽所の入口に接して設け、其の一隅を割いて通信記者席とし、此所には椅子、テーブルを用意して置かなければならぬ。</p>
役員席 通信記者席	

展望第一とすべし

第七十六号
外塔觀覽線



第七十七号
圖



總じて以上の觀覽席よりはどこに居ても運動場の隅から隅まで能く見える様に設計しないと行けない。多くの運動會では此の點の注意が足らず、多くは人足任せにして居るから展望極めて不充分で會衆の公徳が下落するのである。

展望を良くする秘訣

る。

展望を能くするには、第一に各席間に幕などで無用の仕切を作ることと止め、次には観覧席の正面の線に少しく工風を運らさなければならぬ。

第七十六圖は普通の如く外埒を其のまゝ、観覧席の正面にし、内埒を少し斜に振るのである。第七十七圖は内埒を振らずに外埒の外に楕圓形を作り、之を観覧席の正面線とするのである。

此の二法の孰れにか依れば、観覧席に在る人はどこに居ても、内埒に沿ふて走る競技者を絶えず見ることが出来るから、隣りの人を押し除けるなどの不行儀をする者はなくなる。展望に申分なき運動會場は著者不幸にしてこれ迄一度も見た事がない。これは是非改良したいものである。

第四 會場の粧飾

會場の粧飾は信號旗、大小日章旗及び旗取り競走に用ゐる小旗等にて淡泊清楚に飾れば十分である。學生の手細工に成る縁門などは宜いけれども、例の生人形の見世物然たる造り物の陳列などは、ノンセンスである。信號旗は船舶用の本物

粧飾

旗

時計

小銃

競漕會用品

を用ふべし。例の見世開き用として損料屋で借して居る金巾製のペラ／＼物ならば、却て無い方が好い。目障りになつて人に不快の感じを起させる。詰らぬ飾物、下手な音楽、及び此の損料旗は運動會の美を減殺するものである。

第三節 競技用品

第一 競漕會用品

競漕會に入用の物品は左の通りである。

- (一) 小銃二
- 合圖用と判定用で二挺入用である。判定用のは二連獵銃が便利である。
- (二) 時間計測用時計 二個
- 通例「ストップウォッチ」と稱するものにて宜し。二個得難ければ一個にて間に合はすべし。
- (三) 競艇の舳に建てる旗、合圖用判定用の旗。

信號旗

これは艇數だけ入用である。合圖用の旗は餘程丈夫に竿に結んで置かぬと、屢々振つて居る内に旗が飛んで行くことがある。使用前能く吟味して置かぬと行かぬ。詰らぬことの様なれども、實地これが爲に大狼狽を招くことが珍しからぬから茲に特記して置く。

(四) 信號旗及び信號手旗

これは粧飾用以外に準備し實地の信號用に供へる。

傳話管

(五) 傳話管 數個 Speaking-trumpet.

合圖用審判用及び水陸通話用に用ゐる。これは本物は高價で且つ平素餘り入用がないから、ポールド紙で手製して間に合はすが宜い。形は詰り蓋音器の管の通りで長さ三尺、口の徑一尺位にし中程に細紐にて「カバン」の把手の如きものを附けて置くべし。

曳綱

(六) 曳綱一本

これは競艇を發走線まで曳き行くに用ゐるのである。

抽籤器

(七) 抽籤器 二個

陸上競技用品

之は大きな竹の一節にて筒を作り、一方に小さき穴を明け、一つの方には競艇の名を書きたる竹箸の如き籤を入れ、今一の方には一二三四等と記したる籤を入れ、乗艇と整列順の籤を引かしむるに用ゐる。

第二 陸上競技用品

(一) 投擲技用

一 「リケット」球二個、代用には「ベースボール」の球。

一 名前札若干本、これは投手の姓名を書き球の落ちたる地點に挿すので、巾一寸長さ一尺位の板切れの下端を尖らし作る。

一 砲丸 二個、これは丸玉に限る。

一 槌 二個。

一 槍 若干本、これは著者も未だ實驗したる事がない。他日試製せしめて實地に使用して見ようと考へて居る。

(二) 飛躍技用

一 尺度柱 一對、度盛りは米突式にすべし。有合せあらば何式でも宜い。足

は十字形にするよりも丁字形にする方が宜い。十字形のは、スコッチ流のとき目障りとなり、爲に兩柱の間隔を不必要に長くする不利がある。

一 尺度柱附屬の踏臺一對、細き竹の刺又二本、此の踏臺の高さは五尺。

一 巾飛び用土均し大小各一本、同用踵痕竿一本。

土均し、大の方は長さ二尺五寸巾四寸の六分板に長さ三尺五寸の柄を付ける。小の方は一尺二寸に三寸で柄は二尺。

踵痕竿は踵の始めて地に着きたる地點を標るすに用ゐるので長さ三尺ばかりの普通の眞直な細竹で宜い。

一 標紐即ち飛び越え紐。

これは高飛びには細く腰の強きカン竹の二本繋ぎにしたのが一番宜い。代用としては巾二分のテープか又は綿糸にて組みたる徑一分五厘位の紐が宜い。テープ又は紐を用ゐるときは、高飛び棒飛び兼用とし長さ約六米突とし兩端に麻袋に七號か八號の散弾を一斤程入れたる錘を吊るべし。袋の大きさは半斤入りの茶筒位に作つて置かないと、過つて此の散弾袋が足に引懸

りたるるとき、膝などを打撲する恐れがある。大きな袋に少し許りの鉛の細粒が入れてあれば、過つて打たれても痛くない。

一 棒飛び用竹竿 若干本 長さ一尺位の竹筥二三本 手頃の竹の節を能く削り、火にかけて少し矯めたのが好い。石衝きは一般に蓮切りにして居るのは好くない。蓮切りのを使用すると石衝きの穴が深く掘れて競技のとき石衝が滑つたり又は體が上つて棒が直立すると石衝きが土中に沈下する等の不利がある。此の故に石衝は節の下二寸程にて竹を切り、三方より鉋の刃を入れて餘り鋭過ぎざる三本爪とするが宜い。使用中此の爪の裏に土が填まつて固まれば竹筥にてほゞり出すべし。

一 葉布團 數箇。

これは棒飛の時砂池の上に敷きつめる。

(三) 歩走技用。

一 抽籤用紙片 若干。

これは厚紙を一寸四方位に切り、之に一二等の數字を書したるものにて、競

走者の整列順を定むるとき、其の人数丈けの数を、帽子の中に投げ入れて能く掻き混ぜ、一枚宛取らしめるので極めて便利なる籤である。抽籤終れば返して貰ひ、ポケットに入れ置く。十二番銃の薬筒に用ゐる厚き蓋紙を用ゐれば作る面倒がなくて宜い。

- 一 ビストル 一挺。

これは發走の合圖に用ゐるのである。小銃よりも此の方が隠して打つに都合が宜い。

- 一 テープ 巾一、二インチ位のもの數十尺。

これは決勝線に用ゐるのである。

- 一 時間計測用時計 二個。

競漕用のと同じ、競走の時間を計るに用ゐる。東京帝國大學にては田中館教授の監督の下に電氣仕掛にて精密無比の計測をして居る。一秒時の千分の一迄も明に分る。詳しい事は茲に述べられないが、詰り合圖用の「ビストル」と決勝點の電流絶縁器とを導線にて電氣時計に結び付けありて、「ビストル」

電氣時計

を發射すると、「ビストル」の筒には仕掛けたる彈機的作用にて導線の「コンタクト」が始まる様にしてあり、又決勝線に張りたる「テープ」の一端が電流絶縁器に引懸けてあつて、第一着者の體が「テープ」に触れると同時に、此處で電流が絶縁される様にしてあるのである。

- 一 白金巾 若干尺。

これは一脚、三脚競走にて脚を縛るに用ゐる。

- 一 旗取り、旗奪ひ競走用色旗若干 旗立若干。

旗立は竹の節で作り、土中に打込み之に旗を建つ。

- 一 流鏑馬、打毬、犬追物競走用の標的、犬球、若干。

- 一 柵飛び競走用柵 十箇所。

- 一 金巾三尺帶 若干。

これは、「ハンデカップ」附きの競技者に締めさせるのである。色は黒か紫が宜い。紺金巾では妙でない。此等の優者に帽子を冠らす所もあるけれども、出來合の帽子は寸法が合はなかつたり、高飛び棒飛びのとき帽子が飛び紐に觸

れることがあるから帯が宜い。京都帝國大學では名譽帯と稱して赤帯を締
めさせて居る。

(四) 雜品。

一 「バケツ」一個、胡粉末若干、荒神帚二三本、荒繩一把

これは發走線、決勝線、「ハンデ」付き走者の發走點、投擲技の基線、「ク
ケット」の落下地圍線等を地面に書くのに用ゐる。

一 黑板、二個。

これは各技の成績を揭示するに用ゐる。

一 携帶揭示板、一枚。

これは通常の障子か戸板を用ゐ、之に各技の成績を大書したる紙を貼り附
け、人足に擔かせ、一周せしめ、黑板に遠き觀覽者の便を計るので頗る便利の
法である。此の揭示板を用ゐるときは附屬入用品として墨汁、筆、紙、糊、刷毛等
を忘るべからず。

一 テーブル、一個。

引出附きが良い、料紙、鉛筆、小刀、錐、鋏、文鎮、細き麻糸、貝釦、縫針、木綿縫糸等を備
へ置き、不時の用に供すべし。此等の物品は詰らぬものであるが、此の詰らぬ
ものが急に間に合はぬのに困ることが度々ある。

一 役員の徽章 若干

小切れなり、何なり、適宜のものを用ふべし。聯合運動會でも開き、面識なき人
の多勢集まるときには、普通洋服の胸部に着ける徽章は何の役にも立たな
い。群集中能く見分けられる様にするには、各色の金巾を手拭位の長さに切
りて、帽子の上に鉢巻きをするに限る。運動會のみならず、多勢集合するとき
は、此の手段を採れば混雜の半以上を減ずることが出来る。

一 鈴、一個、呼子、數個。

鈴は各技の始終を報じ、呼子は合圖者審判者間の信號の一として用ゐる。
一 競技者仕度所の備品一切。

此の内には手洗鉢、小姿觀、洗足盥、土壇、茶碗、飲用水、雜用水、帽子懸け、衣類懸け、
柱時計等の器具を備ふべし。何處の運動會でも此の設備は兎角不完全で、競

技者は競技後手足を洗ふことも出来ずに困つて居る。又多少設備があつても番人なり使丁なりが能く働かざる爲め、飲水もなく、雑水もなく、茶碗なども塵だらけと云ふ様な事が多い。役員慰勞費などこそ大削減を加へても、此等の設備は是非完全にすべきことと考へる。

一 審判者合圖者用帳簿

様式は附録として巻尾に附ける。

第四節 衡平率 Handicap.

競技は諸事公正を主とし、漕路走路の設計より、使用器具の末に至るまで、事細大となく始終此の主義の一貫を計らなければならぬ。競技に衡平率を設くるのも全く此の主義に基くのである。

此の「ハンデカッブ」と云ふ言葉の本來の意義は競馬競走競帆等の競技に、始めより分つて居る競争者間の優劣の懸絶を取り除き、對等互角の勢を有せしむる爲に、或は強馬に重量を負擔せしめ、又は弱者に若干距離先發せしめ、又は實際の競

「ハンデカッブ」

「ハンデカッブ」の字義

Scratch.

争時間より若干時減じて計算してやる等の恩典の事を云ふのである。故に競馬で「ハンデカッブ」と云ふときは早い馬に負擔させる鉛の量になり、歩走技では弱者が貰ふ先發の距離となり、「ヨット」競帆では、遅い船に先に帆を開かしめ、又は一齊に開帆せしめて到着時間より規定の時間を差引くことになり、投擲技、飛躍技では、弱者が實高又は實距離に貰つた交けの「ハンデカッブ」を加へて算することになる。最優者即ち此の恩典に與らざるものを英語では「スクラッチ」と云ふ。又此の「ハンデカッブ」なる語を働詞として用ゐるときは却て恩典に與らざる意味になる。即ち他に比じて割を悪くされて居る意味になる。種々な意味に使用せられる原語であるから、一々場合に應じて其の意義を解さなければならぬ。左に二三の用例を示そう。

He is handicapped 50 pounds.

彼れ馬は五十斤負擔させられる。

She is allowed 10 seconds.

あの船は十秒貰ふ。

He is given 10 yards' start.

彼は十碼先きから出る。

100 Yards race. Handicap.

百碼競走、ハンデカップ付。

100 Yards race. Flat.

百碼競走、ハンデカップ無し。

其の他の用例

「ハンデカップ」なる語は他の勝負事にも右に準じて用ゐられる。碁打が對手に何目呉れると云ふのも、將棋のとき一方に或る駒を使用させぬのも、角力に或る手を封じしるのも、玉突に或る数を貰ふのも、擊劍柔道等の試合に三本(番)と二本(番)と同等に算するのにも、皆均しく一種の「ハンデカップ」である。總べて速力、體力、智力、技術の懸隔を除き、對等の勝負をさせる主意に基くのである。適當の邦語が無いから茲には假に「ハンデカップ」と譯して居る者を加率負擔者と譯して置くけれども、實用上には新規に「ハンデ」と云ふ日本語を製造して名詞にも働詞にも使用する方が便利であると思ふ。

「チャムピオンレース」には「ハンデ」なし

各種ハンデ

此の「ハンデ」は前にも述べた通り、優劣の懸隔を去り、互角の位地を與へ、以て總べての勝負事に趣味と熱心とを加へ、之を奨勵する手段であるから、絶對的に優劣を争ふ場合即ち「チャムピオン」競争のときには無論適用することはない。此の衡平率には絶對的の比率はない。其の時々最優者に對して比較的に定むべきものである。競技會前に委員の手にて相當の率を定むべきである。

「ハンデ」は右述べた如く、重量、時間、高さ、距離、及び先發距離の五種がある。而して之を實施するには二た通りのやり方がある。優者から減すのと、劣者に加へるのが即ち之である。孰れの方法にしても、其の時限りの衡平は保たれるけれども、年々の成績を比較し、又は他校との比較を取るの便宜を計るには、少しく考へて定めなければならぬ。次に各技に就いて之を詳述しよう。

(一) 水上技。

水上競技即ち競漕、競帆、競泳は艇種、風力、潮流の條件を一定することが出來ず、随つて年々の比較又は他校との比較を試みる必要はないから、どの方法でも構はない。

(二) 歩走技。

英米流では、スクラッチが規定の距離を走り、他の「ハンデ」を貰つて居る者は夫れ丈け實際に走る距離が短縮して居る。即ち百碼競走だと、スクラッチ一人が實際百碼走り、他は皆九十九碼九十七碼又は九十五碼と云ふ丈けしか走らぬ。此の慣例だと、スクラッチが必ずしも第一着にならないから、従前又は世間との比較は取られない。故に最劣者を規定の發走線に就かゝめ、「ハンデ」付きの優者を其の後へ下げる方が宜い。

英米では運動界の従前の成績記録に對して競争する時には、特に其の候補者のみに對時間競走をやらせる例になつて居るから、通常の場合には右に述べた「ハンデ」のやり方で宜いのである。本邦でも此の例が開かれ、ば英米流でも構はないが、今日の所では右述べた様にして置くが宜い。

一體競走の「ハンデ」に時間を以てせず、先發の恩典を以てするのは、發走のとき、一々時計を見て一人宛合圖する譯に行かねと、到着の時に一人宛の時間を計ることが出来ないからである。けれども極めて遠距離の競歩走のときは時間を「ハ

ンデ」にすることも出来る。

(三) 投擲技及び飛躍技。

此等の競技では各人の實際に投げたる距離、飛びたる高さ、長さが、審判者の手帳に記されて居るから、他の成績に比較するには此の實距離を以てすべきで、「ハンデ」を差引計算するのは、只だ當日授賞の等級を分つに必要なるだけである。故に優者のを減じて、劣者のに加ても、何れでも構はない。

(四) 競馬。

競馬はたゞてさへ發走の合圖が困難である。此の困難なきは騎兵隊の軍馬丈である。又決勝時にも數馬首を駢べて駆け込むことがある。一馬毎の時間を計ることは出来ぬ。故に鞍に「ポケット」を附け、之に鉛の薄板を定められた重量だけ入れさせて、「ハンデ」とし、距離や時間を用ゐない。「ハンデ」の多いことを何の場合でも英語で Heavy handicap と云ふのは、此から出て居るのである。競技に直接關係はないけれども、筆の序に書いて置く。

番組委員

第五節 競技者組合せ及び番組の調製

競技會の事務の内、骨の折れるのは、競技者の組合せと番組の調製である。豫め委員をして十分に調査協議せしめて、遺算なき様にしなければならぬ。

第一 競技者の組合せ

競艇の乗員組合せは、漕手の體力技術を參酌し、之を甲乙丙丁等の數級に分ち、適宜に組合すべし。英國では漕手を三級に分ちて

- 1. Juniors. ジュニアオールズ。
- 2. Seniors. シニアオールズ。
- 3. Champions. チャムピオンズ。

と名づけて居る。ジュニアオールよりシニアオールに進むには、査定委員の議決に依るので、而して「チャムピオン」とは「チャムピオン、レース」にて勝利を得た者を指すのである。本邦では此の語が濫用されて「チャムピオンシップ」即ち勇將株を争ひに出る候補者は皆「チャムピオン」呼ぶ習慣になつて居る。こんな事も今少しく正

「チャムピオン」の字義

本邦昔の道場にも之に類する真正なる區別ありき

漕手の組合せ
強弱混合の不利

漕手の體正

歩走技者の組合せ

しくする方が宜いと考へる。英國では此の三階級を識別する爲め、帽子の鉢巻ハットバンドを三通りにしてある。ダトへバ各漕艇俱樂部の旗色が極まつて居ると、鉢巻にも其の色を用ひ、之に下級ジュニアオールは一本筋、上級シニアオールは二本筋、「チャムピオン」は三本筋が着けてあると云ふ風にして、チャンと區別が正されて居る。美風羨むべしである。漕艇の乗員の組合せは成るべく同一級のもの同志を以てするが宜い。一般の例である如くに、技術甚だしく懸隔して居る漕手を一艇に乗せるのは極めて殘酷な仕業である。強者も弱者も共に非常の苦を嘗めるのみである。故に此の混合乗員は練習的競漕が、座典的競漕の外は見合すが宜い。又組合せを作る前には漕手の體重を測り、成るべく左右舷の平均を保つ様にするが宜い。又番組には必ず漕手の姓名の下に其の體重を附記して置かなければならぬ。近來此のことを怠る者が多いけれども、漕手の平生を熟知せざる一般觀覽人には、此の體重が勝敗の豫測をなす上に非常の趣味と有益の參考を與ふるものである。番組に此の記載なきは漕艇界では、慥に一の怠慢である。陸上競技の組合せに面倒なのは主として歩走技である。けれども此の面倒は幸

幸不幸

にして二百米突以下の短距離に限られて居る。二百米突以下の競走は、一組の人員は走路の中から割出さなければならぬ、巾二米突に三名が極度である。これよりも多くすると公正な競争は出来ぬ。故に、競技者が多い時は適宜之を數組に分けねばならぬ。そこで此の組合せが六ヶ敷なつて来る。即ち茲に五十人の競技者があつて之を十名宛五組に分けるに抽籤にすると場合に依りては優者のみ第一組に集り、他の四組は比較的劣者のみとなり、多數の優者は不幸にして最後の決戦に加はることが出来ぬ。どうかと云ふて各組とも同じ様に優者劣者を配當すれば、劣者はたゞ撰拔競走のみに附合に出るばかりになる。

長距離には不幸なし
然り、飛二技亦
短距離競走の
毎級競走

新入生の組合
せ

長距離競走は多數一時に競走せしめ得るから撰拔競走の不幸はない。投擲技飛躍技にも此の不公平はない。故に短距離競走は競技者の數多き時は、其の體力に依りて甲乙丙等の數級に分ち、毎級各個に競走させるより外に良法はない。今一つ、總べての競技に關して面倒なるは、年々新入生の始末である。ハンデを實

番組の調製と競
技の種類と
時の問題

行しないときは面倒はないけれども、此の制度ある競技會では、新入競技者の技倆が分らぬから、今日の所では初年には皆所謂恩典者として置く慣例である。しかし競技の公正と云ふ點から考へると、初年には新入生のみは一の別團隊として競技せしめる方が宜いと考へられる。

此等の事は各運動會實地の事實問題で、生徒の年齢、人員等に依り適宜之を講窮し、勉めて競技の公正を失はぬ様にすべきことである。運動獎勵上にも至大の關係がある。

第二 競技の番組

番組を極めるには先づ競技の種類を極めなければならぬ。種類と云つても大概定まつて居るから、要は人員と時間の關係に歸して来る。競漕會では、漕手の人員多きときは一人一回に制限して仕舞へば面倒はない。然しなから陸上運動では人が多くなる程面倒になつて来る。

陸上競技中一人宛優劣を競ふ競技では、當日の競技に加はるべき者のは、多數中の最優者若干名に制限することが出来るけれども、數人同時に力を争ふ歩走技

はそう云ふ譯に行かない。又前者の方だと、新入生でも何んでも、一緒に競技せしめて宜いが、後者は今述べた様に新入生や、甲乙組等皆別々にしなければならぬ。此等の面倒があるから、競技の種類を増そうとすれば、前日中に悉く其の撰抜を済まし、當日は單に勝負のみに止めなければならぬ。當日晴れの場所てやらせ様と思はゞ、競技の数を減ずるより外致方ない。

此の事は實地問題として屢々運動會役員の頭を悩ます問題である。競技者の心情を思ひ遣りて前日落第の宣告を與ふるを氣の毒がりて、當日の早朝より競技せしむる所もあるけれども、觀覽者が集りて會場に活氣を帯びて來るのは矢張り當日の午後になるから、折角の心盡しも餘り効がなく、却て徒に役員を始め競技者を疲勞せしむるに終ることが多い。

此の故に競技の時刻は午後だけとし、競技の種類を成るべく多くして、時間のかゝる競技の撰抜は前日迄に之を済まし、當日は時間のかゝらぬ競技のみを多くすることにす。が一番宜い。全體競技運動の性質から云へば、單に少數優者のみに競技せしむるが正式であるけれども、運動獎勵と云ふ事も忘るべからざる事

番組の順序

であるから、時間の都合が出来る限りは多數をして晴れの競技場に上らせることを勉めなければならぬ。此の邊の事は最も運動會主催者の手腕を要することである。競技會の秩序を保ち、時間を重んじ、萬事敏速を主とすべしと云ふのも、實に此の邊の關係があるからである。

運動の種類が定まつたら、次に研窮すべきは番組の順序である。而して此の順序を極めるには左の事項に注意しなければならぬ。

- (一) 時間。
- (二) 競技者の體力休養。
- (三) 主賓に對する禮儀。

時間の關係

第一の時間の關係に就いては、先づ全體の時間を豫定し、實驗上巧に進行すれば四時間なら充分なり。此の時間中の一秒時も空しくさせる様に順序を定めなければならぬ。勿論或る仕事を迅速にやるのは、役員の手腕にも依り、競技者の心懸けにも依るけれども、番組の順序も大に關係がある。順序が悪いと、一技を終れる競技者に體力を休養させる爲に、次の競技の開始を少し遅延させたり、又は競技

體力休養上の關係

來賓への禮儀

選手就讀等々を番組の最後には置くのは惡例に非ざるべし

用具の取付け、取片付けを待合して時間を空しくしたりすることがある。此の點は大に考へなければならぬ。

次には競技者の體力休養を考へてやらなければならぬ。随分一人にて總べての競技に加はる剛の者もあるから、此の點の注意は極めて必要である。

次に考慮すべきは主賓及び遠來の來賓競技者に對する禮として、當日の主要なる競技及び來賓競技を主賓等に都合好き時刻に行へる様に順序を定める事である。選手競争を最後にするのは本邦運動會の慣例であるが、實に惡例の極である。獨り主賓をして之を觀覽するの機を得せしめざるのみならず、選手に對しても其の禮を欠いて居る。角力でも當日の主たる取組は中入前の最も多くの觀者に都合よき時刻に之を行ふてはないか、主要の競争を番附の最後に廻はし、時としては暗闇に提燈を點じて、チャムピオン、レースを行ふ事などのあるは、實に心なき限りと云ふべきである。かゝる僻事は單に競技者及び主賓に對するの禮でないのみならず、又運動の獎勵たる所以にあらざるのみならず、實に運動家の心情に甚だ忌はしき惡感化を與ふるものである。余輩は十數年前激しく此の説を

主要の競技を最終の目的とするは、最良の教育として、運動の効果を没却す

主張したけれども、一種の感情の爲に用ゐられなかつたのは今でも實に遺憾である。世の運動家及び運動會役員等が此の視易き理を曉らず、一人として本邦運動界の此の一大欠點を恠しむものなきは他に理由があるのではない。全くチャムピオン、レースに熱中の極、たゞ其の勝敗のみあつて更に他事を顧みないからである。熱中は喜すべし。たゞこれ等の不注意が運動界の種々なる惡風誤解の中心となつて居るのを視ると、是非とも一言せざるを得ざる様になつて來る。

運動會は情育の最良手段である。競技は勇者の闘である。君子の争である。勝て誇らず、敗れて痛まざることを吾人に教ふるものである。勝てば我を忘れて威張りたくなる。負ければ耻を忘れて負惜を云ひたくなる。勝敗ともに吾人平素の慎を忘れて、兎角に青年者に有勝ちの卑しき感情に制せられたがるものである。心情圓滿ならざる青年輩をして、貴賓列座萬衆環視の會場の制裁力に依りて、克己の堪へ難き劣情を抑制することを實驗せしむるのが、即ち運動會の運動會たる所以である。然るにこれを之れ察せず、青年競技者をして其の心情の奔馳するがまゝに放任し、單に負けたとときに工合が悪いから選手就讀は番組の最後にす

ると云ふ様な事をさせて置くのは、役員も選手も共に罪ありと云はなければならぬ。歐米人は流石運動の眞價を知つて居るだけあつて、「チャムピオンレース」は必ず番附の中程、即ち總べての會衆の揃つた頃に行ふことになつて居る。而して此の競漕後、勝者も敗者も抽籤競漕とて、抽籤にて今迄の敵味方の混合乗員を作り、一緒になつて熱心に競漕をして居る。之を今日我が運動界に往々見受くる選手の懇親會と稱して、關がりの「レース」に殆んど喧嘩分れをした選手等を促して一堂に會せしめ、儀式的の會食をなさしめて、感情の融和を計ると稱して居る。なに比して、如何にも耻けしい心持がする。競技場の禮儀として、教訓として、制裁として、又一般社會に對する運動獎勵の有力手段として、主要競技は是非番組の中程に入れることにしたきものである。

之を要するに番組の調製は極めて重要なることであつて、運動會を活かすも殺すも一に之に對する注意不注意に因るものである。決して輕々視すべからざることである。

第六節 審判

審判事務の當否巧拙

競技に一貫する大主義

「フエアプレイ」の字義

競技會の事務中最も重要にして細心の戒慎を要するは審判事務である。審判事務は實に運動會の死命を制するものであつて、其の失敗は直接に運動の德育的眞價を没却して仕舞ふ。又其の巧拙は競技進行の遲速に大關係を持つて居る。競技者の品性が高尚であると審判事務は誠に樂なものであるが、若し其の風儀が善くないと、世間恐らく此の事務ほど人の心力を苦しむるものはない。

競技には終始一貫して渝らざる原則がある。之を言ひ現はすには適當の邦語が無い。英語の Fair play と云ふ語は一語にして其の意義を盡して居る。此の「フエアプレイ」なる語は公正、純潔、善意、快潤、遜讓及び見事、天晴れ等の意味を悉く含んで居る言葉である。不適當の譯語を用ゐるよりも彼の「ハンデカップ」と同様邦語にして仕舞ふ方が宜い。

「ランソ」 「ゴップ」 「キート」 「レース」 「ステーション」等は近來既に邦語になつて居る。合羽、短靴、

は數百年前國人より貰ひ受けたる言葉であるが一般世人は在來の邦語だと思つて居る。Gentleman, Nonsense, Fair play Handicap. 等の英語は極めて調法な言葉だから新邦語として仕舞ふが宜いと考へる。

此の「フェアプレイ」は實に運動の精神であつて、競路の設備「ハンヂ」の制及び審判の原則、一として皆此の精神に基かざるものはない。抑も人間社會の事は何事でも此の「フェアプレイ」に依らなければ決して治める事は出来ない。古の武士は命の取り遣りにさへ此の「フェアプレイ」を重んじた位である。所謂憲政の美を濟すなど云ふ結構な事も、政治家なり、政治的公民なりが此の「フェアプレイ」を知らない内は決して望むことは出来ない。選舉法や議院法などの實行に、此の「フェアプレイ」を爲すことが出来ない國民には、決して立憲制度を甘く行つて行く事は出来ない。我が日出づる君子國の憲政の美を濟そうと思はゞ、小學兒童の時より運動に依りて此の「フェアプレイ」の美風を養ふことから先づ第一に勉めなければならぬ。世の教育者たり又運動家たるものが、彼の腐敗政治家の選舉の喧嘩などを好い手本にして、競技は勝ちさへすれば宜しなど考へて居る間は、所謂憲政終局の美など

立憲國民と
「フェアプレイ」

審判原則

其の一

は夢にも決して見ることは出来ない。

思はず横道にはいつた。これより審判の原則及び其の實行法を詳述しよう。

第一 審判の原則

審判の原則など、標題を掲げると、何だか大變六ヶ敷そうであるけれども、其の實は至て簡單である。即ち左の通りである。

- (一) 審判の主義は「フェアプレイ」なり。
- (二) 審判者は審判の全權を有す。
- (三) 審判は再審せず。
- (四) 審判は神聖にして抗議を許さず。

第一 審判の主義は「フェアプレイ」なり。

これは既に述べたる所にて明白であるけれども、此の原則より生ずる、必然の法則として、

天運に甘んずべし。 Abide by your own accidents.

と云ふこと、他人に妨害を與ふべからずと云ふ事が必要になつて来る。競技が始つたらば如何なる出来事が起つても、競技者は天運と諦めて潔く運命の奴となる覺悟を持たなければならぬ。競走中帯が解けた靴の紐が切れたなどして競走の中止を請求することの出来ぬは無論の事。競漕に艇具が破損する事があつても天運と諦めさせなければならぬ。若し此かる口實を許容すると、自己に利あらざる場合には、故意に審判者の目を盗みて艇具等の破壊を試みる卑劣漢などが出る恐れがある。又競漕又は、クリケット投げには、風力や潮流の不利を避け、又は其の利益に乗せんが爲に、故意に種々なる口實を設けて時刻の遷延を企つる卑劣漢がある。斷然此の姦策を禁じなければならぬ。又妨害の不正なるは云ふ迄もない。

其の二

審判權の所在

第二 審判者は審判の全權を有す。
審判權は一切審判者の手に在ること、恰も一國の統治權が元首の手に在るが如してある。審判者は自ら競技の開始を命じ、競争中競技者の行爲を監督し、且つ勝敗の判決を宣告する權利がある。然れども場合に依り、自ら此の合圖、審判、判定の

審判三權

其の委任

三權を實行するに便ならざるときは、其の權能の一部を他人に委任することが出来る。而して此の委任を受けたる合圖者又は、判定者は、審判者の委任に依りて始めて、合圖權又は判定權を得るのであるから、萬事審判者の指揮監督を受くべきは云ふ迄もない事である。然れども此等の場合に於ては、審判者は其の權能の一部を他人に割與するのであるから、合圖者又は判決者が極めて重大なる過失を犯し、明に競技のフェアプレイを害したる時に非らざれば、其の命令又は判定を取消すことは出来ない。

委任の事例

歩走技に在りては、審判者は合圖權のみ他人に委任し、判定權は自ら保有することが出来る。

競漕では審判者自ら合圖者を兼ね、判定權のみ他人に委任するが便利である。尤も之は審判艇艇ある時の事である。

其の他の競技では審判者は三權を一身に集めて差支ない。

第三 審判は再審せず。

審判は決して再審せざるを原則としなければならぬことは深き説明を要しな

其の三